

# 花葉

2006  
No.25

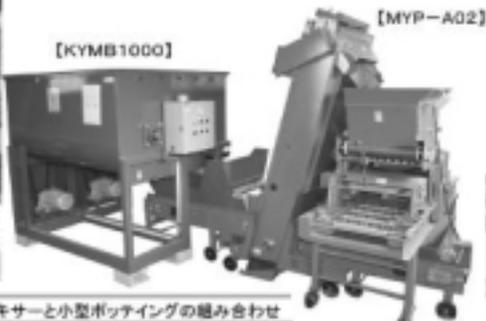


花葉会 発行

## イワタニ農業資材&省力機器



カナダ産ビートモス  
(ヨーロッパ産ビートモスもあり)



ミキサーと小型ポットティングの組み合わせ

播種用土

- ・MIXビート、BM-2
- ・システムソイル



エクセルソイル

### ■発売元

イワタニアグリグリーン(株)

本社 〒111-0051 東京都台東区蔵前3-12-8

TEL:03-5687-0751 FAX:03-3862-5147

大阪支店・福岡営業所

### ■製造元

京和グリーン(株)

〒640-8391 和歌山県和歌山市加納277-4

TEL:073-474-5117 FAX:073-472-8526

松島工場・平尾工場

### 技術力

ビール事業で培った技術とグローバルに展開するグループ育種会社との研究開発の連携により、変化しつづける顧客ニーズに応える新商品を開発していきます

# KIRIN agribio

### 顧客関係力

開発・提案型企業として、独自の発想で付加価値の高い商品をお届けし新市場を開拓しながら、生産者・流通の皆さまと共に、お客様へ花のある暮らしを提案していきます



「キリンアグリバイオグループは、  
植物分野の高品質・高付加価値商品を提供し、  
世界の人々の心豊かな暮らしに貢献します。」

### キリンアグリバイオ株式会社

〒104-0032 東京都中央区八丁堀二丁目24番2号 日米ビル 8F

Tel.03-3523-6885 Fax.03-5541-5879 <http://www.kirin-agribio.co.jp>

※キリン・グリーンアンドフラワー株式会社は、2006年10月1日より、キリンアグリバイオ株式会社に社名変更いたしました。



花のある暮らしをお手合い

ここち開花

[www.kokochikaika.com](http://www.kokochikaika.com)



# A P G 2003による被子植物の分類

フラワーオークションジャパン

長岡 求

キンギョソウがオオバコ科に移動する。このことは数年前の花葉会幹事会で会長から報告がありました。ギボウシがユリ科からリュウゼツラン科に移ることも同時に聞きました。驚きではありましたが、それ以上調べようともせず、放っておきました。ところが、シクラメンがサクラソウ科からヤブコウジ科になるとの記事を見つけて、しっかり調べてみようという気持ちになりました。その結果を<sup>1)</sup>フラワーオークションジャパンの鉢物レポート2006年8月号～10月号に連載し、その原稿に手を加えたのが今回のレポートです。

## 時代とともに変化してきた分類学

生物界全体を見通し、それを体系的にまとめた最初の学者はカール・フォン・リンネ (Carl von Linné ; 1707 - 1778) です。彼はスウェーデン生まれの博物学者で、生物名の表記ルール (学名) を定めたほか、生物種の分類学の基礎となるアイデアを『自然の体系』 (Systema Naturae) としてまとめました。植物では花卉や雄しべの数など、花の構造を比較して24のグループ (リンネの24綱) に整理しました。リンネの分類体系に対して、それはあまりに人為的すぎるという批判が起こり、生態などを意識した自然分類の考えが導入され、さらに進化論の考え方を取り入れ、進化の過程を考慮した分類学へ変化しました。それは系統発生の過程を探り、それに基づいて体系化する系統分類学です。

系統発生を探る手法は様々です。もっとも確かな手法は化石の活用です。しかし、化石から得られる知見は断片的であるという欠点があり、系統分類学は類似性を頼りに、似たもの同士は近い血縁関係にあるという前提に基づき、系統発生の道筋を推理してきました。ただ、類似性を探る手法は時代とともに多様化して行きます。例えば、生化学による知見が分類学に取り入れられています。各々の生物種が生成する化学物質の有無を比較するものです。花粉の研究が進んだことで花粉の形態から進化の道筋を推測できるようになり

ました。更には、多変量解析などの数学が積極的に活用され、系統分類学に大きな進歩をもたらしました。

## 様々ある植物分類体系

生物の分類体系は系統分類学が進歩するとともにいくつもの学説が生まれ、ある時代をみれば必ず幾つかの学説が併存してきました。特に20世紀の終わり頃は次々に新たな学説が提唱された時代で、今の時代は定説がないといえるほど大混乱しているのが現状です。20世紀は自然科学が大いに発展した世紀ですから、当然といえば当然の帰結です。

日本で広く採用される植物分類体系をみると、大きくふたつあります。ひとつはドイツのエングラ (Adolf Engler ; 1844-1930) とブランテル (Karl Prantl ; 1888-1911) の学説を引き継ぐ「新エングラ植物分類体系」です。リンネの学説同様に新エングラの体系は生物種を広くカバーしており、そのことが広く利用される背景にあるようです。ちなみに、日本の植木業界は昔から新エングラの体系を採用してきました。

いっぽう、エングラの学説が生まれた時代、イギリスにはベンサム (George Bentham ; 1800-84) とフッカー (Joseph Dalton Hooker ; 1817-1911) が異なる分類体系を提唱し、その後もイギリスや米国では今に至るまで独自の学説が支持されてきました。現在、世界で広く採用されているクロンキスト (Arthur Cronquist ; 1919-1991) の植物分類体系 (1981年と1988年に発表) はその米国に生まれたものです。ただ、クロンキストの学説は被子植物に限定した学説であり、植物界全体を見通すことができないという欠点があります。

今では新エングラよりもクロンキストの分類体系が広く受け入れられていますが、部分的には多くの異説があります。例えば、*Allium* 属は新エングラ系統ではユリ科に、ヤングの分類 (1982年) ではヒガンバナ科に組み入れています (馴染みの参考書 “Hortus Third” は *Allium* をヒガンバナ科に分類している) 。そ

してクロンキストはユリ科とヒガンバナ科を分けずにユリ科に統合してしまいました。しかし、それには異論も多く、特にダールグレンは種皮の構造を細かに分析することで単子葉植物の分類を行い、独自の分類体系（1983、1985年）を公表しています。それはユリ科やヒガンバナ科などを多くの科に分離、独立させています。書籍によってはふたつの学説を併記しています（後に期すようにDNA解析による研究はおおむねダールグレンの学説を支持している）。

### DNA解析を活用した植物分類体系の登場

様々な科学的手法の導入により進歩してきた系統分類学ですが、基本的にはリンネが行った類似性や相違

性に基づいた分類であり、今までに発表されてきた分類体系はリンネの24綱を大筋で追認するものでした。

いっぽう、1990年頃より、進化の道筋を探る新たな手法が見いだされました。それはDNAの塩基配列を比較する手法です。親子関係を鑑定するためのDNA鑑定、犯人を特定するためのDNA鑑定などで知られるようになった手法です。植物の場合、細胞の内部小器官である核や葉緑体、ミトコンドリアにDNAがあります。それらは細胞が分裂する時、いずれも自分と同じコピーを複製してから分裂します。そのDNAはふつう正確に複製されますが、ごく稀にコピーミスが発生し、植物が分化・進化する数万年、数十万年という長い期間にはコピーミスが集積してゆきます。コピーミスがどこに発生し、どれだけ多くのコピーミスが

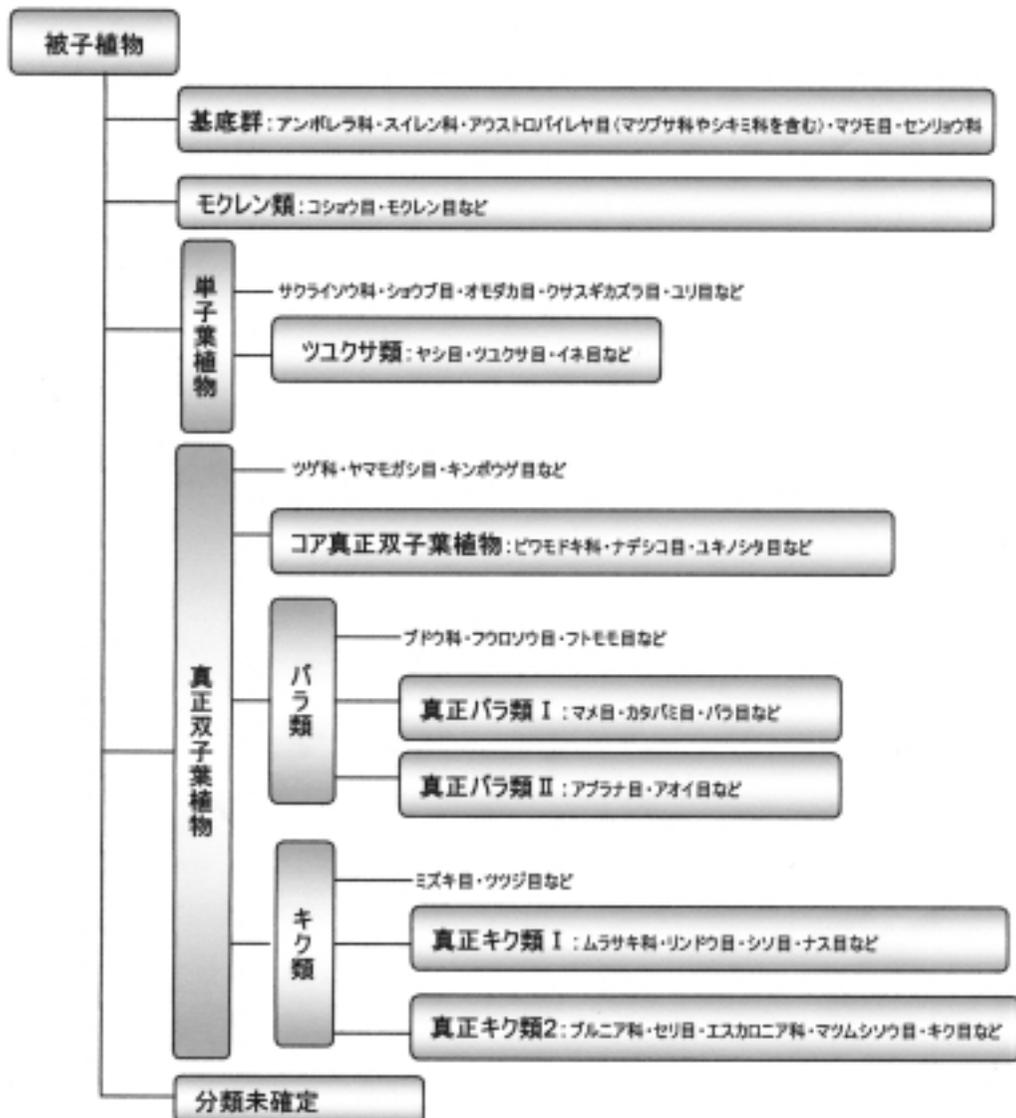


図1 A P G 植物分類体系

あるかを調べ、比較することで種間の、あるいは属間、科間の類縁関係を知ることが可能になったのです。

## APG植物分類体系の登場

APGは Angiosperm Phylogeny Group の頭文字を並べたもの。“Angiosperm”は被子植物のことで、子房に包まれた胚珠をもち、雌しべや雄しべ、花被などの組織からなる「花」を咲かせる植物群です。次の“Phylogeny”は系統発生学あるいは系統発生を意味し、進化の歴史を探ること、あるいはその学術分野を指します。APGは分子レベルの解析(DNA解析)によって被子植物群の系統発生(近縁関係)を調べ、被子植物の全体的な分類体系をまとめるために集まった植物学者のグループを指しており、1998年に成果第一弾として“APG System”を公表し、2003年には第二弾として“APG II 2003”を公表しました。

## 原始的な被子植物

従来の分類では被子植物を双子葉植物と単子葉植物に二分し、双子葉植物を離弁花と合弁花に分けていました。そして各分類群の中を進化の道筋に沿って並べています。それに対してAPG II 2003は、双子葉植物を原始的な形質を備えた一群と進化が進んだ一群に二分し、単子葉植物は前者の末席に据えています。

最も原始的な双子葉植物はニューカレドニア原生のアンボレラ科です。そしてスイレン科やマツモ目、マツサ科やシキミ科を含むアウストロバイレヤ目、センリョウ科までを被子植物の原初的なグループということで基底群 root groups にまとめています。次にモクレン類としてコショウ目やモクレン目などをまとめました。

基底群とモクレン類を合わせたグループを原始的なグループとしていますが、その特徴は花に花軸的な構造を残し、花弁と萼の分化が不十分な花をつけるというものです。花は1本のシュートが変態して生まれたとされ、花弁や萼、雄しべ、雌しべは葉が変形したものです。原始的な被子植物では、茎に由来する棒状の組織(花軸)が残り、花被片(花弁と萼の区別がない時に、花弁状の組織を花被片という)が、その上方には雄しべ、雌しべがあり、各器官が花軸上にらせんを描いて並びます。

DNA解析からは単子葉植物とモクレン類が兄弟関係にあることが判明し、モクレン類の次に単子葉植物を並べています。単子葉植物は水辺に育つ原始的な双子葉植物に生まれた奇形児をルーツにもつと推測していますが、花弁と萼の分化はなく、何より、単溝粒の花粉粒を作るという点から、他の原始的な被子植物群

と同等の形質をもちます。花粉を顕微鏡でのぞくと、種によって独自の形態を示すことが知られており、花粉をみればどの種の(あるいはどの属の)ものか判るといほどその形態は様々ですが、花粉の表面に現れる穿孔や溝の数で整理すると20弱のパターンに分類されます。そして、そのパターンを比べると単純な構造から複雑なものに進化していることが知られています。単子葉植物までの分類群はもっとも単純な単溝粒の花粉をもち、それに対して以下にまとめた分類群では溝や穿孔の数が3つ以上ある三溝粒に代表される花粉粒を作ります。

## 真正双子葉植物

三溝粒に代表される複雑な構造の花粉粒をつけるグループです。ツゲ科やキンポウゲ目などは花弁と萼の分化が不十分なことから原始的な真正双子葉植物に配置され、それから進化した双子葉植物としてコア真正双子葉植物というまとまりを配置しています。

さらに進化した双子葉植物として大きくバラ類とキク類に分けています。花は花軸としての特性が見られなくなり、花弁と萼片の分化が進んだ花をつけます。萼片や花弁は花軸から進化した花床(花盤)の上に配置されています。そしてキク類には新エングラヤクロンキストが合弁花類にまとめた種のすべてが納められています。ただ、従来離弁花類のユキノシタ科に含められていたアジサイなどがアジサイ科として独立し、原始的なキク類(合弁花類)であるミズキ目に配置されています。DNA解析が導き出した系統分類は、合弁花は離弁花から進化したとする学説を大筋で認めるものの、合弁花と離弁花を明確に分離することの不合理性を導き出しています。

## 単子葉植物

発芽して最初に現れる葉を子葉と呼びますが、被子植物の中には子葉が2枚のもの1枚のものがあり、前者を双子葉植物、後者を単子葉植物と呼び分けています。従来の分類体系によれば、単子葉植物は双子葉植物から分離して進化した一群とされます。萼片と花弁の分化はなく、花弁状の組織を花被と呼び、その花被や雄しべの数など3の倍数のものが大半という特徴をもちます。ユリ科やヒガンバナ科、アヤメ科、ラン科などの虫媒花は花の美しい種類が多く、多数の種類が栽培されています。いっぽう、風媒花として進化したカヤツリグサ科やイネ科なども地球上至る所に分布を広げる、大繁栄している植物群も単子葉植物の構成員です。

APG 2003では、単子葉植物を「狭義の単子葉植

物」とツククサ類の大きく2グループに分けています。前者がタンパク質を多量に含む種子を作るのに対して、ツククサ類はデンプン質の種子を作ります。

まず、ツククサ類を除く一群を6目に分類しました。ショウブ目、オモダカ目、クサスギカズラ目、ヤマノイモ目、ユリ目、タコノキ目です。ショウブ属 (*Acorus*) は2種からなる小さな属で、新エングラーなどはサトイモ科に含めていましたが、この分類ではこの一属でひとつの目を担っています。DNAが示す証拠からは、単子葉植物の中でもっとも古いと判断された目です。次のオモダカ目、サクライソウ科もショウブ目に並び、古くに枝分かれした系統と判断されました。サクライソウ科の名前は馴染みのない科名だと思えますが、サクライソウを含む腐生食物のサクライソウ属 (*Petrosavia*)、そしてオゼソウ属 (*Japonolirion*) の2属からなり、どちらも新エングラーではユリ科に、クロンキストはメランチュウム科に分類されたものです。

A P G 2003のオモダカ目は、クロンキスト系統が分けているオモダカ目、トチカガミ目、イバラモ目、サトイモ目を統合したものです。水草が多いグループですが、よく見ると少し異質な科が含まれています。

それはオゼソウと同じく、ユリ科やメランチュウム科に分類されてきたチシマゼキショウ科の5属です。さらにもうひとつ、ヤマノイモ目に分類されたキンコウカ科もユリ科やメランチュウム科に分類されていたグループです。こうみると、クロンキストがメランチュウム科にまとめた種群は複数の異なるグループを含んでいたようです。A P G 2003ではメランチュウム科をユリ目に残していますが、その科に残したのはツクパネソウ属 (*Paris*) やエンレイソウ属 (*Trillium*)、バイケイソウ属 (*Veratrum*) など21属です。

次はクサスギカズラ目とユリ目です。この多くは新エングラーやクロンキストがユリ目にまとめていたグループですが、科や属レベルまで調べてみると、細かな移動が多数あります。まず、クロンキストのユリ目に含まれていたミズアオイ科、ハエモドルム科、タヌキアヤメ科などがツククサ類のツククサ目に移しています。また、クロンキスト、新エングラーともに独立させていたラン目はクサスギカズラ目に統合しています。結果、クサスギカズラ目にはネギ科、クサスギカズラ科、アヤメ科、ラン科などの大家族が収められています。前記のように、ヒガンバナ科やユリ科などを



図2 シソ目の系統樹

細かに分割することを認める点はダーलगレンの学説を継承していますが、A P G 2003ではアガパンサ科とヒガンバナ科を広義のネギ科にまとめて、広義のクサシギガズラ科にはリュウゼツラン科やヒアシンス科、スズラン科などを含めています。

最後はタコノキ目です。クロンキスト体系ではヤシに近縁のグループを集めてヤシ亜綱を立てています。その構成員はヤシ目、バナマソウ目、タコノキ目、サトイモ目です。A P G 2003ではこれらが分割され、整理されています。まずサトイモ目はオモダカ目に統合されました。そしてヤシ目はツククサ類の構成員として移され、残ったバナマソウ目やタコノキ目がタコノキ目に統合されています。また、ユリ科に近いとされたジャクブ科や、オモダカなどに近いとされてきたホンゴウソウ科などもタコノキ目に統合されました。

以上がツククサ類を除く単子葉植物のA P G系統分類の注目点です。ツククサ類には花き類として重要なものは少なく、以下に花き類に関係ある部分だけ触れておきましょう。

前記のように、ミズアオイ科やカンガルーポーを含むハエモドルム科がツククサ目に分類されています。クロンキストがショウガ亜綱パイナップル目に分類したパイナップル科ですが、DNA解析によると亜綱として独立させるほどの分類群でなく、イネ科やカヤツリグサ科と同じイネ目に入れることが妥当と言うことです。バショウ科やショウガ科、カンナ科などはクロンキストの分類をそのまま支持し、いずれもショウガ目ショウガ科に分類しています。

## 注目したい分類群

まず、単子葉植物から見てみましょう。

最初はヘメロカリスを含むキスゲ科です。ヘメロカリスといえばユリ科の代表属で、花形もユリそのものですが、それをキスゲ科として独立させ、広義のススキノキ科に納めています。ススキノキ属(*Xanthorrhoea*)はオーストラリア原生のブラックボーイのグループです。同じく広義のススキノキ科に含めるツルボラン科はアロエ(*Aloe*)やエレムルス(*Eremurus*)、ハウオルチア(*Haworthia*)、トリトマ(*Kniphofia*)などを含んでいます。

次にブローディア属(*Brodiaea*)です。学生時代ですから30年も昔のことになりますが、ブローディア属からハナニラ属(*Ipheion*)とトリテレイア属(*Triteleia*)が独立したと覚えました。ところがA P G 2003を調べるとハナニラ属はネギ科、ブローディア属とトリテレイア属はThemidaceae(テミス科と表記することことにします)に納められています。テミス科の面々はいずれもネギ科に分類されていたグループで、ネギ科

から独立したと考えて良いようです。次はオリヅルラン属(*Chlorophytum*)とギボウシ属(*Hosta*)です。以前はユリ科に属していましたが、ここではリュウゼツラン科に移されています。またリュウゼツラン科にいたドラセナ属(*Dracaena*)、チトセルラン属(*Sansevieria*)がスズラン科に移り、同じくニオイシュロラン属(*Cordyline*)はラクスマニア科という科に移されていますが、ドラセナ属とニオイシュロラン属はどちらも英名がdracaenaであるのに異なる科に分類されてしまいました。

次に、真正双子葉植物に於けるA P G 2003の特徴です。

注目の第一はシソ目の内部構造が大幅に見直しされたことです。DNA解析から判明したシソ目の系統樹は図2に表したとおりですが、従来のゴマノハグサ科は多様な系統を含む寄り合い所帯だったことが判明しました。主な属がどの科に移動したのか、以下に示します。

ゴマノハグサ科からオオバコ科へ

キンギョソウ属(*Antirrhinum*)、バコパ属(*Bacopa*)、ジギタリス属(*Digitalis*)、グロブラリア属(*Globularia*)、リナリア属(*Linaria*)、ネメシア属(*Nemesia*)、ルッセリア属(*Russelia*)、ペンステモン属(*Penstemon*)、クワガタソウ属(*Veronica*)、クガイソウ属(*Veronicastrum*)など

ゴマノハグサ科からカルセオラリア科として独立

キンチャクソウ属(*Calceolaria*)

ゴマノハグサ科からハマウツボ科へ

シオガマギク属(*Pedicularis*)、コシオガマギク属(*Phtheirospermum*)など

ゴマノハグサ科からハエドクソウ科へ

サギゴケ属(*Mazus*)、ミゾホオズキ属(*Mimulus*)など

ゴマノハグサ科からキリ科として独立

キリ属(*Paulownia*)

ゴマノハグサ科に統合された2科

フジウツギ(ブuddleja)属(*Buddleja*)などのフジウツギ科、ハマジンチョウ属(*Myoporum*)などのハマジンチョウ科がゴマノハグサ科に統合  
クマツヅラ科からハエドクソウ科に

ハエドクソウ属(*Phryma*)

クマツヅラ科からシソ科へ

ムラサキシキブ属(*Callicarpa*)、カリガネソウ属(*Caryopteris*)、クサギ属(*Clerodendrum*)、チーク属(*Tectona*)、ハマゴウ属(*Vitex*)など  
クマツヅラ科からキツネノマゴ科へ

ヒルギダマシ属(*Avicennia*)

クマツヅラ科からスチルベ科(*Stilbaceae*)に独立  
Stilbe など数属

次なる注目はユキノシタ科の分割とその分割先です。新エングレー体系ではアジサイ、ウツギ、スグリなど（主に木本）をユキノシタ科に含めていますが、クロンキスト体系ではこれらをバラ目のアジサイ科、スグリ科に分離しています。A P G 2003では前記したようにアジサイ科をミズキ目に配置しています。また、その配置先であるミズキ目ではアオキ属がミズキ科からアオキ科に独立し、ハンカチノキ属などもミズキ科から独立されています。

ユキノシタ科やミズキ科に絡む移動は以下のとおりです。

ズイナ属 (*Itea*) ユキノシタ目ズイナ科  
スグリ属 (*Ribes*) ユキノシタ目スグリ科  
ウメバチソウ属 (*Parnassia*)

ニシキギ目ウメバチソウ科として独立  
ミズキ目アジサイ科に移された主な属

アジサイ属 (*Hydrangea*)、クサアジサイ属 (*Cardiandra*)、カーペンテリア属 (*Carpenteria*)、ギンバイソウ属 (*Deinathe*)、ウツギ属 (*Deutzia*)、キレンゲショウマ属 (*Kirengeshoma*)、バイカウツギ属 (*Philadelphus*)、シマユキカズラ属 (*Pileostegia*)、バイカアマチャ属 (*Platycrater*)、イワガラミ属 (*Schizophragma*) など

ミズキ目ミズキ科から独立した属

ハンカチノキ属 (*Davidia*)

又マミズキ科（広義ではミズキ科）

アオキ属 (*Aucuba*)

ガリア目アオキ科（広義ではガリア科）

ハナイカダ属 (*Helwingia*)

モチノキ目ハナイカダ科

その他、我々園芸家になじみの科や属に関して、分類上の位置づけが変わったものをまとめました。

サクラソウ目サクラソウ科 ツツジ目ヤブコウジ科

サクラソウ目はツツジ目に統合され、サクラソウ科の一部の属はツツジ目ヤブコウジ科に移動した。移動した主な属は、アナガリス属 (*Anagallis*)、シ

クラメン属 (*Cyclamen*)、オカトラノオ (リシマキア) 属 (*Lysimachia*) など。

マツムシソウ目スイカズラ科から

マツムシソウ目レンブクソウ科へ

ニワトコ属 (*Sambucus*)、ガマズミ属 (*Viburnum*) など

科が統合されて消失しそうなもの

ウキクサ科 サトイモ科

アカザ科 ヒユ科

ヒシ科、ザクロ科、ハマザクロ科 ミソハギ科

イイギリ科 ヤナギ科

フウチョウソウ科 アブラナ科

アオギリ科、シナノキ科、パンヤ科 アオイ科

カエデ科、トチノキ科 ムクロジ科

ウリノキ科 ミズキ科

ガンコウラン科、イチヤクソウ科、シャクジョウソウ科  
ツツジ科

ガガイモ科 キョウチクトウ科

ノラナ科 ナス科

A P G は、DNA 解析によって得られた系統発生の知見を活用して新たな植物分類体系を構築するためのグループですが、彼らが目指しているのは従来の分類方法に準拠するように体裁を整えることにあります。そして、DNA 解析によってまとめられる分類群を特徴づける形質を探しだすべく努力が続いています。

しかし、その作業はまだ緒についたばかりであり、安藤会長が「あと100年かかる」とおっしゃっていましたが、新たな知見が追加されるたびに分類の見直しが行われることは間違いありません。ただ、園芸の世界もいずれはこの成果を受け入れる決断をしなければなりません。それは100年も先のことでなく、意外に早く訪れるだろうと思っています。私たちが参考書として使う“THE PLANTS-BOOK Second Edition”の改訂作業が進んでいますが、そこではA P G 2003の成果を採り入れる作業が続いていると。

# 最近の植物系統分類学の研究手法

千葉大学 園芸学部

國 分 尚

学名・分類・進化、これらはすべて関係があることは何となくお分かりのことと思います。ここではそれらの関係を説明し、最近大きく変わりつつある植物の分類とその研究手法について書いていきたいと思います。

## 分類学と命名法

分類学 (taxonomy) と命名法 (nomenclature) はどちらも名前を決めることに深く関わっていますが、同じものではありません。「新種の植物に名前をつけた」ことに対しその植物を「分類した」などと一般の会話ではあまり区別せずに使っていますし、普段は特に問題もありません。しかし、この二つは全く違う行為だということをまず頭に入れてください。

一般に分類学とは生物をいろいろなデータを使って共通した性質をもつグループに寄せ集め、ある秩序を作ることです。グループに分けること自体には名前を付けることは含まれません。しかし、他人にそのことを伝えようとするためにはどうしても名前が必要になります。そこで登場するのが命名法です。

命名法は分類学によって作られたグループにある規則に従って名前を付けることです。ところが困ったことに規則がない場合があります。例えば、植物の「(標準)和名」がそうできて、極端なことを言えば付けた者勝ちという状態になっています。実際には多くの人に受け入れられないと広がることはないのですが、規則がないことは事実です。学名の方は「国際植物命名規約 (International Code of Botanical Nomenclature)」というものがあって、万国共通の規則に従って付けることになっています。動物は動物で別の規約がありますので、ときには同じ名前が別の生物につくことがあります。最も有名で身近な例として植物ではアセビ属、動物ではシロチョウ属の *Pieris* があります。分野間の交流が進むに従いこれでは不便なことがあるために、これらを統一しようという動きがあるようですが、なかなかうまく行っていません。

## 系統分類学とは

さて、ここで話題にする系統分類学 (系譜分類) とは簡単に言うと生物の進化の道筋を考慮した分類学で、系統樹の枝分かれをもとにして分類するために分岐分類学とも呼ばれます。系統分類学の本質は生物が進化してきた系統樹を現存する生物や化石のデータを使って再構築することであるとも言えます (中尾、2005、p. 219)。かつて、植物の分類は純粋に形をもとにしたもの (類型分類) でした。リンネ (1753) の24綱といえば、近代的な植物分類法の草分けとして有名です。確かに、雄ずいと雌ずいの数をもとにしていますので客観的ではあるのですが、数だけに頼っていますので、やはり人為的であることには変わりありません。雄ずいの数という形質を選ぶという行為に人間の主観が入ってしまった訳です。このように、植物の分類は多かれ少なかれ人間の主観が入り込む余地がありました。

一つ付け加えると、もともとリンネの時代には進化という考え方は存在しなかったので、分類とは神様が作った秩序を人間が解読するという行為だった訳です。また、分類の元になる指標は形態 (と、強いていえば薬用や食用などの実用性) しか選択肢はありませんでした。

ところが近年、植物のDNAを調べることが容易になり、形態以外の多くのデータが集まるようになりました。DNAには中立進化説と言われるものがあり、DNAの塩基配列は環境に左右されることなくランダムに変化するという考え方が支持されています。従って、DNAの塩基配列の変化を追っていけば人間の主観を排除した類縁関係の構築ができると考えられます。

ただ、系統分類は必ずDNAを使わなければいけないということはありません。形態や含有成分などの形質を使って系統分類を行うことも十分可能ですし、実際に行われています。問題は、形態などの場合は一度に比較できる形質の数が多くても数十であり、1塩基

を形質と見なすことができ、数千の形質を比較できるDNAの塩基配列などを使った方がより客観性の高い結果が得られるということです。DNAのデータを使った系統分類は分子系統分類と言うことがあります。

さて、従来の分類（類型分類）と系統分類の具体的な違いを挙げてみましょう。従来の分類では花と果実の形態を重視します。花や果実は子孫を残すための重要な器官であるので、その形態が突然大きく変化することはなく、植物の進化してきた道筋を比較的好く残していると考えられていました。一例として、花の形を重視した離弁花／合弁花という分類が植物の大きなグループ（分類で亜綱という単位です）とされていました。今でもほとんどの植物図鑑はこの分け方をしています。ところが、DNAを用いた研究でこの分類はきわめて人為的であることがわかりました。たとえば、合弁花の代表ともいえるキク目と離弁花で最も進化していると考えられていたセリ目が実は近縁であったりします。合弁花／離弁花という形質はたった一つ（多くても数個）の遺伝子の変異で制御されているようで、進化の道筋の中で何度も独立に起きてきたようなのです。

また、生物には平行進化というものがあり、環境が似ていると形態もその制約に従って似てしまうという事実があります。よく知られているのは南北アメリカ大陸の乾燥地のサボテン科（*Cactaceae*）やギボウシ（リュウゼツラン）科（*Agavaceae*）の植物とアフリカ大陸乾燥地のトウダイグサ科（*Euphorbiaceae*）やツルボラン科（*Asphodelaceae*）の多肉植物の平行進化で、別の系統の植物がお互いによく似ています（ギボウシ科とツルボラン科はかなり近縁ですが）。花や実の形も花粉媒介者や種子散布者に合わせて比較的簡単に変化するので、この点でも形だけに重点を置く分類は適当ではないことがわかります。

このように、系統分類は植物学の中でもいま大変注目されている分野です。新しいデータが毎月のように出てきており、目から鱗が落ちるような発見もされています。そのため、分子データを考慮した分類が定着するにはあと20年ぐらいいはかかると思われます。

## 系統分類に利用するデータの変遷

先に書いた通り、系統分類はDNAのデータに限らず、形態を用いて行われることもあります。初期の系統分類は1950年代にドイツ人の動物学者、W. Hennigによって主に形態データをもとに始められました。植物系統分類については1960年代に Cronquist や Takhtajan がやはり形態データによって先鞭をつけましたが、広く研究されるようになったのは1980年代になってからです（Soltisら、2005、p. 22）。

この頃になると植物体内の含有成分やアイソザイムと呼ばれる、酵素の多型を分類に利用することも一般的になりました。Takhtajan (1997)の体系は植物全体の分類としては最も新しい研究の一つですが、やはりアルカロイド等の含有成分を積極的に利用しています。しかし、含有成分の場合はすべての植物に普遍的に利用できるものが少ない、またアイソザイムも利用できる酵素に限られる等の理由により系統分類研究の中心にはなり得ませんでした。ただし、現在でも種内個体群の多様性の研究等には用いられています。

1990年代になるとDNAを用いた様々な手法が一般化してきました。最初に使われたのがサザンハイブリダイゼーション法を用いたRFLP（制限断片長多型）です。これは、目的の植物のDNAを抽出後、制限酵素と呼ばれる特定の塩基配列を切断する酵素で切断し、その断片の長さによって系統を解析する手法です。塩基配列が制限酵素の認識する部分で変化した場合に得られる断片の長さが変わることを利用しています。この方法は再現性はよいのですが、操作が複雑であり、塩基配列のごく一部（制限酵素の認識配列は4から6塩基にすぎない）しか調べることができないため、塩基配列を直接読むことが簡単になった現在ではあまり用いられることはなくなりました。

K. Mullisによって1983年に発明され、1993年にはノーベル化学賞を受賞したPCR法（ポリメラーゼ連鎖反応）によりDNA研究は大きな変貌を遂げました。それまで、大腸菌等を利用して複雑な操作でしかできなかったDNAの分析が簡単な機械によって素早く分析できるようになったのです。それ以降、PCRを使った様々な実験手法が開発され続けています。特に注目すべきはDNAの塩基配列を読むためのコストが下がったことで、現在では花卉園芸学研究室でも塩基配列の分析ができるまでに普及しています。

さて、DNAの塩基配列が比較的簡単に分析できるようになると、これを分類に利用することが始まりました。ここで問題となるのが、数千万もある塩基配列のどこを比較すればいいのか、という点です。植物の場合、細胞の中の核、葉緑体、ミトコンドリアにDNAがそれぞれ存在していて、遺伝の仕方が違います。核DNAは両親から遺伝し、葉緑体とミトコンドリアは被子植物では一部の例外を除いて母親（胚珠親）から遺伝します。

塩基配列の変化の速さも異なり、葉緑体が最も遅く、核、ミトコンドリアの順に速くなります。変化が速いと類縁が遠い植物同士を比較するのが難しくなるため、葉緑体は属や科以上の系統を調べるのに利用され、核やミトコンドリアは属内や種内の個体群の系統の研究に使われます。また、それぞれのDNAの中でも変化の速い部分と遅い部分があり、目的にあった部分を調

べることで効率的な系統解析ができます。例えば、葉緑体のrbcLという遺伝子は変化が遅く、植物全体の系統解析にも利用されますが、trnDとtrnTという2つの遺伝子の間の領域は変化が速いため属内の系統解析に利用できます。

以上をまとめると、植物系統分類の研究にも形態や含有物質など様々なデータが使われますが、現在の主流はDNAの塩基配列であり、研究の目的とする系統樹の部分によって利用するDNAの種類が異なります。

## 系統樹の推定法

DNAのデータ等の情報が集まると、これをもとにして系統樹を推定します。ある2種の植物で共通な塩基配列があれば、これらの種は同じ植物から進化したものである可能性が高いといえます。原理的にはこれをもとにして、手で書くことも可能です。しかし、数千もの塩基配列ともなるとやはりコンピュータの力を利用することになります。

現在使われている系統樹の推定方法には距離行列法、最大節約法、最尤法の3種類があり、それぞれ利点と欠点があります。

距離行列法は以前から行われてきた多変量解析のクラスタ分析と似た方法です。データ中の2種を取り出し、そのデータの類似度を計算します。これをデータ中の全種の組み合わせで行い、距離行列を作ります。その後、様々な理論に従って近縁のもの同士を順につないでいき、全種の系統樹を計算します。この時使われる理論で最も一般的なものは近隣結合法(NJ法)と非加重結合法(UPGMA法)で、最近ではほとんどNJ法を使っています。距離行列法は計算が速いことが利点ですが、データの変化が少ない時に次の2法に比べて系統樹の詳細がわかりにくいことがあります。

最大節約法(MP法)は最初に仮の系統樹を作り、そこにデータを当てはめて、データの変化が最小になるように系統樹の枝を入れ替えていく方法です。順番に

枝の入れ替えを行いますので、計算に時間がかかるのが欠点です。しかし、コンピュータの能力向上と計算方法の改良によって、現在では系統解析の主流となっています。

最尤法(ML法)は確率分布の理論を元に、データから見て一番もっとうまい系統樹を選択する方法です。この方法を使うには塩基置換の種類ごとに重み付けをしたモデルを作る必要があるため、最大節約法に比べて理解しにくいことが欠点です。実は、私自身この理論は理解しておらず、未だにこの方法で系統解析したことがありません。しかし、この方法が現在のところ最も本当らしい系統樹を計算できるように、将来は最尤法が主流になっていくと思われます。

## 終りに

植物系統分類は植物学の中でも最もホットな分野の一つであり、今この瞬間にも新しいデータが出ています。新しい系統樹が発表されるたびに科や属が変わってしまい、うとうしいと思われる人もいますが、研究者の立場としてはその度に真理に近づいていく過程であり、知的好奇心が満たされる瞬間なのです。ただし、新しい系統樹が発表されるたびに分類群の名前が変わってしまうことは望ましいことではありませんので、これを是正するための新しい命名法も検討されています。これについてはまた別の場所で述べたいと思います。

## 【参考文献】

- Linnaeus. 1753. Species Plantarum.
- 中尾佐助. 2005. 中尾佐助著作集第V巻 分類の発想. 北海道大学出版会.
- Soltis, D.E., P.S. Soltis, P.K. Endress, M.W. Chase. 2005. Phylogeny and Evolution of Angiosperms. Sinauer Associates.
- Takhtajan, A. 1997. Diversity and Classification of Flowering Plants. Columbia University Press.

# メキシコの花 キバナコスモス

(学名 : *Cosmos sulphureus*)

横井政人

コスモスといえばメキシコというほど、メキシコはコスモスの原生地で有名である。

「花葉」15号表紙に安藤敏夫先生のコスモスの群落の写真を使っている。花色のピンク色の種類でこれがふつうのコスモス (*Cosmos bipinnatus*) である。今回の表紙の写真はやはりコスモスであるが、キバナコスモス (*Cosmos sulphureus*) で、花色がオレンジ色の種類である。本種もメキシコが原産地であり、両種とも世界的にふつうに栽培されている種類である。この写真は1975年にメキシコ ケンタロー州で私が撮影したものである。

野生地のメキシコでもふつうの種類であるが、メキシコは日本の5倍もある国なので、ちょっとメキシコに行ってもどこに生えているのかわからない。しかもこれらの2種が同じ場所に生えていない。安藤先生もいわれるように、生態学のことばの「住み分け」で、生えている場所が異なり、いっしょに生えていないのである。先生の写真はメキシコ首都メキシコシティ近くのものであるが、この辺にはキバナコスモスは見られない。

キバナコスモスは太平洋岸に近い州や中部の州に多いようである。例えば、ナイヤリット州、コリマ州、ケンタロー州などに見られる。しかも、コスモスはトウモロコシなどの畑の雑草となって生えていることが多いが、キバナコスモスは開けた道路端で日当たりのよい場所に、

コスモスより小さい群落で野生している。生えている海拔も違いキバナコスモスのほうがやや高温の低地に多く、コスモスは高地の涼しい高原に多い。いずれの種類もサボテン類が生える砂漠地帯や熱帯降雨林下には自生していない。

このような自生地からみて、日本で栽培する場合でも、コスモスは涼しい高原でよく伸び、花色が美しいが、キバナコスモスは暑いところでも生長がよく、花色にはあまり影響しないことがわかる。野生種といっても花色や株の状態は日本で栽培する園芸品種とそれほど変わらないので、特にコスモスは大群落になれば見事である。ただ現地では花のあと種子が畑に散ると除くのが大変で、強烈な雑草になり、困っている。

ただ野生種が園芸品種と根本的に異なる点もある。それは日本で栽培すると日が短くなる初冬にならないと花が咲かないことである。すなわち、開花に強い短日性がある。周知のように現在のコスモスの品種は育種の成果で日が長い春から夏にも花がよく咲くようになり、開花期が日長にあまり影響されず栽培しやすくなっているわけである。

近辺にはハクニチソウ、ルコウソウ、ショウジョウソウ、ポインセチアが見られた。



メキシコの花 キバナコスモス (学名 : *Cosmos sulphureus*)

# アジアで初めての世界バラ会議

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

本年5月11日から5月17日まで、大阪にて「世界バラ会議大阪大会2006」が開催された。私はこの大会にて講演会の演者として参加したので、その概要について報告する。

## 世界バラ会議とは

世界バラ会議は、世界37ヶ国のバラ会が加盟している世界バラ会連合が、3年に1度開催する世界大会である。1971年に第1回大会がニュージーランドのハミルトンで開催され、本年は14回目となり、東洋で初めての開催であった。

世界バラ会連合の掲げる目標は、バラについての知識の交換と普及、研究の促進、分類やコンテストの審査基準の提示、国際的な新品種登録に関することなどで、世界バラ会議はこのような目標を達成するための方策を論じ合うとともに、世界のバラ愛好家の相互親善、情報交換の場として機能してきた。大会は、各目標について討議を行う各種委員会、情報交換のための講演会、バラ園見学や開催国の文化紹介のためのツアー、展示会などからなる。

世界バラ会議を日本に誘致をという動きは1990年代からあり、1994年のニュージーランド・クライストチャーチ市での第10回大会で、横浜市で世界大会を開催する意志表示をされたが、他の立候補地に敗れた経緯がある。今大会の誘致決定は、第12回アメリカ・ヒューストン市での大会になる。

今大会の運営団体は、大阪市、7大阪市スポーツ・みどり振興協会および7日本ばら会である。この7日本ばら会が世界バラ会連合に加盟している唯一の日本のばら団体であり、会長は中曽根康弘氏で理事長は長田武雄氏である。今回の開催にあたっては、7日本ばら会理事の小川晶氏の功績には敬服するばかりであった。小川氏は世界バラ会連合副会長であり、世界中のバラ愛好家との交友関係により、おそらくこれまでの世界大会で最も多いであろう、707名(うち371名が

海外からの参加者)の参加者(登録数)があった。

冒頭に述べた期間が正式な開催期間であるが、プレツアーは5月9日から5月11日まで、ポストツアーは5月18日から5月22日までであり、この長期にわたる7大阪市スポーツ・みどり振興協会内の世界バラ会議大阪大会2006実行組織の準備から運営までのご苦労はいかばかりかと察せられる。今大会は大阪市の多大な支援がなければとても実行不可能であったらう。ちなみに、メイン会場は2カ所。開会式および講演会が大阪国際交流センターで、歓迎レセプション他の式典が都ホテル大阪であった。

## ばらフェスタ大阪

今大会に合わせ、5月12日から5月14日までの3日間にわたり、大阪市の花博記念公園鶴見緑地内・水の館ホールで「ばらフェスタ大阪」と称するバラの展示会とローズコンテストが開催された。この展示会の目玉が、世界で初めて遺伝子組み替えて青色遺伝子が組み込まれたサントリーの青いバラであった。関西で初めての展示とあり、厳重な警戒のもと、一目見ようといへんな行列であった。青いバラは温度調節されたガラスケースに隔離・展示され、もちろん写真撮影も禁止されていた。私も実物を見るのは初めてであったが、確かに従来の交配育種では得られなかった青さであった。

青いバラ以外には、日本での開催ということもあり、東洋のバラを主題とし、現代バラの成立に大きな働きをした日本と中国の野生バラ、中国の古い品種が展示された。和風ということで、寝殿造り風庭園やバラ人形、日本独特の園芸技術による懸崖造りのバラ、バラ盆栽も展示された。また大阪府華道家協会所属72流派、100名によるバラのいけばな展示は壮観であった。

ローズコンテストには全国から687作品の応募があり、36カテゴリーからなる作品が国内外の多数の審査委員により審査された。今回の特色として、通常の世



ばらフェスタ大阪での懸崖造りのバラ

界大会では行われぬ、切り花生産者によるコンテストも行われた。切り花生産者部門では、近年の傾向である、生産者自らの育種による新品種も見られ、多様化した切り花品種を見ることができた。

関西で初めてののがかりなバラ展示会ということもあり、3日間の開催で、約6万6千人の入場者があった。毎年開催される西武ドームのバラ展の盛況にみられるように、改めてバラの集客力を知ることとなった。

### 講演会

5月14、16、17日の3日間、大阪国際交流センターにおいて、講演会が開催された。「世界のバラ」と「バラの今日と未来」をテーマに、世界中の21名の演者により講演が行われた。演者の内訳は、日本4名、中国1名、フランス3名、スイス1名、南アフリカ1名、ルーマニア1名、チェコ1名、スロバキア1名、パキスタン1名、バミューダ1名、インド1名、オーストラリア2名、アメリカ1名、イギリス1名、ドイツ1名と多彩であった。ヨーロッパからの演者が多く、しかも東欧圏から3名もあり、いかにヨーロッパ人がバラに熱心かを知ることができる。日本からの演者は、花葉会会員でもある千葉県立中央博物館の御巫由紀氏、元資生堂研究所の蓬田勝之氏、サントリーの田中良和氏および私であった。

御巫氏は得意とされる「日本の野生バラ」について講演された。講演では、現代バラに重要なはたらきをしたノイバラ、テリハノイバラ、ハマナスやその他興味深い日本の野生種について、その野生状態、分類における問題、日本文化との関わりまで幅広く話され、多くの聴講者からたいへん興味をもたれ、



講演会での著者

活発な質疑が行われた。

蓬田氏のご専門の「バラの香りの科学」、田中氏は今回の展示にも関わる「青いバラ：夢？現実？」と題して、それぞれ講演された。残念ながら両氏の講演については聴講できなかったが、科学研究としての日本のレベルを世界に誇示する意味でも非常に有意義な講演であり、誰もが興味深く聴講されたことと思われる。

私は、「中国とラオスのバラ」と題して、これまで訪れた中国とラオスの野生種と古い品種について、現地の写真を交え、現代バラに果たした役割、今後の育種への利用価値について講演を行った。今大会では中国からの演者も中国の野生種を紹介されることになっていたが、直前にキャンセルが入り、中国バラの紹介は私だけになった。ヨーロッパの人たちにはなかなか訪れる機会のない中国、聴講者にはたいへん興味をもって聴いていただいた。

海外からの演者の講演については、初日の講演のみしか聴けなかったが、東欧圏のバラについては、意外なコレクションとバラ園には興味深いものがあった。

その他、パキスタンの野生バラとバラ文化、ヨーロッパへのバラ導入の中継地となったバミューダのバラについての講演、フランスのメイアン社によるバラ育種、インドにおける耐暑性バラの育種、世界最大のバラコレクションをもつドイツのサンゲルハウゼンバラ園についてなど、なかなか聴けない講演ばかりであるが、どれも聴講できず残念であった。

### 各種委員会

大会中には世界中からバラの愛好者、専門家が集まるということもあり、さまざまな委員会が開催される。

私も詳しくは知らないが、重要な委員会に、「ヘリテージ・ローズ委員会」(Heritage Rose Committee)と「保存委員会」(Conservation Committee)がある。ヘリテージ・ローズとは直訳すれば、遺産バラということになるが、日本でいうオールドローズと同じ意味である。ヘリテージ・ローズ会議というのがあり、英国に事務局がある。ヨーロッパでは、古いバラ品種は文化遺産であるという考えがあり、人が長年に渡って育成してきた貴重なものであるということである。このような意味をもつヘリテージ・ローズ委員会は、当然のこととして、保存委員会と関連し、委員会メンバーもほぼ同じである。保存委員会の大きな仕事として、バラ遺伝資源のデータベースの構築がある。この6月に世界ばら会連合のホームページで公開されたが、品種名から検索でき、品種の系統、花色、作出者、作出年、その品種を保存しているバラ園が分かる。また、バラ園を検索することにより、その保有品種を知ることができる。

この保存委員会の委員長を6年間務めてこられた、イタリアのヘルガ・ブリシェ女史が、今回、私の勤務する岐阜県立国際園芸アカデミーを訪問されるとともに、岐阜県の花フェスタ記念公園でバラの遺伝資源保存について講演された。その際に花フェスタ記念公園で保存している7000種類のバラのリストの公開を求められた。現在、公開すべく、私も関わって、リスト作成中である。

### コンベンションツアー

先述のプレおよびポストツアー、大会中の各種ツアーにて、大阪や周辺のバラ園、文化施設、京都、奈良、姫路の世界遺産、京都の葵祭、岐阜、姫路、東京、千葉などのバラ園を視察された。

岐阜のツアーでは、当地、花フェスタ記念公園を大会中、5月15日に大阪からバスにて1日訪問された。花フェスタ記念公園としては、初めて世界中のバラ愛好家に公園のバラを見ていただいた。参加者は209名で、そのうち195名が海外の方であった。世界中の方々に公園を知って頂き、宣伝していただくいい機会とばかりに、公園としてもたいへんな力の入れようであった。メインとなる西ゲートでは中学生による和太鼓で迎え、最初、ミュージアムホールにて公園の紹介を映像にて行い、その後7000種類を保有するバラ園を案内した。本年は冬の寒さが厳しかったこと、5月上



花フェスタ記念公園内にて  
海外の審査員による国際コンテストのバラ審査

旬が例年より寒かったことから、バラの開花には早かったが、整備されたバラ園とコレクションを堪能していただいた。

当公園では、1999年より世界中からガーデンローズの新品種を集め国際コンテストを開催している。今回、世界中のバラ愛好家が公園を視察されたことから、世界ばら会連合会長のトーマス・ケアンズ氏を初めとして数名の海外の方にバラの審査をしていただいた。

ポストツアーでは、丁度開催されていた西武ドームでの国際バラとガーデニングショウにも144名の方が視察された。

当初はどのくらいの参加者が集まるのか、海外参加者数はどうなるか懸念されたが、それも取り越し苦労にすぎないほどの人が集まれた。横浜市への誘致ができなかった際にも、日本のバラがあまり高く評価されていなかったためではないかといわれていたが、今大会で、日本のバラ愛好家の熱心さ、各地の個性的なコレクションをもつバラ園に参加者は感心されるとともに認識を新たにされたものと思われる。これを機に日本のバラ園芸も高く評価されることになるのであろう。しかし、あるバラ園芸家も苦言を述べられているが、日本のテレビ、雑誌の報道は、残念ながら大会のスケールやその意義について正確には報道していなかった。鶴見緑地でのバラ展示のみ報道され、大会の主たる行事である講演会や各種委員会についてはほとんど触れられていない。本大会が日本で開催されたことは日本の園芸史上画期的なことであるが、一方で関心を示さなかった日本の園芸ジャーナリズムの底の浅さが悔やまれる。

# 岩佐大兄に捧ぐ‘ 思いで話 ’

小笠原 亮

## はじめに

私は岩佐さんより2年あとの生まれ。高校を卒業して、地元の愛知県立清州園芸試験場で、清水基夫、石黒嘉門両先生から園芸の手解きを受け、その後京都大学農学部付属園芸場で、瀬川弥太郎先生に教えを受けた。その後、……。

昭和32年春、名古屋の街角で、間口3間、奥行2間の小さな売り場の「名古屋園芸」を創業した。この頃漸く観葉植物が一般化しようとした時期で、細々ながら商いを続け、従業員も一人二人と少しずつ増えていった。

しかし次に来るのは‘洋蘭の時代’の気配を感じとり、「日本洋蘭農業協同組合」に入組し、取り扱い品目の一つの柱とした。しかし洋蘭の仕入れは生産者を廻り相対仕入れで、公開取引市場の必要性を感じた。そこで自宅の敷地の一部を利用して、日本初の洋蘭専門取引市場「日本洋蘭株式会社」を、昭和37年、中部地方の洋蘭生産者の若手同志と共に立ち上げた。

幸か不幸かこの業務は時流にも乗り、取り扱い量、額ともに大きくなり、社屋が手狭となって移転した。そこで困ったのは自分で建てた市場建物が抜け空となって残った。

そこで軌道に乗った日本洋蘭の初代専務を辞して、再度園芸小売店を規模拡大して、街中の園芸店の‘有様’を追求することとした。

## 岩佐さんとの出会い

名古屋の中心部に敷地面積150坪の園芸専門店を開設するに当たり、誰か指導的役割をしていただける方とは悩んでいたところ、同じ日本洋蘭の役員仲間であった浜松植木の外山章太郎氏より、岩佐吉純さんと云う方がおられる、ご紹介しようと云ってくださり、二人で横浜の当時反町の坂田種苗本社、園芸部を訪問、初めて岩佐さんにお目にかかった。

私も清水基夫先生の弟子の端くれ、草花や球根植物に

ついては少しは識っているつもりが、岩佐さんの豊富な知識には比べもできず。また営業についても全国の種苗、園芸店を実際目で歩き、主人と膝を交えての営業をなさっておられ、正に園芸商を熟知なさっておられる方と思い、以降店舗設計者、建築業者等を伴い横浜詣でを致したが、その都度いやな顔を一つも見せず、丁寧に私達の質問に答えていただき、又自分達の気付かぬ事なども、「こうしたことは園芸店の基本、そうしたことはまずいよ」など、御教示下さった。お陰で昭和41年8月の末には、当時としては新しい感覚の(自分はそう思っている)店ができた。

開店前日は、商品と共に岩佐さん自ら来店され、値札付、商品配置等、従業員と一処になって汗まみれでお手伝い下さった。漸く一段落を見た時、すでに夜半となっていた為、別棟でお寝み願ひ、明朝その部屋へ参りますと、きちんと夜具が畳んであり、「ご盛況を祈ります」のメモ。開店の朝、朝食などの迷惑を掛けまいとのお心遣いか。寝具に手を合わせて岩佐さんのお心遣いに礼を云ったのを昨日のこのように思い出されます。

## 割烹「勝美」の酒

開店以後、ことあるごとに前記外山氏と横浜へ出向き、商品の仕入れもそこそこに、話が済むと「一寸食事に」とお誘いいただき、横浜の中心部の「勝美」という店へ連れられてご一所した。

此の店は、カウンターの店であったが、正面に灘の生一本「剣菱」の四斗樽の薦被りがデーんと控え、注文を受けると、樽の下部に取り付けてある‘飲口’の木栓をキュッキューと云う音を響かせ、‘片口’に酒を受け、‘爛’なり‘冷’の好みに応じて出してくれた。こうした店であるから出る‘肴’も悪からうはずがなく、つい酒を過ぎすのが常であった。もう一つこの店は、「もうこれで上がりにするよ」と申し出ると、シジミの味噌汁を一椀出してくれた。‘悪酔い予防’として召し上がってくださいとの主旨。

年に数回は勝美でご馳走になり、肴のよし悪し、酒の味に至るまで常に岩佐さんがお師匠様であった。

## 園芸古書、資料集め

美味しい酒の性ではなく、元々の持病が悪化し、昭和49年春、胃穿孔により胃袋を殆んど摘出。幸いにも回復したのを期に、お小遣いの行き先を飲み屋から古本屋へ変更した。元々この方も学生の頃より嫌いでなく、本郷の井上書店や木内書店から送られてくる‘古書目録’で洋装本は時々求めていたが、‘古典籍目録’は、時代劇に出てくるような‘本’や‘掛軸’、‘刷もの’などで自分にとって目新しく、少しサクラのことで行詰っていたことも手伝い、サクラの資料からこの道へ足を踏み入れて仕舞った。

岩佐さんとの会話にもこうしたことは入り込んで、昭和も終りの頃ともなると、岩佐さんは「ロンドンから『』の初版を送ってきた」、「京都でこんな本草の本見つけました」等、電話や手紙の上でのやりとりが多くなり、そのことが少しずつ世間様の知るところとなり、「洋書の岩佐、和本の小笠原」と人の噂になるようになり、良き相談相手であり、共に喜び、共にものを持つ苦しみを味わう結果となった。

## 二十世紀名花百撰見立競

平成12年20世紀が終るにあたり、日本の園芸はこの世紀にどんな花を咲かせたか、江戸時代の人々の花遊びに見習って、見出しのような‘花番附’を作って遊ぼうと、息子の誓と考へ、作り始めた。或る時、岩佐さんにその主旨を話し、「チューリップに‘カイザースクルーレ’を入れたいが」と申したら、即座に、「‘カイザー’は18世紀にできてよ」と返ってきた。やはり草花や球根は岩佐さんに、切花生産などは米村浩次氏に一枚加わってもらわないと、後世の人に笑われると思い、「差添」(今風にはアドバイザー)として名を連ねていただき、ご教示を戴いた末に(次頁)のような番附ができあがった。

東西の筆頭に、バラ‘ピース’、ユリ‘カサブランカ’を置いた。この制作過程は実に楽しく遊ばせてもらった。

## しばしの別れ

3年前前岩佐さんから、奥様とお二人で南アフリカをご旅行なさったお話を承ったことがある。ヨハネスバークからケープタウンまで、1車輛3組のみ乗車できる特別車で、夕食時にはお召しものを着替えて席に着き、ヨ

ーロッパ並みのワインを召し上がったなど、など。

それに比べるべくもないが、小生も今年5月中下旬、中国広東省、雲南省を家内と旅行して帰国2日目の、5月28日に岩佐さんの奥様よりお電話が入り、「再入院され、そして私に会いたい由」。お電話の趣き、ご容体唯ならぬことを察し、私を最初に岩佐さんに紹介して下さった外山章太郎氏に連絡、明るる29日、共に横浜の病院へお見舞に参上した。

その時岩佐さんは、相当ご病状が進み、少しの会話もお苦しそうで、休みやすみお話をさせていただいた。内容は、予ねて原稿を書き進めておられた、ご自分のコレクションの一部である「園芸カタログ」の解題本『カタログ・オブ・カタログス』の編集、刊行の取りまとめをしてほしい、とのこと。その間別席で待っていてくれた外山氏のことを、いつまでも待たしては申し訳ないと病を押して尚、人を気遣う思いやりに尊敬の念を一層深めながら、「その事は承知した、及ばずながら」と申し上げ、長居はお体に障ると存じお別れの言葉を申し上げそっと手を握らせてもらった時の、力なく又小さく感じられたこと。廊下に出て奥様は、「長くて3月、早ければ1月」と、医師の言葉を伝えて下さった。しかしご病状はその夜から更に悪化し、このお見舞が今生のお別れとなってしまった。

## 『カタログ・オブ・カタログス』について

ご生前この件につき、岩佐さんが書かれたり、写真撮影をされたものの整理をお手伝いしていた方、その他断片的に依頼されていた方々に僭越ながらお集まりいただき、時には奥様にもご出席いただいて、岩佐さんのご意志にできるだけ添うような編集になればと関係者で鋭意進めさせていただいている。何んとか一日も早く、ご仏前に刊本お供えし、ご報告したいものと願っている。

幕末維新の志士の句に

「散る桜 残る桜も 散る桜」がある。

私は少し遅れて参りますが、岩佐大兄と再びお浄土でお目にかかり、ゆっくり園芸の四方山話をしたいものと念じている。

合 掌

平成18年8月31日

---

追伸 18年10月3日現在、「カタログ・オブ・カタログス」の編集作業は原稿、写真共におおむね整理がつき、各頁の割付作業を進めています。A4版300頁くらいの本となりそうです。



## 岩佐さんのマウイへの温情に感謝

武田和男

私たち夫妻がマウイのガーデンを、前のオーナーが白血病でギブアップして売りに出されたのを求め、エンチャントング フローラルガーデンの名前で始めて15年の月日が流れた。この間に、岩佐さんから受けた温情は計り知れないものがある。

この間にご夫妻で3回もマウイの私達のガーデンを訪問、激励していただいたことは、今は私達にとっては忘れがたい思い出となった。

第1回目は、1992年8月12日から15日で、私達が1991年12月にマウイに来てまもなくで、岩佐さんがサカタのタネの専務ご就任直前の盆休みを利用しての、昌子夫人と令嬢智子さんの3人の家族旅行であった。昌子夫人と大学同級の私の妻和子のご縁もあり、新築のマウナブレースの家にもお泊りいただいたり、マウイの最高峰ハレアカラ(3,055m)にドライブして有名なギンケンソウを見たり、用意したカーナバリのマウイ島最高級のホテルのスイートルームで一家水入らずの時を過ごされたり、グルメの岩佐さんの招待でご馳走になったり、今は夢のような思い出となった。

第1回来島 1992年8月12～15日



8月12日 マウイ島イヤオ溪谷：ニードルポイントでの岩佐吉純氏一家と武田和子（家内と令夫人岩佐昌子さんは園芸科昭和30年卒の同級）



8月12日 エンチャントング フローラルガーデンのタビビトノキの前で：右から岩佐氏、令嬢智子さん、令夫人昌子さん、岩佐氏、武田和子

2回目は1996年8月13日から16日で、新しくオープンした、豊明花卉市場の社長で江戸の園芸書のコレクターとして知られる小笠原亮氏ご夫妻と、4人一緒に来島であった。ハレアカラへのドライブや、ハナホテルに一泊し、ハナからハレアカラの裏側をまわるツアーなど、今も思い出に残るシーンがまぶたに浮かぶ。とくにカウボを過ぎるとテデシ・ワイナリーまで一軒の家もない全くの溶岩の乾ききったハレアカラのスロープが海まで続く壮大な景色とそこにだけ育つデイコの仲間 *Erythrina sandwicensis* などの珍しい植物を観察しながらの、それぞれに人生にも、園芸界にも、植物にも含蓄のある初老夫妻3組の楽しいひと時であった。

第2回 1996年8月13～16日



8月13日 ガーデンショップの前で

右から小笠原亮氏、武田和男、小笠原夫人、岩佐夫人、ガーデンのワーカーでハワイアンのカオキ氏、武田和子、岩佐氏



8月13日 ガーデン内で武田の説明を聞く岩佐氏

第2回 1996年8月13～16日



8月14日 マウイ島最高峰で国立公園のハレアカラ山頂3055mで  
右から岩佐吉純夫妻、武田、小笠原夫妻



8月15日  
マウイ島カウボの店先で犬と遊ぶ  
岩佐氏



8月15日  
レストランでの岩佐夫妻

カウボの最後の売店をのぞいた折に撮った写真の犬と遊ぶ岩佐さんは、私が新制大学1期の学生当時のある日、当時穂坂一郎教授の助手であった岩佐さんの総武線中山にあった家に招かれた日の記憶に重なるものであった。家には彼がかわいいが一匹の犬、アメリカンコッカースパニエルがいて、学校では見せないやさしい一面に驚いた。

我がガーデンの女性マネージャーでポルチギー系アメリカ人も2回目から岩佐さんの幅の広い気づかいのお人柄にほれ込み、「ミスター 岩佐はマウイに住んで暮らせるパーソナリティーだ。ここに住めばよい」と言い出し、彼の会社での立場も考えずにすっかり親しみを持ち、そのような彼女が海苔好きなことを覚えておられ、来園の時には彼女用の手土産も用意して下さるなど、万事に気配りしていただいた。

3回目は2003年1月30日で、サカタのタネ社の専務を退かれ、その後になられた顧問も辞められ、フリーになられて間もなくで、ご夫妻二人の来園であった。マウイの私の友人で日系二世の、園芸書と植物、特にティープランツ (*Cordyline fruticosa*) のコレクターのイワミ・ツネオ氏の家を訪ね、植物や園芸書の談義で時のたつのを忘れるほどであった。その後私も同行してハワイ島を訪ね、ヒロから私が運転してキラウエアのハワイ火山国立



1月30日 ハワイ島ヒロ郊外の熱帯ジャングル：ビレヤの専門パシフィックアイランド ナーセリーを訪ねて



1月30日 マウイ島ワイルクの日系三世で島一番の園芸植物コレクターのイワミ・ツネオ氏宅で：右からイワミ氏、武田、岩佐氏



1月30日 ヒロ郊外のハワイ島随一のコレクターで日系三世のグレン・サハラ氏宅を訪ねて：右から岩佐吉純氏、武田和男、グレン氏

公園に寄り、コナまでご一緒した。途中ヒロ郊外のバハクのビレヤ(熱帯シャクナゲ)の専門ナーセリー Pacific Island Nursery と、日系三世の私の友人で園芸植物のコレクターのグレン・サハラ氏の家を訪ね、珍しい多数の種類を見て暗くなるまで話の花を咲かせたのも思い出に残る。ヒロに戻り、グレンお勧めのレストランでまた話の続きの始末。先月、来園したグレンにミスター岩佐逝去の報を話すと、たった一度の訪問なのにしっかり覚えていて懐かしく思い出を語るほどで、これも岩佐さんのお人柄と思った。

私が最後に岩佐さんにお目にかかったのは2005年5月27日に横浜西八朔の家にお見舞いに伺った日で、手術後退院されて帰宅3日目とのことであった。思えば大学では師で先輩、卒業後もサカタのタネでは上司、リタイア後は友人として長い間お世話になった。感謝の思いでいっぱい。有難う岩佐さん。



2005年5月27日 横浜西八朔の岩佐邸の前でのご一家  
(3日前に手術を終えて退院、帰宅されたとのこと)

# 岩佐吉純先輩の思い出

横井政人

昭和26年卒業の岩佐さんはクラスとしては昭和29年卒業の私より3年違いますが、年齢は同じ昭和6年（1931年）に生まれています。この違いは、岩佐さんは2月の早生まれ、私は4月の遅生まれのため、普通でも1年違うこととなります。ちょうどこの時戦後の大学改革で新制大学になりましたが、故人は新制大学1年には入らず旧制専門学校のまま卒業。したがって岩佐さんのクラスで新制大学（1年）に再入学した学生は故人より1年遅れ、私と同じ遅生まれの学生は新制2年目のクラスに入学して3年の差がでてしまいました。年齢が同じでもクラスが違うと同級生とは思えず、先輩というようになってしまいました。

## 松戸にて

私が岩佐さんと知り合うようになったのは、新制大学2年の稲毛での教養学部の時でした。月1回の農業実習が松戸の園芸学部であり、この時に初めて花卉実習のご指導を受けたのです。専門課程の3年になってからは毎週1回の花弁実習がありましたので、浅山先生と岩佐故人に頻繁にお会いしました。3年後期から4年の専門課程になると、岩佐さんからは穂坂教授と共に、専門実習および卒業論文のご指導を専門的に、直接受けるようになりました。

昭和27、28年頃は花卉の農場が特に美しい時でした。浅山先生や岩佐故人が、当時毎日ある学生実習の指導に専念され、広い見本園を作り、多くの草花を植えていました。故人は球根類を好まれ、特にダリアやグラジオラスの品種をたくさん植えていました。浅山先生は宿根草がお好きで、特にソライロサルビアは印象的でした。さらにツバキ、フジ、ボタン、カエデなどの品種見本園、また当時では大きな熱帯温室（修理現存）があり、これらの手入れの学生実習も大変だったでしょう。特にツルバラが咲く時期は多くの見学者が見え、松戸名物になりました。残念なことに、まだこの頃は写真機はプロカ裕福な人でないと買えず、作業中の先生方や植物の写真がほとんど撮られていません。私の同級生に1台しかなかった状態ですから。

岩佐さんのその他の大事なお仕事の1つは、促成球根の温度処理の研究でした。温度や処理期間を複雑に組み合わせ球根に処理し、冬の切花品質を調べるといふ、夏から冬にかかる長期間のお仕事でした。材料はチューリップを中心に、ユリ、球根アイリス、スイセンでした。

2つ目のお仕事はストックの育種研究で、温室ストックの交配を多数の組み合わせで行い、花色、花穂など切花品質の調査でした。この頃は照葉ストックが出始めた頃で、香りのよさが人気を呼んでいました。

球根は穂坂先生、ストックは浅山先生の中心のテーマでしたが、これらの研究調査のため岩佐さんは正月休み返上でお仕事されていて、はた目でみても大変で、お休みはいつとるのかと思っていました。

農場に長くて太い煙突があり、その元に球根温度処理用の大型地下冷蔵庫があり、岩佐さんが夏初めから深い階段を降りたり、上がったたりして、ここにある4室（だったか）の冷蔵庫に球根類を出し入れされておりましたが、そのお姿が今だに忘れられません。このような先輩が農場で作業する写真も一枚もないのは、なんといっても惜しいことです。

私は4年後期の卒業論文にはグラジオラスの灌水試験を行いました。京都大学の大学院受験のためうまく手入れができず、岩佐さんには大変お世話になり、恥ずかしい思いをしたことを今でもよく覚えています。しかし故人はいつも明るく対応してくださり、私個人、本当に感謝しておりました。

## 先輩の後任に

私は千葉大卒業後、京都大学大学院修士課程に進学しましたが、2年後の修士課程修了間近に突然、岩佐さんから、春に坂田種苗に移るので後任の話があるがどうかと、内々の打診を受けました。初めは岩佐先輩の後任が私に務まるかと半信半疑でお断りしようと思いましたが、京大の主任教授塚本先生がこのようなチャンスはめったになく、りっぱな先生がおられる場所で勤めながら勉強すればよいのではないかと、是非希望しなさいといわれ、それではとご返事しました。

故人からはまた、「これからは新しい勉強をした若い人が必要なので是非にと」といわれ、それでは勉強させていただきますと、私は母校に戻ることにしました。今思えば、私にとって岩佐先輩がおられなかったら今の私はないわけで、人生のチャンスとは分からないものと思えました。

岩佐先輩の自叙伝は「花葉」にまだ書かれておりませんので、故人の結婚前の若い頃の情報はほとんどありません。京都から松戸に戻った私に、先輩が時々いった言葉は、「私は商業学校出身なので、そろばんは得意でタネやのほうに向いていると思う」で、今でも印象的に覚えております。どなたがみても、その後のご活躍からご名前で、先見の明があったと思っております。

岩佐先輩の後任になった私は案の定、苦労しました。故人がやっていたように、農場管理、実習、実験、研究とやらなければならず、とうてい教授、助教授の希望通りにはいきませんでした。

今さらいうのは恥ずかしいことですが、3年目頃には、今いうストレスからくるノイローゼとなったようです。これでは大学を辞めなければならないかと真剣に考えました。幸いかどうか私の義兄の占い師（今でも時にテレビ出演する横井伯典）にみてもらうと、ゆっくりではあるがだんだんよくなる運勢であるといわれました。そこでこの所見を信じ、また岩佐先輩のやられたように改めて努力するよう発奮いたしました。この頃でも物事を器用に、手早くこなす先輩をみていて、その偉大さに感服しておりました。私はまだまだ小さいとつくづく考え直し、その後、徐々に、仕事ができるようになりました。

その後、坂田種苗株式会社に移動されてからは、しばらく接触が減りました。種苗会社の難しいお仕事の勉強のため、大学の頃以上にお忙しくなり、種苗一途のお仕事だったためと思います。そしてりっぱな経済人になりました。

時々お会いすると、グルメになった岩佐先輩からはご馳走をいただくことも多く、時に先輩が私に文句をいわれることがありました。それは「お前は味音痴で、何を食べても味がわからない」ということです。そこで私は「腹が減っていればどんなものでもおいしい。戦争のときを考えれば」といい返すこともありました。それでは、話にならないということでした。

ただ先輩から、通風が持病であると聞かされるようになった時から、常識的にはぜいたく病ではないかと思うことがあり、グルメではない私とは違うのかなと考えることがありました。

## ダリアと洋古書

岩佐先輩のことを語るなら、なんといってもダリアと洋古書でしょう。ダリアは学校の松戸時代からのお好みで、文献はもちろん、ダリアについてのすべての収集です。ダリアの文献はほとんどすべて集められたそうです。ただ英国のダリア小図書を2冊さしあげた時は喜ばれました。岩佐さん自身はインターネット検索をやらないので、インターネットのデータはかなりさしあげました。ダリアの世界の品種リスト、文献リスト、分類データ、標本写真などです。

私がダリアの野生を初めて見たのは、飯塚宗夫教授等と、文部省科学研究費により、中南米を1975年、1978年と長期にわたり園芸植物視察旅行をした時でした。これ以後、岩佐さんとダリアについて多くのお話をし、資料提供もしました。先輩もぜひメキシコへダリア視察に行きたいと、常日頃おっしゃっていました。また英国のダリアナショナルコレクション農園は近いうちに行かれるご予約とも聞いておりました。これらのチャンスをなくし、さぞご無念だったことでしょう。

岩佐先輩と私との最後の仕事は、「ニュージーランドでのダリア花形問題」の翻訳になりました。1週間で頼むと急がれ、この内容は日本ダリア会会報平成18年2号に掲載しました。日本では理解しにくい問題ですが。

ダリア以外の古典園芸洋書収集はさらに有名です。何回か岩佐宅を訪れ、利用させていただきました。また何冊か貴重な古書をいただきました。例えば、英国へ導入された植物の年代が詳しい1868年発行の「Paxton's Botanical Dictionary」です。

収集し始めた頃、先輩が私達にいていましたが、理想は、収集古書を一般公開することでした。ただ集めだしたら無限に近くなってしまい、多すぎて公開できなくなってしまったのが実情でしょう。貴重書の飛散がないような保存を切に希望いたします。

最後に先輩自身の健康管理のことをひとこと。先輩はお忙しかつたので時間がなく、ご自分の検査ができなかったといわれました。でも、人間ドックの一度ぐらいはと思うと、かえすがえすも残念です。通風の痛さはお聞きしましたが、ガンについてはまったくありませんでした。しかし、私に「最近10キロもやせておかしいと思うが」といわれましたので、「病院は？」と、お話をしました。その後、1ヶ月もたたないうちに入院となってしまいました。

お元氣な先輩を想うと、短期間のうちに故人になられるとは想像もつきませんでした。心からご冥福をお祈りいたします。

# 思い出すままに

村井千里

私は学部卒業後、園研助手として2年半、穂坂先生の教室で試験研究の仕事に従事しましたが、1日2～3回は「岩佐君だったら」という枕言葉をつけて比較され、お叱りを受けました。先生はどちらかというとい計画的でなく、思いつくと急に仕事を始められる。お人柄の良さで、外部のいろいろな仕事を簡単に引き受けられる。そして試験設計などはメモ用紙にチョコッと書いて渡される。それをそのまま実施すると、発展がないと注意されるのです。

今になって思うと、岩佐さんは先生の近くに居て、その試験設計のヒントになる訪問者の発言を聞き、それを発展させて先生以上の試験構想を立て、試験設計を行っておられたのでしょうか。

「よく、あの先生のもとで5年も助手を…」という言葉が岩佐さんのお人柄の褒め言葉になっていました。でも、穂坂先生は信頼する方を手元に置き、手離したくなかったためであろうと思われます。また岩佐さんは浅山先生との交流も含めて、両先生から学び取るという姿勢で勤められて居たのでしょうか。

ですから、私のような消極的な勤め方とは仕事の打ち込みようが違っていただと思っていますし、そこで得た人脈と実力で、種苗界に入られても発展されたのは当然のことと思われる。

その上、自分のこと以上に、他の人々に注意を配られ、学会発表要旨などからそれぞれの技術者と交流し、その人、その人に必要な情報提供や文献の紹介をしています。また民間育種家などや、その中での発展品目などにもいち早く注目されていたようです。

ダリアがお好きで、日本ダリア会の再興を考え、柏で開かれたダリア展には私も呼ばれ、その時の記念品であったクリスタルのダリアの皿が、今、飾り棚の中で光を放っています。

ダリア会に参加するとお返事しておきながら、日程が合わず欠席ばかりで、遂にご一緒できませんでした。小澤さんより戴いたダリア・インペリアリスの生育を見るにつけ、生前の岩佐さんを思い浮かべています。

チューリップの研究は、埼玉という産地で穂坂先生の

お仕事を継続する立場になり、一応産地の発展、主産地の朝日農業賞受賞などの成果となりました。学会の研究発表要旨などから、鋭い指摘と文献の送付などをいただき、世界から集められた書籍の一部のご寄贈いただいたお陰と感謝しております。

美食家の岩佐さんで有名ですが、旨いものをどのように旨いと感じるか、それが大切なのは、とっておられたのでしょうか。

食事を共にし、どう旨さを感じるかを話し合っ食事をするのがお好きなようでした。これは三好大先輩のご指導を受けられた結果ではなかろうかと推察します。味覚は人により異なるもので、共通した結論が出たり出なかつたりしますが、どう感じたという反応を語り合える食事を楽しまれていたようです。「何を食べても無反応な人との食事は楽しくない」といいながら、何回か食事を共にしたことが思い出されます。

大阪の船場のお生まれで、今年百歳を超えた私の母も同じ船場の育ちで、岩佐さんの大先輩ということになります。

商都大阪の中でも中心街でのお育ちですから、種苗界においてもその商才を発揮されたのは、環境に育てられた才能ともいえましょう。また、粋な生活環もその裏にもつ船場が、どこか粋な生き方をされた岩佐さんの一面に潜んでいたと思われます。岩佐さんのいろいろな場面で、ここぞという時に大盤振る舞いをされたのも、大阪商人の昔の生き方と似ています。

岩佐さんは晩年、私に対して「研究者にしては商売気を感じる」といわれ、埼玉県退職時にサカタに迎えてくださる手はずをされましたが、テクノ・ホルティ園芸専門学校と協和発酵工業の2ヵ所に内定しており、ご期待に添えませんでした。その上、鉢物用アルストロメリアの育成と普及で、お買い上げいただくよう交渉するはめにもなりました。

カットグラスやクリスタルのコレクションのお好きな岩佐さんでしたが、今でも、クリスタル群の中で輝いておられることでしょう。

# 岩佐さんのこと

田 中 桃 三

岩佐さんと私は、私が3年になり松戸へ通うようになった年に助手を辞任されているので、学部での接触はほとんどなかった。だが、私の娘が偶然岩佐さんの娘さんと中学1年のときに同じクラスであったことからお互いの住まいが近いことが分かり（約1キロ強）、お宅へ伺ったりしていた。そのうち花葉会が発足し、会合の帰路など一緒したことも多かった。

またそのころは清水基夫さんも近くに住まわれていたので、途中で？次会として飲みなおすこともあった。程よく出来上がった清水さんを岩佐さんと2人で自宅まで送っていくのだが、エレベーターのない公団住宅の4階までようやく連れて行くと、ドアのうしろで清水さんの奥さんがすごい形相で立っていられるので、二人ともほうほうのていで逃げ出したりしていた。もっともあとで奥さんにうかがうと、あれは清水さんをにらんでいたの、我々には感謝していたそうであるが。

ともかく岩佐さんは気配りの人で、お会いしても、お宅へうかがっても、あまり気を使われるのでこちらががえって恐縮するようなことも多かった。

このことは植物や図書に対しても同様で、対象に対して細部にいたるまで追求し、中途半端なことを嫌われたので、あのようなコレクションを作りあげたのではないかと思う。

岩佐さんがどうして園芸関係の道に入られたかはとうとう聞きそびれたが、岩佐さんの年代の方で小中学生時代から園芸関係に進むとされた方はよほどの奇人でなければならない。なにしろ戦中は庭園を掘り返してイモ畑にしてしまった時代なのである。終戦後も数年間は食料難で餓死者の話やら米よこせデモが頻発していた中で、よくぞ園芸学部の名前が残っていたと思えるほどである。それでも1950年ごろからは各地でバラ園の開設の話などがでてきたのであるが、いずれにしても強い意志がなければこの道には進めなかったと思われる。

岩佐さんはあのまま学校に残られて学問のほうに進まれても、一流の業績を上げられたことは間違いないことと思うが、種苗会社に入られて活躍されたことは、業界のために大変意義のあることであったと考えられる。

戦前から必ずしも社会的に高い評価を得ているとはいえなかった種苗会社を、近代的な企業に変革し、上場会社にまで成長させたのも、岩佐さんの力が大いに寄与しているのに違いがないと思う。

几帳面な性格の岩佐さんはその膨大なコレクションの整理に大変な努力をされていたが、なにしろ増加のスピードが速く、整理が追いつかない面があり、現在でもその全貌はわかっていない。しかし生前の岩佐さんはその抜群な記憶力で、頭の中では何時、どこで、だれから、いくらで手に入れたかを覚えておられたのは確かであった。

何回か講演をお願いしたり、また講演をきいたりしたが、そのたびに感心したのはその入念な下調べと、結果としての詳細なテキストの作成である。先年の花葉会総会での洋古書の展示のときも、数週間前には展示する本と開くページも決めてあり、それに合わせたアクリル板の大きさも図書別に特注で作り、万全の準備であった。

定年後の岩佐さんは結構忙しい日々を送っていたが、楽しみにしておられたのは奥様との外国旅行であったようだ。それまでは仕事で何回も外国に行っていたが、プライベートな旅行は本当に楽しいといっておられた。商売をはなれ、園芸植物のルーツをさぐり、ついでにグルメを楽しんでおられた。花葉会の旅行にも2回ほど参加されたが、同行の私たちもその豊富な植物の知識に感心したが、やはり入念な下調べの結果だったと思われる。

まだまだ行きたいところはあったようで、亡くなる1ヶ月ほど前にも、是非イギリスのチェルシーショーを見に行くのだとっておられた。

また長野県でダリヤ園の開設運営に尽力されたり、ダリヤ協会の事務局を引き受けられたり、これから御自分が好きな植物とゆっくり向き合っていられるつもりであったと思われる。

その他にも古いカタログのリストの出版など、遣り残した仕事は大変多かったと思われるが、なんといいてもその早すぎた死は、ご自身にとっても園芸界のためにも残念でならないことである。

# 昭和40年代(1965)から昭和50年代の 坂田種苗株式会社(現 サカタのタネ)の岩佐元専務取締役との思い出 市川 裕

病気らしい病気もしなかった岩佐さんの思い出を書くことになろうとは、夢にも思わなかった。

鮎屋で「君たちの舌は味も分からないのだから」といいつつ、最上級を食べさせてくださった。そして「江戸前というなら、東京湾のどこで獲れた穴子だ」と主人を困らせていた岩佐さん。天国にも旨い鮎屋があるのか心配。

## 岩佐さんのサカタでの略歴

昭和31年(1956)4月	坂田種苗入社
昭和42年 7月	同園芸部長
昭和47年 7月	同取締役園芸部長
平成 3年 8月	同常務取締役国内卸営業本部長兼園芸部長
平成 4年 8月	同専務取締役国内卸営業本部長

## 岩佐さんは園芸部の全てだった そしてプラスアルファが数多くあった

38年入社の私市川は、園芸部に配属された。当時千葉大卒は渡辺常務、岩佐、阿武、岩佐夫人、片山、後で八代さんが入り、花種子・球根・苗木・園芸資材の国内販売を業務としていた。岩佐さんが園芸部の統括で、なおかつ外国からの新品種の導入、茅ヶ崎(神奈川)、三郷(長野)、長後(神奈川)の各農場での育種の主導に力を入れていた。サカタには花の育種担当は数多くいたが、営業を踏まえた品種の採り上げは岩佐さんの独壇場だったことは間違いないことと思っている。

AAS(オールアメリカンセレクションズ)は1934年のペチュニアF<sub>1</sub>ピクトリアより数多く入賞しているが、岩佐さんの名は出てこない。育成者は育成者として遇されるのは当然だが、私は昭和50年代のその多くは岩佐さんの主導によるものと、信じて止まない。

## サカタ園芸部の岩佐さんの事々

私の入社当時の岩佐さんは饅頭派の“下戸”であった。後年自宅のワインセラーの年代物のワインを誰が予想できたであろう。ワインといえば、岩佐さんがよく読まれていた『美味しんぼ』の第74巻「恍惚のワイン」を思い出す。

岩佐さんらしい思い出は、スイセンの隔離栽培で岩手に出張。帰りの花巻の駅で私が煙草をつけようとしたら

ライターがつかなかった。岩佐さんは走ってキオスクへ。ライターと日本酒の「酔仙」が手許に。帰りの車中、上野まで飲み明かした。

この気遣いはいつものことであり、サカタの主流の「割り勘」を岩佐さんだけ守らなかったことにも通じ、その最終章は平成11年10月16日のホテルオークラの自費による感謝の会へとつながるのである。その話は後章で。

**球根 ダリア**については岩佐さんが、原産地、歴史を全て知る第一人者で、まことに書きづらい。ダリアの口ウ漬をやめ、裸球をポリセロ袋詰め(ミニラベル付)とし、寒冷地の不発芽を解消した。そして50年代には100万球の生産、販売を達成したが、岩佐さんを満足させることではなかった。1袋150円の時代に、3,000円で売れるダリアを夢見ていた。「宇宙」より大きい30cm以上の品種等々であったが、実現できず、誠に申し訳ない結果となってしまった。ダリア協会の方々にお願いすべきだった。

**グラジオラス** 当時の販売は球根生産地より仕入れて売るのが主流であったが、岩佐さんは自社生産に踏み切った。寒地育成種は長野県、岩手県で、暖地育成種は茨城県で生産。岩佐さんは1リットル60万円の木子を持ち帰り、社員をビックリさせたものだ。

輸入といえばもう一つ。岩佐さんの海外旅行は10年間で36回と記憶している。私は1回もなく、残念だった。

**産地廻り** 切り花生産地が主で、伊豆半島、房州、渥美、高知等を廻り、生産技術を教えられ、営業とはこんなものと教えられた。が、西伊豆では「岩佐が今度来たら、川にぶち込んでやる」という物騒な生産者もいた。岩佐さんの技術指導は、天狗の生産者を上回る技術であったことを物語る。その後何年かで、その天狗は岩佐さんの信奉者となっていた。

**会津若松にヒヤシンス・チューリップの球根生産地を作った。**当時、チューリップは新潟、富山で、切り花用品種であった。百合咲き、パーロット、八重咲きのサカタオリジナル品種の生産が目的であった。福島経済連会津若松支所での球根山揚げ価格の10銭1円の価格交渉が何日にも及んだことも懐かしいが、輸入解禁により生産中止となって久しい。

## 岩佐さんの著書は数多い

私の本棚にあり、今も岩佐さんにお世話になっている本を紹介させていただく。

- ・誠文堂新光社刊『最新園芸大辞典』  
執筆者に坂田種苗時代の社員が5名。岩佐さんは写真提供者であった。
- ・講談社刊『園芸大百科事典』全12巻  
岩佐さんは編集者、執筆者、写真提供として園芸を生活の中に紹介。
- ・講談社刊『アーバンガーデニング 花による緑化マニュアル』  
岩佐さんは編集委員、写真提供。
- ・アポック社刊『日本花名鑑』  
岩佐さんは編集委員。流通植物の集大成。
- ・発行者 坂田種苗株式会社 制作エフ・ジー企画  
『種子に生きる 坂田武雄 追想録』(非売品)  
岩佐さんは編集を担当。なお本文の中で「坂田武雄と坂田種苗株式会社年譜(付・園芸界その他の出来事)」という貴重な年譜を作成された。
- ・サカタのタネのカレンダー(岩佐オリジナル)  
当初は坂田種苗の園芸部のカレンダーとして作成されたが、後全社のカレンダーとしてお得意様、仕入先様に喜ばれた。私にとっても岩佐さんのオリジナルカレンダーを見て、キューケンホフを見たい、フロリアードも是非見たいとの思いを深めた。後日実現させたことが思い出される。できれば岩佐オリジナルカレンダーの写真集が欲しいと思っている。

## 展覧会・展示会では最高のプロデューサー

各種のサカタコーナーでは、その知識、博学、そして海外経験を十分に活かしたテーマパークであった。

**園芸文化協会** 「花の文化展」、現在の「花と緑のガーデニング博」として開催され、サカタコーナーも趣味の園芸家を楽しませた。

**関東東海花の展覧会** 6日本種苗協会のコーナーに出展。毎年サカタ新品種が営利栽培家の注目を集めた。

△**家庭園芸普及協会** 「フラワー&ガーデンショー」のサカタコーナーをコーディネート。

EXPO 90(大阪花博・1990)岩佐さんはコンテスト委員、そして日種協の光の館総合プロデューサーとして活躍。サカタにグランプリ賞をもたらした。

**サカタ創立60周年記念 フィールドディ** 昭和48年(1973)長野三郷農場で、花と野菜の合同で開催された。

**サカタ創立70周年記念 フラワーショウ** 昭和58年(1983)小田急向丘遊園内で、盛大な式典とフラワーショウを開催し、出品数1,060種、約20万株。約3万人のご入場があった。内輪の話だが、当時としては大金の3,000万円の企画を、金子社長よりゴーサインをもらって、岩佐さんが実現させたとのこと。

**サカタ創業80周年記念 '93サカタドリームショウ** 平

成5年(1993)静岡掛川総合研究センターに、テーマ「家庭に町に花と緑の大きな輪・ビューティフルにヘルシーに・サカタの華と野菜のパレード」のもと、盛大に開催された。

## 前代未聞の岩佐さんの感謝の会(平成11年)

岩佐さんは平成11年8月27日の株主総会で退任された。岩佐さんの感謝の意を込めた会ということで、岩佐さんの自費で、10月16日ホテルオークラで開かれた。招待者は外国より11名、園芸各界より89名、親族17名の豪華な、後にも先にもない、ものすごい会であった(表現する言葉もない)。和食は“山里”の斉藤料理長に任せ、乾杯はシャンパン(ブリュート・アンペリアル) 飲み物はワインの赤(ラトール) 白(シャブリP・C)

招待状には「宿泊の方はお部屋をご用意」「ご祝儀はご無用」とある。「IWASA YOSHITOU 花華人生50年パーティー」は岩佐さんの感謝以上に盛り上がった。

## 園芸学会園芸功労賞受賞(平成13年)

「花卉産業の発展に対する永年の功労」に対する授与であった。そのお祝いを12名の発起人(代表 濱田豊氏)等により、5月12日「岩佐吉純氏園芸功労賞受賞祝賀会」がホテルオークラで開かれた。園芸功労賞は最も名誉ある賞で、岩佐さんは心から喜ばれていた。そしてまた、岩佐さんの内祝いの宴が催されたのはいうまでもない。

## 岩佐さんの常日頃の言葉「勉強しなさい」

いつでもどこでも勉強といわれていた私は、ついに最後まで守れなかった。岩佐さん、ごめんなさい。

最後の会話となったのは「イチちゃん、200ページの本の編集をできる人を探してほしい」という電話だった。気になってはいたが、その件も名古屋園芸の小笠原亮様が委員会を作り、発刊に向けて第一歩が始まったとのこと。岩佐さん、ご安心ください。

## 岩佐さんのメタセコイア

岩佐邸には一抱えもあるメタセコイアがある。前に住んだ下総中山(市川市)の庭から根回しをして現在の中山(横浜市)に移植したと聞く。なぜか私の家にもメタセコイアがある。私のメタセコイアをお棺の中に入れてもらって。岩佐さんと再会できるように“道標”として。

文中過ぎた言葉がありましたら、岩佐さんどうぞお許してください。岩佐さんを偲んで(7月記す)

# ダリアを愛した岩佐吉純さんを偲んで

山 口 ま り

20年ほど前、当時のそごうデパートの店花がダリアであったことから、そごう柏店でダリア展を開催する計画が持ち上がりました。ディスプレイ用のダリアは切花用品種ですぐ手配できたのですが、ダリアの特徴であるバラエティ豊富な品種群の手配はどうしようかと思いついていた折、「岩佐さんに相談したら」とアドバイスを受けました。

当時は第一線で活躍なさっていて多忙を極めていた頃と想像されますが、ダリア協会の再興、資金作りをはじめ、花の手配、ディスプレイや展示の指示など、先頭を切って協力・指導していただきました。

それから、サカタのタネの岩佐さんではなく、ダリアの岩佐さんとして親しませていただき、また、ダリアについては何でもご存知で、よき指導者として尊敬させていただけていました。

そごうのダリア展は5年ほどで中止になり、その後ダリア協会としての活動も自然消滅状態になってしまいました。

岩佐さんは、「会社を辞めたら、またダリア会を興したい。花持ちの良いダリアを改良し、世界標準に合わせた分類・新種登録等をしなければだめだ」と、常々おっしゃっていました。ようやく主だった役職を勇退され、2004年に日本ダリア会を再興し、ダリアに尽力を傾け始めた矢先の訃報。岩佐さんに引っ張っていただいていたダリア会のメンバーへの衝撃の深さは、計り知れません。

「ダリアについては、日本では、岩佐さんに聞け」は、周知の事実でした。でも改めて、岩佐さんとダリアの関係をご本人の口から伺ったことが無かったことに気がつきました。本稿を書くに当たり、奥様や同級生、会社関係の方々には伺ったのですが、「ダリアについて話したことは、特に無かった」との答え。サカタのタネでの現役中は、日本の花産業の黎明から成熟期のけん引役であったことから、ダリアに関わりあっている時間は無かったのでしょうか。

しかし、幸いなことに、NHK趣味の園芸2006年7月号でダリアが取り上げられ、2006年3月29日、岩佐氏に「ダリアの魅力」について、編集者がインタビューしている録音が残っていました。ダリアへの思いを熱く語られ、現在のダリアの問題点やこれからの展望が40分ほど収められていました。

## ダリアとの付き合い

岩佐さんを学生時代からご存知の方々によると、知り合ったときには、すでにダリアが好きであったといえます。多くのダリア好きがそうであったように、すべてが焼けってしまった終戦直後の荒廃した時代に、豪華絢爛なダリアの花に魅かれたのでしょうか。

園芸学部で昭和24年に2年生で編入し、岩佐さんと同級生になった和田大さんは、笠原貞男さん、岩佐さんと、園芸の3羽ガラスと言われたそうです。その3人で、ダリアの名花「銀盤」「白鳥」を作出した松尾晋平さんの農園にたびたび伺い、ダリアの栽培について習ったとのこと。特に岩佐さんは、毎土曜日に松尾農園に伺って、ダリアの手入れの手伝いをしていました。松尾さんからダリアの球根を購入して、当時住んでいた市川市中山で畑を100坪借りて、ダリアの栽培をして喜んでいたということです。

また、当時の指導教官の保坂先生の下、園芸学部の農場ではダリアが栽培されており、学生にダリア栽培の実習をさせていました。岩佐さんが大学で助手をしていた頃、学生であった横井政人名誉教授は、岩佐さんからダリア栽培の指導を受けたそうです。



坂田種苗（現 サカタのタネ）に入社した頃、「ダリアは良いよ。ダリアで博士号を取りたい」と話されていたことを、和田さんは思い出されるといいます。

しかし、岩佐さんは、ダリアには欠点がたくさんあると心得ていたので、ダリアを商売として扱うことはあきらめていました。ダリアは趣味と割り切っていたようですが、折りにふれダリアの資料は収集なさっていました。園芸古書のコレクションの中には、ダリアについての文献や本がたくさんあります。また、海外へ出張があると、横井名誉教授に「どこそで、ダリアを見てきた」と、話していたそうです。

第一線を退かれたとき、ホテルオークラで開かれたパーティ会場の装飾は、1,000本のダリアの切花を使われました。アレンジ担当は、三羽ガラスの1人、フラワーデザイナーとして活躍されていた、笠原貞勇さんでした。

世界各国の花に関連した場所を訪れていましたが、ダリアについては、まだ見ていないところがたくさんあり、野生状態のメキシコのダリア、イギリスのナショナルコレクションなど、横井名誉教授と一緒に行動と話していたということです。

## ダリアのために

ダリアの魅力は、花の形・大きさ・色幅、草丈、草姿のバラエティの豊富さですが、花持ちが悪い、日当たりが悪いと花が咲かない、暑さに弱い、ウイルスに弱いということで、昭和の後半は人気は凋落しました。

岩佐さんは、「ダリアを普及させるためには作りにくさを改良しなければならない。そのためには、目的を持ってダリアの改良に取り組み、日本での欠点を解決しなければだめだ、育種家が元気がない」と。

インタビューの中に、育種家への苦言として、「今のダリアの育種は、育種とは言わない。育種とは、もっと花型を増やすとか、花持ちを良くするとか、豪華な花にするとか目的が無いといけない。庭でも切花でも大事な花持ちということに力を入れていない。花の育種では、ポリジーンを使った育種が大事。たとえば、黄色のコスモスの‘イエローガーデン’や、橋本さんのキバナコスモスの真っ赤な‘サンセット’などのように」と、語られていました。

ダリアの育種家、特に育種を目指す若い方を奮起させるために、「ダリアの育種について」のダリア会の講習会が、岩佐さんを講師に2006年秋に計画されていましたが、実現できなかったのは残念でなりません。

ダリア会の再結成は、「誰かが一生懸命やることにより、さらにその花の魅力が一層増してくる。そうしないと、どうにも伸びない。ダリアが盛んな国は、気候の問題（冷涼で温暖）もあるが、ナショナル・ダーリア・ソサエティがしっかりしている。そのために、日本ダリア会を立ち上げた。誰かが一生懸命ダリア協会をやって、それが進んでいけばいくらか違ってくる。せっかくダリアのブームが来ているのだから、もう少し頑張れば復興するだろう」と、意気込まれ、一生懸命やる誰かを買って出てくれたのです。

## 後を託して

岩佐さんが外国のダリアの情報や学術的なことを、秋田国際ダリア園の鷲澤幸治さんと川西ダリア園の内谷新悟さんが栽培などの実際の部分を担当する形で、日本ダリア会が再興しました。ダリア会の役員をはじめ、会員には全国のそうそうたるダリア愛好者・業者が揃い、岩佐さんの人脈の広さとダリアへの情熱がうかがい知れました。

そして早速、研修会・海外のダリア情報の収集・海外への日本のダリアの紹介・普及宣伝・切花用品種以外のダリア切花の流通など、精力的に活動に取り組まれたのです。将来は、岩佐氏が学術的なこと、鷲澤氏が技術的な部分を担当して、ダリアの本を出したいとの希望もありました。

また、若い世代にダリア会の運営をバトンタッチしながら、ダリアについて知っていることは隠さず伝えていき、将来は、海外のダリアを日本のダリアが乗り越えてやろうという勢いだったとのこと。

体調を崩されてから、岩佐さんは、鷲澤さんに後任の会長を委ね、会の存続、会員の研修会、今求められているダリア（花持ちの良いもの、カクタス咲き種、ウイルスに強い）の作出の3つを託しました。

現在、ダリアを見直してくれる方が多くなったということは、それだけ魅力のある花だからなのです。日本各地の街角にダリアが普通に見られるように、岩佐さんの



遺志を継ぎ、新しいダリアの作出や楽しみ方、日本独自のダリアを求め、普及させるための手助けを少しでもすることで、喜んでいただくことができるでしょう。

## 回 想 記

岩 佐 昌 子

花葉会の皆様の御厚誼に深く感謝いたします。

仕事と趣味が一緒の幸せな人生であったと振り返っていました。75歳までは必ず毎年海外へ花を見に行こうと申し、今年（平成18年）はイギリスへ行くつもりで旅行会社に予約していましたが、残念ながら実現できませんでした。

また、「私の辞書が一冊なくなってしまった」というくださる方もありました。

昭和26年（1951）岩佐が卒業した年に、私は入学し、2年生から始まった農場実習での指導者でした。また私は卒業と同時に坂田種苗(株)（現 (株)サカタのタネ）に入社、1年後の昭和31年（1956）に岩佐も入社し、同じ部所で働くことになり、昭和38年まで机を並べていました。

学部で園研の助手をしていた時代にはいろいろなことをやっていますが、特に私の目にふれたのは、チューリップの花芽分化を調べていた頃のことです。自分で冷蔵庫の温度管理をし、ステージごとの分化度合いを球根を切って調べますが、その折球根の液が指や手につき、かぶれて痛かゆがったり、割れたり、哀れなほどの手になっていた時もありました。後に私も普通の販売用のチューリップの球根を素手で半日ほど数を数えただけで、指先が痛かゆくなった経験もあります。

坂田種苗に勤めてからは、商品が売れるようにするために腐心していました。例えば花の種子を入れる絵袋や球根につけるラベルなどを作るために、写真を撮っていました。特にチューリップや一部のスイセンは庭に植えて、写真の材料としました。1種10～15球で何種類植えたか定かではありませんが、50種は越えていたと思います。また、農場や産地から持ち帰る花には必ずラベルがついているため、子どもの頃の娘は、「うちの花はみんな札つきだ」と言って笑ったこともありました。

ダリアも好きでしたが、ダリア以外の球根類も大好きで、近年は輸入が簡単になったため、ラトビアから珍しいようなものを輸入したりしていました。ただラトビアは

寒い国でもあるため、暑さに弱いものが多いようです。輸入当年はよくても、夏越ししないものもありました。もちろん、粗放栽植でしたが。

もっといろいろと、きっちり聞いておくべきだったと思うことも多いのですが...。「タイヘンだ」と言いながら、手の届く範囲で植物をいじっています。

### 岩佐吉純氏 略歴

- 1931年2月5日 大阪市に生まれる
- 1951年3月 千葉農業専門学校園芸科（現 千葉大学園芸学部）卒業
- 1951年4月 財団法人 日本園芸生産研究所助手
- 1956年3月 千葉大学園芸学部文部教官助手
- 1956年4月 坂田種苗株式会社（現 株式会社サカタのタネ）入社
- 1967年7月 同社園芸部部长
- 1972年7月 同社取締役園芸部長
- 1981年2月 ニュージーランド政府招待にて渡航、園芸講演を行う
- 1991年7月 同社取締役国内卸営業本部長兼園芸部長
- 1991年8月 同社常務取締役国内卸営業本部長兼 園芸部長
- 1992年4月 同社常務取締役国内卸営業本部長
- 1992年8月 同社専務取締役国内卸営業本部長
- 1996年8月 同社専務取締役管理本部長
- 1999年8月 同社顧問
- 2001年8月 同社退任
- 1998年6月 株式会社 大田花卉社外取締役に就任
- 1998年7月 財団法人 園芸文化協会副会長に就任
- 2001年4月 日本園芸学会より園芸功労賞を受賞
- 1968年より海外視察 世界各国を訪れること50数回に及び
- 2006年5月31日 逝去

## 本物の花の産業人・文化人：岩佐吉純氏をしのぶ

花葉会会長 安藤敏夫

平成13年(2001)4月4日、園芸学会は岩佐吉純氏に対して園芸功労賞「花き産業の発展に対する永年の功労」を贈っています。表彰式は、園芸学会平成13年度春季大会(於：東京農業大学厚木キャンパス)で行われました。それは、園芸の文化と産業の発展に顕著な功労があった方だけが享受できる園芸学会最高の名誉です。

岩佐吉純氏は、㈱サカタのタネの専務取締役として、世界の花ビジネスの最前線で活躍されただけでなく、日本の花の文化と産業の非常に幅広い範囲にわたって活躍されたことは、平成13年の園芸学会雑誌70巻別冊1の37頁に、園芸功労賞の受賞理由として詳しく書き止められています(2001年の花葉 No. 20の41頁に引用)。

岩佐吉純氏は花葉会の育ての親でもありました。花葉会はその起源を戦前に遡ることができますが、昭和56年(1981)に会則を整備して、「新生」花葉会となってから、非常に活発に活動するようになりました。花葉会は、会長の系譜を大学人で、幹事長の系譜を実業人で、それぞれ構成する体制としています。しかし、実際の「新生」花葉会は、初代会長＝横井政人、初代幹事長＝岩井英明に、岩佐氏を加えた3人の主導体制、つまりトロイカ体制で動き出したのです。岩井幹事長の退任を受けて、岩佐氏は平成5年(1992)から平成13年(2001)までの9年間、2代目の幹事長として辣腕を振るわれました。私たち花葉会幹事は、幹事会の度に、岩佐氏の的確な状況判断と、機敏な決断という、リーダーに求められるものの何たるかを目前に経験させて頂いたのです。今や日本の花産業・花文化の情報発信基地となった花葉会20年のパワーは、大きな組織を運営することに長けた岩佐氏の能力に大きく依存して育ったのです。

若くして岩佐氏を失ったことは、ご親族だけでなく、日本の花に関する文化と産業にとって不幸なことです。花葉会も深い悲しみの中にいます。花葉会は重要案件の判断に先立って、全てに岩佐氏の意見を伺ってきました。花葉会は一時的に不安定になるかもしれませんが、しかし、岩佐氏など先人の敷いた一本道を力強く歩める体制を、

なるべく早く再構築する努力をいたします。

本物の花の産業人であり、なおかつ本物の花の文化人であった稀有の人、岩佐吉純氏のご冥福を祈ります。

### 岩佐吉純氏 業績

1. カタログを全頁色刷りとし、現在のスタイルを作り上げた。また種子を防湿包装し、セロファンパックした高級絵袋種子を開発。
2. 海外からの新しい園芸植物の積極的な導入と普及、新品種の育成に貢献。クリサンセマム・マルチコーレ、クリサンセマム・パルドーサム、コスモス「ベルサイユ」、ヒマワリ「太陽」、トルコギキョウのF1品種、シネリリア、ポットガーベラ、プリムラ・ジュリアン、パンジー、デージー、サルビアなど。
3. 新しい園芸資材の導入と普及。ピートモス、ピートバン、ジフィーポットなど。趣味園芸家用にBナインや農薬類の小袋詰め、エアゾール型殺虫剤など。
4. STシール、スターチスのクリーン種子、ペチュニアやトルコギキョウのペレット種子、アサガオのクイック種子など、発芽を高めるための技術を導入。
5. 花の普及に貢献。園芸文化協会主催の「花の文化展」(昭和34～)の展示に参画。会社の60周年(昭和48年)70周年記念のフラワーショーを実施。わが国初のバックトライアル(昭和51年)を実施。
6. 花き育種の発展に貢献。平成2年5月～8年4月、日本種苗協会花き部会長代行として、種苗技術研究会シンポジウムや種苗コンクール(全日本花き種苗審査会)の開催と運営を指揮。
7. 平成2年開催の「国際花と緑の博覧会」で日本種苗協会の総合プロデューサーとして『光の館』に全期出展。わが国初の国際コンテストを実施。
8. 国体の花として花壇草花の普及に努める。千葉、福井、鳥取、青森などの開催県では産地指導も行う。韓国のオリンピック開催時花卉栽培の指導にあたる。
9. 昭和61年横浜国際女子駅伝でプリムラ5,000鉢を競技場内に初めて飾る。各地の競技場でフィールドをプランター植えの植物で飾るきっかけを作った。
10. 「花卉産業の振興に関する研究会」「食用花卉導入委員会」「種苗分類特性調査委員会」など、農林水産省の各種委員会の委員を歴任。日本の花卉産業振興政策の方向づけに多大の寄与をした。

(「花葉」20号(2001年)より抜粋)



は驚きであった。なにより京都市周囲の山、神社、寺院、庭園の古さ、美しさは関東では得られず、今でも忘れられない。

2年後の修士課程から博士課程に進もうとした3月末、思いがけないニュースが穂坂先生から伝えられた。それは故岩佐助手が坂田種苗に移動するので、後任にどうかということであった。塚本先生は東京生まれの君には、なによりのチャンスなので是非行きなさいということで、就職することにした。

## 母校に戻って

昭和31年(1956)千葉大学に戻ってからは、穂坂先生の球根促成温度処理研究に没頭した。チューリップが中心で、ユリ、スイセンなどの実験を行った。ただ私はチューリップの球根から出る白い液にかぶれる性で、指などの皮膚がくずれ血が出て、気持ちよく研究ができず苦しんだ。

チューリップの研究で私が忘れられないのは、ジベレリン処理である。当時ジベレリン研究が盛んで、穂坂先生も私に何か効果のある植物か処理法を見つけなさいと要求。その頃私は成果があがらず、ノイローゼ気味になって、温室の隅でジベレ液をチューリップの葉に散布していた。その時、筒状に伸びてきた促成チューリップ新芽の中心部に気がつき、そこにジベレ液をスポイトでなげなく1滴たらしてみた。1週間後、蕾が赤くなり、開花が促進されたのである。穂坂先生は早速学会で葉面散布では効果がないと発表。この処理法は私が穂坂先生と共同研究していなかったら発見できなかったと信じる。その時、園研職員として共同実験していた村井千里さんが、この処理法を埼玉農試移動後に発展させている。

穂坂先生退官後は、小杉清先生が香川大学から後任教授として着任、観賞植物の花芽分化の研究を続けられた。花芽の研究は植物材料を集めることが難しいこと、および研究後期に位相差電子顕微鏡が発明されたが、研究期間が足らなかったことが心残りとなった。

浅山先生は花色素に関心が強くいろいろ書かれていたが、研究法がまだ初期だったため完全な研究に発展しなかった。

私自身は生態学の群落研究を始めていたが、研究成果がわかりにくいという小杉先生のご意見で、観賞植物の花や葉の色彩、含有色素の研究に代え学位を取得し、現在も同様なテーマを継続している。色素研究法は私の定年後急速に発展し、精密な色素定性ができるようになったが、まだ研究法が容易でなく、また分析速度が遅いの将来の発展を待ちたい。

浅山先生の定年退職後、私や安藤先生が昇格、上田善弘助手が採用され、花卉研究室の人事が整い、研究も植物色素、育種、分類、さらにDNAまで、現代の研究に進行している。今園芸学部は1909年(明治42年)創立後、近く100周年を迎える、重大な分岐点にさしかかっている。

小杉先生着任後、松戸の農場にアルミ温室ができ、ま

た私の定年間近に広い柏農場を入手し、植物の収集や施設新設などで農場の発展もみられた。だが、私の定年後の現在、国立大学法人化による大学機構大改編で希望がある反面、昔の元気のような植物いっぱいのもも忘れたくない複雑な心境である。

## わが植物生活

江戸時代から住んだ新宿区大久保も、自動車の増加による排気ガスで、娘2人が気管支を痛めるような環境になったため、思い切って郊外に移転することに決め、埼玉県川口市に移転した。35年前のことである。調整区域のため非農家は居住できなかった場所に、地元の卒業生柴道昭さんのご尽力で特別建築許可があり、園芸地帯に住めるようになった。これ以後の私の植物生活はまったく変わった。それまではただ見学する場所だった400年の歴史がある園芸地帯安行が生活の場所になり、私自身の収集・栽培はもちろん、植木、切花、鉢物生産、市場、売店などの情報、知識が直接、直ちに分かるようになった。さらに多くの生産者の生きた指導を受けられ、私にとって本当に貴重な栄養になっている。現在は当初より道路、住宅が増え、自然・緑が減ってきているが、市町村のご努力により最小限の自然破壊に抑えられている。

研究材料の収集から始まった植物探査は75歳を過ぎた現在、やや低調になってはいるが、まだ継続し、海外に出ることも多い。特に中南米には文部省補助金をいただき、長期滞在・探査したことを思い出す。アフリカ大陸だけはまだ行ってないが、各地で新しい貴重な植物を見ると興奮することもままある。収集範囲は、変わった花色植物、斑入り植物、カラーリーフプランツに絞っているが、現在、江戸時代に栽培されていた貴重な植物の保存に特に関心がある。

著書として誠文堂新光社から「原色斑入り植物写真集」(1978)や「カラーリーフプランツ」(1997)などを出版している。

会にもいろいろ参加して交流をはかっている。花葉会はもちろん、園芸文化協会、英国王立園芸協会日本支部、日本植木協会新樹種部会、NPO法人栽培植物分類名称研究所、観葉植物開発普及協会、変人会、日本植物園協会、園芸ニュースレター刊行会、日本ダリア会、日本アジサイ協会などがある。

定年間近に軽い狭心症にかかり、不整脈がよくできるようになって周囲の方々にご迷惑をおかけした。定年後、病院と薬を代えたところ不整脈がなくなり、現在に至っている。

過去を振り返ってみて、私個人の発展より、写真、写真機、複写機、コンピューター、インターネット、衛星、ナビゲーション、携帯電話、交通、医療、介護、薬品などなどのけた外れの発展に驚きで、これらを活用できる毎日を感謝している。

ただ最近では、今号の「花葉」にあるように、先輩、知人の訃報が多くなり、寂しさを感じる日々でもある。

(「花葉」15号(1996)業績など参照)

syngenta

“信頼性”が  
私たちの商品です  
高度な育苗システムと育苗技術で、高品質プラグ苗をお届けいたします。

# 種子から苗まで 幅広く皆様のニーズに お応えいたします。

伝統と革新のトップブランド  
豊富な遺伝資源と最新のシードテクノロジーで、生産性と商品性を両立させた種苗をご提供いたします。



シンジェンタ シード株式会社

URL <http://www.syngentaseeds.co.jp>



ダイヤ園芸

**本社**

〒289-2304 千葉県香取郡多古町高津原向ノ台401-2  
Tel.0479-75-3111 Fax.0479-75-3122

**栃木プラグセンター**

〒328-0202 栃木県栃木市大久保町230  
Tel.0282-31-1298 Fax.0280-31-0386



住化タケダ園芸

## 鉢花生産者を応援します! 業務用



**置肥 緩効性錠剤肥料**

### エドプロ 錠剤

小粒・10kg入、中粒・10kg入  
N:P:K:Mg=12:12:12:1

数種類のチッ素成分が順序よく効き出し、効果が持続します。初期の溶出がゆっくりですので、肥料焼けや根傷みの心配が少ないです。



**置肥 有機入り複合肥料**

### NEW有機エドDX 錠剤 NEW有機エドF 錠剤

(DX1/1) 5kg×2袋入、(DX1/2) 4.7kg×2袋入

N:P:K:Mg=10:10:10:1

(F1/1) 5kg×2袋入、(F1/2) 4.7kg×2袋入

N:P:K:Mg=8:12:10:1

植物に有用な微量成分(ミネラル・核酸・ビタミン・アミノ酸)を含む有機質を配合、速効性成分と緩効性成分のダブル効果。



**葉面洗浄剤** 葉の汚れを落とし自然なツヤがよみがえる。

### リーフクリン10 リーフクリン

(業務用)希釈タイプ 2ℓ入 (業務用)エアゾールタイプ 480mℓ入

### 植物活力剤 液体肥料 ルトキーパー

チッ素、リン酸、カリに、ビタミン類+鉄イオン+アミノ酸のトリプル配合の活力剤。10Kg入、5Kg入

**植物成長調整剤 ST ボンザイ<sup>®</sup>フロアブル**

農林水産省登録第17235号 バクロブトラゾール水和剤  
花卉・花木の伸長抑制(矮化)と着蕾数増加に、100mℓ入(計量容器付)

**殺虫剤 マイキラ<sup>®</sup> ナメクジ類の退治に**

農林水産省登録第16688号 メタアルデヒド水和剤(業務用)2ℓ入  
水に薄めて散布、誘引して退治(食毒作用+接触毒作用)。

[www.sumika-takeda-engei.co.jp/gyomu/](http://www.sumika-takeda-engei.co.jp/gyomu/)  
住化タケダ園芸のホームページ(業務用ページ)



住化タケダ園芸株式会社

花卉緑化

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-1-7  
TEL.03(3270)9065(ダイヤルイン)

## 快適花生活

■「プリエッタ」はリニューアルを含め  
10品種に!

New



デュエット  
バイオレット



アメイジング  
ブルー



ナチュラル  
イエロー

■「プリエッタローズ」に青系新登場!

New



ブルーモーヴ

## 第一園芸

<http://www.blurette.jp/>

第一園芸株式会社

卸ディビジョン

■本社 卸営業セクション

〒140-0012 東京都品川区勝島1-5-21 東神ビル

TEL 03-6404-1320 FAX 03-6404-1321

■九州営業所

〒812-0036 福岡市博多区上呉服町10-1 博多三井ビル

TEL 092-262-7062 FAX 092-262-7063

■商品開発研究所

〒834-0085 福岡県八女郡立花町北山 126

TEL 0943-22-6804 FAX 0943-22-6806

一株でこのボリューム!



バラ咲き+小輪多花

プリエッタ®  
ローズ

photo:ピュアホワイト(株巾85cm)

## 人工光閉鎖型苗生産装置

# 苗テラス®

仕様

「多段式育苗棚」 セルトレイ16枚収納

「照明」 光源 白色蛍光灯

平均光強度 200~280  $\mu\text{mol m}^{-2} \text{s}^{-1}$

「空調」 温度制御範囲 約20~30°C

「炭酸ガス」 制御範囲 ~1800 ppm

「灌水」 底面灌水による液肥循環方式



果菜苗, 葉菜苗, 花苗の育成に最適!!!  
驚きの速さ!!!

14日で本葉2枚のガッシリしたトマトのセル苗



太洋興業株式会社

〒103-0004

東京都中央区東日本橋2-24-14 日本橋イーストビル

<http://www.taiyo-kogyo.co.jp>

E-mail: [info@taiyo-kogyo.co.jp](mailto:info@taiyo-kogyo.co.jp)

農業ハイテク部 TEL: 03(5820)7105 FAX: 03(3865)0763

農業開発部 TEL: 03(5820)7104 FAX: 03(3865)0763

# 家庭園芸の知識・技能の普及に36年



イワタバコ  
Comandron ramondoides  
本州以南の山地の湿った岩壁に生える宿根草。滝近くによくみられるところから古名をタキナ、タキジヤと呼ばれていました。

## ■通信教育事業

盆栽技能講座／住まいの庭園技能講座  
実用園芸技能講座／総合菊づくり技能講座  
植物繁殖技能講座／植物画講座  
草木染講座／ハーブコーディネーター養成講座  
淡彩花のスケッチ講座／洋らん講座  
山野草講座／山菜・きのこ講座

## ■カルチャースクール(教室)

## ■出版事業

## ■友の会(全国に25支部)

## ■海外研修旅行

指導委員長 桜井 廉  
S47園卒 齊田安利



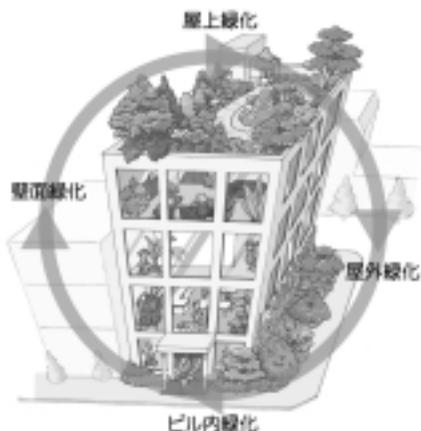
**日本園芸協会**

〒151-0061 東京都渋谷区元代々木町14-3 ☎03-3465-5171

## Planet Hydroculture system [www.g-planet.com](http://www.g-planet.com)

プラネットハイドロカルチャーシステム E-mail: post@g-planet.com

### コンポガーデンシステム ●●●●●



新しい未来都市のランドスケープ計画を可能にします。

#### 屋上スカイファーム

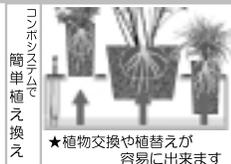
屋上を農場として生産、養生機能として利用出来ます。  
ビルとビルとのグリーンネットワークを実現化して、  
地球環境保全のため企業や行政が取りめる仕組みです。

### コンポガーデンプランター

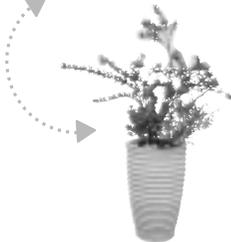
- 多種のコンポプランターを組み合わせることで空間や個性に応じた様々なデザインの演出が可能になります。
- カセット的に植物交換ができ女性でも容易に庭作りが楽しめます。
- 雨水利用が可能で植物は必要最小限の管理で保てます。

コンポガーデンシステムだから  
屋外と室内の出し入れが可能！

詳しくはホームページをご覧ください



★植物交換や植替えが容易に出来ます



季節の植物を室内外へ循環

株式会社プラネット プラネットハイドロカルチャーシステム

昭53別 金子 功 昭54別 大林修一



- 本社
- 生産物流センター
- 植栽部
- 名古屋営業所
- 沖縄営業所
- プラネットマーケット
- フーリストプラネット

- 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前6-19-14 神宮前ハッピービル7F
- 〒441-8132 愛知県豊橋市南大清水町字元町61-2
- 〒341-0026 埼玉県三郷市幸房141
- 〒456-0051 愛知県名古屋市中区四番1丁目16-16 ハットビル
- 〒902-0074 沖縄県那覇市仲井真373シティテラス303
- 〒443-0014 愛知県蒲郡市海陽町2-2 ラグーナ蒲郡内
- 〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田3-3-20-B06 明治安田生命大阪梅田ビル

- TEL 03-5469-0590 FAX 03-5469-0591
- TEL 0532-25-8677 FAX 0532-25-5662
- TEL 048-952-8976 FAX 048-952-6477
- TEL 052-682-4410 FAX 052-682-4410
- TEL 098-833-5131 FAX 098-833-5132
- TEL 0533-58-2580 FAX 0533-58-2581
- TEL 06-4795-8090 FAX 06-4795-8091

# メネデルファミリーでしかり、育てます。

## 2ステップ・システムが、決め手です。

新たに植え込んだ時や、衰弱してきた時は、まず植物の活力を高めることが最優先。

新しい土に慣れたり、元気が回復してきたら、すかさず養分補給を。

植物のコンディションに合わせてメネデル・ファミリーを使い分けましょう。

**STEP 1** **メネデルで力をつける**

有効成分の二価鉄イオンがおだやかに作用して素早く根付かせ、元気の回復を助けます。



- さし木、株分け、挿え替え
- 花壇苗・野菜苗の植え付け
- 果樹・花木・庭木の植え付け
- 植えまき、球根の植え付け
- 弱った草花・庭木の回復
- 切り花の水あげと日持ち延長
- ハイドロカルチャーやアクアリウム

**メネデル**  
植物活力素

**STEP 2** **活力液肥で育てる**

チッソ、リン酸、カリの三要素に加え、鉄をはじめとした各種微量要素の働きで、活力をつけながら丈夫な植物を育てます。



**メネデル**  
**活力液肥**  
原液  
チッソ リン酸 カリ  
5・12・6  
全植物用

リン酸・カリ強化

メネデル株式会社 メネデルのホームページアドレス <http://www.menedael.co.jp>

〒530-0004 大阪市北区堂島浜1-2-6・新ダイヤル TEL 06(6344)8541 FAX 06(6344)8591 商品のお問い合わせ、詳しい資料のご請求は ☎0120-88-8739



**日本花名鑑**  
4  
内容体裁一新!

### 日本花名鑑④

安藤敏夫 小笠原真 長岡求・監修  
B5 3400円税込(定価4800円)

名称を整理し表記法の安定を目的とする約6300種類の最新流通植物名称事典!

### 日本の絶滅危惧植物図譜

日本植物画倶楽部 大場秀草監修・解説  
普及版 A4 上製 400頁 7000円税込(定価9800円)  
特装版 A4 箱入 182葉 額装可 解説冊子つき  
17500円税込(定価25000円)

絶滅危惧種182種を植物画と平易な植物解説(英訳つき)で紹介。内外で絶賛!

### 日本で育つ熱帯花木植栽事典

坂崎信之編著  
B5 上製 1228頁 31000円税込(定価61950円)

露地栽培が可能な美しい熱帯性花木2236種類の詳細なガーデニングマニュアル!

### 小笠原植物図譜増補改訂版

豊田武司編著  
四六変 上製 528頁 7000円税込(定価10000円)

固有種が多い小笠原植物を鮮明な写真とスケッチで紹介。小笠原植物図鑑の決定版!

花葉会会員の方へ上記特価にて販売いたします。(送料サービス)

## 株式会社 アボック社

〒247-0056  
神奈川県鎌倉市大船2-14-13  
TEL 0467-45-5119  
FAX 0467-45-5132  
E-mail info@aboc.co.jp  
<http://www.aboc.co.jp/>

### 注文方法

- ファクスまたはハガキ
- 花葉会会員と明記

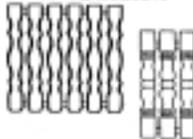
(注) 一般書店では特価での扱いはいたしません。

ハイジの国から、直輸入!日曜大工で出来る、木製バルコニーフェンスキット!

## ALPEN BALCONY

※カラータイプ  
高さ750mm幅1200mm厚さ1.5cm  
中継棒を要する中継棒で接続した場合は、  
注:「※」の通り幅が異なります。

標準A 高さ400mm幅1100mm厚さ1.5cm  
標準B 高さ400mm幅1400mm厚さ1.5cm  
標準C 高さ400mm幅1700mm厚さ2.4cm



ザラツル木製タイプ  
高さ750mm幅1200mm厚さ1.5cm  
中継棒を要する中継棒で接続した場合は、  
標準Aの幅に幅が異なります。

家を花で装う為の新提案!

既存のアルミや鉄のフェンスを

ナチュラルなウッディフェンスに!

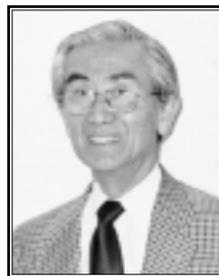
## アルペンバルコニー社

東京都杉並区大宮1-19-3 Tel.& Fax.03-3311-3905



## 故 植村 猶行 様

横 井 政 人



弔辞

私は千葉大学で、故植村さんの5年後輩の横井でございます。

植村先輩、今われわれは深い悲しみのうちに、先輩にお別れ申し上げなければなりません。昭和56年花葉会発足後、今年のはじめまで、この花葉会にご出席になり、いろいろ貴重なご意見を聞かせていただいております。

それが今、永久のお別れになる、ご挨拶をすることになるとはまったく想像もできませんでした。

いつも背筋が伸び、大きなお声でお話し、ほとんどお年のことを感じさせない先輩。どんな会合にもりっぱな写真機を持って写真を撮る先輩の姿をうらやましく思っております。

花葉会の会誌に、故人が「緑の下の力持ちに徹した人生」と題して自叙伝を書かれておりますが、本や雑誌の編集者として、ほんとうに着実、堅実、手堅く地道にお仕事をこなしてこられた先輩にぴったりのタイトルといえるでしょう。

故人の勤務先は園芸図書の出版会社、誠文堂新光社でありましたが、ここで大きな園芸大辞典や図鑑を作り上げていらっしゃいます。堅実な先輩の力がなかったらできなかったかもしれません。雑誌でも『ガーデンライフ』という月刊誌の編集長として、長期間発行し、戦後の園芸界の発展にたいへん貢献いたしました。

一つエピソードを申し上げます。

12年前、イギリスに花や葉の美しいペゴニアを見に、二人で参りました。そのとき、レンタカーで高速道路を走ると、時速180キロぐらいになりました。このぐらいのスピードが出ますと、自動車が浮くような感じになります。

そのとき先輩が「陸軍士官学校の練習機に乗っているようだ」といわれましたが、私とはわずか6歳の差であ

りますが、戦争体験の有無を強く感じました。ちょうど昨日は終戦の日でしたので、こんなことを思いだしました。

植村先輩ほど、過去、現在と、ずっと写真を撮られた方は多くなく、貴重な資料をたくさんお持ちと思います。やり残したお仕事も多いものと存じます。

先輩のご逝去は私どもにとってひじょうに残念至極なことで、私個人にとっても話のできる、よき先輩をなくし、ひじょうに寂しい限りでございます。

植村先輩、天国から我々やご遺族の方を見守ってください。そしてこれからもご指導ください。

心からのご冥福をお祈りし、花葉会を代表いたしまして弔辞とさせていただきます。

さようなら

平成18年8月16日

花葉会代表 横井 政人

### 植村 猶行氏 略歴

- |         |   |
|---------|---|
| 大正14年5月 | 四国志度町に生まれる  |
| 昭和24年3月 | 千葉農業専門学校卒業  |
| 昭和24年4月 | 誠文堂新光社に入社   |
| 昭和56年3月 | 退職  |
|         | この間、「農耕と園芸」「ガーデンライフ」などで活躍。「植物特許法制定促進協議会」での活動を通して品種保護法の成立に尽力した。                |
| 昭和34年6月 | 園芸文化協会の参事に就任、以降、理事、常務理事、評議員、会計監査役等を歴任して、約40年間同協会の活動を支えてきた。                    |
| 昭和37年5月 | 日本ペゴニア協会を設立。<br>常任理事、理事長を務める。<br>エフ・ジー企画を自営の傍ら、テクノ・ホルティ園芸専門学校客員教授、RHSJ監事等で活躍。 |

(「花葉」18号1999 自叙伝抜粋より)

**訃報** 花葉会相談役の植村猶行氏が平成18年8月12日にご逝去されました。通夜は8月15日、告別式は8月16日、中野の天徳院会館で執り行われました。

ご遺族のお話では、植村氏はお酒もタバコも飲まず、ただひたすら花と花関係の本の出版に終始なされたとのこと。最後までツバキの本の校正を気にしておられたそうです。

ご遺族、花葉会、日本ペゴニア協会等、ゆかりの方々に見守られる中、故人のお好きなペゴニアの花々に包まれ、旅立って逝かれました。ご冥福をお祈り申し上げます。

# 永遠の友 植村猶行君の思い出

林 角 郎

## 入学から卒業まで

私達は昭和21年4月に現在の千葉大学園芸学部の前身である千葉農業専門学校に入学。同時に浩気寮に入り、その時の同室の同級生が植村猶行君と棚田幸雄君でした。植村君は陸士出身とのことで、年齢も2つほど上で、まだ軍隊調の硬い感じで話しておりました。この3人に、岩手県出身で学校の近くの徳川様のお屋敷に下宿した橋本昌幸君を加え、4人が親友となりました。

植村君は園芸は初めてのようでしたが、もともと花好きだったようで、3年生の時は花の専攻をし、卒業後も花一筋で通しました。

これに対して私は考えを変え、棚田君と共に農業経済を専攻し、橋本君は育種を専攻しました。卒業後棚田君はそのまま愛知県農業総合センターで農業経済の研究を続けましたが、他の3人は分野は違うものの花の部門で仕事をしました。

寮では9月に部屋の組替えがあり、2年生になって私は寮を出て橋本君と一緒に下宿しましたが、植村君は3年生になるまで寮に残り、学生の委員長になって寮の運営にあたったようです。

## 卒業後の就職その他

我々は昭和24年春に卒業し、植村君はすぐに誠文堂新光社に入社し、農耕と園芸の花の担当となりました。その後のことは宮田さんが詳しく述べられると思いますので省略します。

私は昭和26年に千葉県農業試験場安房分場に転勤となり、その後は試験研究に没頭して直接会う機会はありませんでした。

でもその頃植村君はNHKの趣味の園芸にも定期的に出演していましたので、テレビで時々みておりました。最初は下重暎子さんの司会などで話し役として出ていたと思いますが、その後しばらくしてから司会役をしているのを見て驚いた記憶があります。

## テクノ・ホルティで共に教えて

その後、昭和63年4月から、私と植村君は第一園芸株の岩井さんに勤められ、埼玉県行田市に新しく開校した伊東学園のテクノ・ホルティ園芸専門学校に勤務しました。私は単身赴任で学校の寮に泊り、植村君は東大泉の自宅から2時間近くかけて通勤しました。学校は生産や流通、造園、パイオ等の実務者養成が目的のため、植村君は園芸文化史と実習を担当していました。

授業の際は例の通りの生真面目さで独特の字体の手書きでピッシリと書いた厚い資料を毎回作り、学生に配って話していました。しかし最初は声が小さく、学生からよく聞き取れないという不満がでました。このため大きな声で話すようになり、学校の校舎内に入ると2階の講義の音が1階までピンピン響いていたようすを昨日ように思い出します。

話もかなり熱を入れて話していたようですが、不熱心の一部の学生達はその内容より話し方のくせだけを問題にし、1回だけ行った学生のアンケートの際に、そのことが述べられていて、かなり怒ったことがありました。しかし熱心な学生達からは大変慕われており、いろいろと質問されて、それに丁寧に答えて対応しておりました。

## 花の友として

植村君自身としてはペゴニア類に非常に強い魅力を持っていたようで、ペゴニア協会を作り普及に努めていました。私は切花、鉢物、花壇苗等商業ベースの花を主に考えていたため、ペゴニアについては話を聞くだけの状態でしたが、まだやり残した仕事も多くあったものと思います。

平成16年10月に橋本昌幸君の容態が悪いということで植村君に電話し、二人で盛岡まで日帰りで見舞いに行ってきました。その際新幹線の往復の時間全部を話して過ごしましたが、その後はあまり会う機会もなく過ごしていたところ、突然の連絡でびっくりし、また落胆しました。今はただ謹んでご冥福をおいのりするのみです。

## 趣味園芸の礎『ガーデンライフ』を創刊 誠文堂での植村猶行さん

宮田 増美

私は8月6日からネパールのランタンリルンへ、高山植物撮影を目的としたトレッキングに行っていた。

20日に帰国して、初めて植村猶行さんが亡くなられたと知らされたのだが……、16日の告別式のあった日の正午頃、ランタンコーラ（谷）に沿って下山中、つい出来心で足元に咲いていたペゴニアを採集して持ち帰っていたのだ。

さらに、虫の知らせとはよく言われることだが、その日の朝、前夜に見ていた夢のことをメモ（常にメモ用紙を携帯しろということも植村さんの教えであり、今日の山旅でも記録係であった）していた。

「昨夜は熟睡できず、3回ほどトイレに行ったが、その度に夢を見ていた。夢ではカメラマンの神田淳さん（注：『写真集/日本のラン』の著者）の運転でどこかの花の展示会に行ったのだが、会場には江尻（注：光一）さんや植村さんが居て、久しぶりに大御所の対面で両者が懐かしがっているような場面が現れていた……」とある。

江尻さんと植村さんはかなり以前に園芸文化協会で対立していて実際にはありえないことだし、12日に植村さんが亡くなられたことなどまったく知らなかったのに……と、自分ながら驚いてしまった。

8月24日、大泉学園の植村さんのご自宅へ伺い、採ってきたペゴニアの葉を押し葉にして仏前に捧げ、この夢のことを奥様に話したら涙を流されておられた。

編集部からの依頼で、植村さんが勤めていた株誠文堂新光社時代の植村さんについて以下にまとめてみた。

植村さんが誠文堂に入社したのは戦後まもなくの昭和24年、はじめは出版部に所属し、『園芸大辞典』の編集に携わっていた。この『園芸大辞典』をまとめていたのが石井勇義氏で、戦前、誠文堂から発刊されていた『実際園芸』という雑誌（大正15年10月創刊、昭和16年12月

刊）の主幹であり、植村さんに大きな影響を与えた方だった。なお、『園芸大辞典』は第1巻が戦時中の昭和19年12月に、最終の第6巻は昭和31年3月に刊行されているが、石井勇義氏は昭和28年7月に亡くなっている。

戦争中休刊していた『実際園芸』は、昭和21年6月に『農耕と園芸』と改名して再登場、出版部に居た植村さんもやがてこの雑誌に移り、花卉生産園芸の企画・取材とともに趣味園芸の分野も担当していた。

世の中が落ち着き始め、趣味園芸が盛んになりかけた昭和37年春、季刊の趣味園芸雑誌『ガーデンライフ』が創刊された。植村さんはその立ち上げから、同誌が月刊化された昭和45年までの9年間、編集長として活躍された。

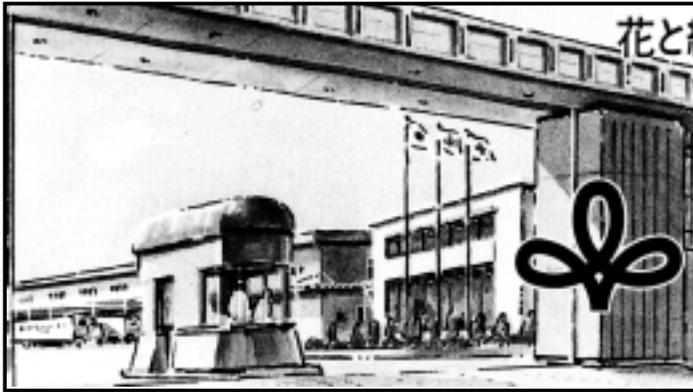
その後『農耕と園芸』編集長、第2編集部（農園芸書）の部長を経て編集部次長となり、昭和56年、55歳で定年退職されている。

誠文堂は昭和62年、創立75周年の記念事業の一環として『実際園芸』の復刻ダイジェスト版を企画、それを石井勇義氏ともっとも近かった植村さんに依頼することになった。

同書の編集後記に植村さんは署名入りで6ページにわたって“現代園芸の礎・人と植物”というタイトルで、明治・大正・昭和の花卉園芸界で活躍した人々についてを、『実際園芸』誌に掲載された記事を通して、解説している。

石井勇義氏は日本の花卉園芸界に多くの貢献をされてこられた方だが、植村さんは彼を師として仰ぎ、常に前向きな姿勢で業界を見つめ、より新しいものを、より新しい技術を世界的な視野で捉え、それをできるだけ多くの写真や図を使って分かりやすく表していくという、戦後の趣味園芸ジャーナリストをリードしていった方だったといえよう。

合 掌



花と緑のある暮らしのお手伝い

● 地方卸売市場  
九州日観植物株式会社

代表取締役社長 西川 勲

〒818-0013 福岡県筑紫野市大字岡田310-1  
PHONE (092)926-1238(代表) FAX (092)926-5984

グリーンダイナミクスグループ

株式会社ペレニアル

バラの総合カタログ「百華目録06秋～07春号」  
弊社所属の育種家河合伸志作出34品種をはじめ、195  
品種を厳選し掲載。ただいま春商品のお申込受付中。  
カタログ掲載以外のバラ品種、その他、各種お問い合わせも  
お気軽にどうぞ。

〒270-0034 千葉県松戸市新松戸4-65-1 和光新松戸ビル4F  
TEL047-348-1231 FAX047-343-7650  
URL: <http://www.perennial.co.jp>  
E-mail: [mail@perennial.co.jp](mailto:mail@perennial.co.jp)  
買兼室和 S54 院了 秋葉伸之 H8 生卒  
買兼佳子 S54 理亭 河合伸志 H6 院了

植物の未来を切り開き、皆様へ花と緑とのふれあいの  
すばらしさ、喜びをお伝えすることにより、美しい  
国づくりに貢献したいと考えます。

グリーンダイナミクスグループのビジネスフィールド

- 花と緑に関するイベントや施設などの総合プロデュース
- 植物園や庭園、花壇、屋上緑化などの設計・施工・管理
- バラを中心に、多様な植物の調達・販売
- 花や緑のディスプレイの企画・設置・実施運営
- 花と緑に関する調査・研究・コンサルティング

## — 花産業のコーディネーター —

花鉢・花壇苗の生産、卸、小売、花造園、企画開発、不動産  
押花、フラワーデザインスクール、ブライダル



Vivoショップ

Vivo本店

TEL: 045-833-2827

FAX: 045-833-5697

花造園課 TEL: 045-832-3752 FAX: 045-833-2410

不動産部 TEL: 045-832-3076 FAX: 045-835-3438

<http://www.e-87.co.jp> E-mail: [info@e-87.co.jp](mailto:info@e-87.co.jp)

株式会社 **グリーン武内**

(本社) 横浜市洋光台1-13-19

TEL: 045-833-2827(代)

FAX: 045-833-5697

有限会社 **グリーンラブ**

(本社) 横浜市洋光台1-16-7

TEL: 045-833-9137

(花工場) TEL: 045-844-7541

## 輸入花木と園芸資材はしばみちで

みどりと花の郊外ガーデンセンター

外国樹種の直輸入と生産販売!!

しばみち本店

〒334-0825

埼玉県川口市大字赤山948

☎ (0482) 96-3506(代)

しばみち本店園芸部

川口市大字赤山221

☎ (0482) 96-0566

道順

鳩ヶ谷よりバス  
5分、バス停ク  
ルワ下車1分、  
赤山山王神社そば



**姫柿** (Princess Persimmon)  
[老柿柿・Diospyros Korbifolia Hemel]



株式会社 樹芸 [JUGEI]

〒277-0033 千葉県柏市増尾 2-11-19  
Tel.04-7173-0908 Fax.04-7173-9085  
(ホームページ) <http://www.hemegaki.co.jp>

2000年10月発行  
3,400円(税込送料込み)  
お問い合わせは樹芸へ

# 精興園

〒729-3111 広島県芦品郡新市町金丸  
TEL. (0847)53-8211 FAX. (0847)57-8455  
振替 広島2-60 広島銀行新市支店 普通口座：64152



フローリストの仕事のすべてがわかる  
**お花屋さんマニュアル** 改訂版  
成功する店づくり、流通、仕入れ、ショップガイド  
AB判・96頁 定価1,260円 ISBN4-416-40617-7

花のアートとビジネス誌

## フローリスト

●毎月8日発売／通常号定価840円



古都の食文化を担って  
**現代にいきづく京の伝統野菜**  
指定野菜の生産現場、歴史と四季折々の「野菜時記」  
菊池昌治 著 四六判・288頁 定価1,890円 ISBN4-416-40610-X

野菜・花・果樹の総合園芸誌

## 農耕と園藝

●毎月23日発売／通常号定価950円

 誠文堂新光社 東京都文京区本郷3-3-11 <http://www.seibundo-net.co.jp/>  
TEL.03-5800-5780 FAX.03-5800-5781 定価税込



## カキツバタ育種・生産

からころも  
きつつなれにし  
つましあれば  
はるばるきぬる  
たびおしぞおもふ



〒460-0005  
名古屋市中区東桜2-18-13  
TEL 052-931-8701  
FAX 052-931-8727

カタログは、下記のHPをご覧ください。  
<http://www2.starcat.ne.jp/hanaya3/>



誠実と信頼のシンボル  
フタバ印

野菜種子  
牧草・飼料・緑肥種子  
草花種子・球根・種実草  
埼玉特産大和芋・里芋・甘藷苗

種子用馬鈴薯・生姜  
果樹苗・花木苗  
農業用フィルム・ハウス  
農業用生産出荷資材

農業用各種器材  
園芸用品全般  
肥料・農薬  
緑化資材・造園工事

オランダ Griendtsveen社製フローズン・ブラックビートモス輸入発売元  
生産・卸売・小売・輸出入

# 野原種苗株式会社

S39園卒 野原 宏

〒346-0002 埼玉県久喜市野久喜1番地

☎ 0480-21-0002  
FAX 0480-23-5005

## 高品質時代の施肥管理

元肥 (速効+緩効性…長期持続肥料)

**マグアンプⅡ**

20kg

Lサイズ・Mサイズ・Sサイズ

N-P-K-Mg  
**6-40-6-15**

使用方法はマグアンプKに準じます。

咲かせたいのは笑顔です。



株式会社 **ハイポネックス ジャパン** (農芸プロダクツチーム)

大阪 〒553-0001 大阪市福島区海老江5-1-1 ☎ 06-6458-9272 東京 〒156-0052 東京都世田谷区経堂2-6-6 ☎ 03-3428-7000

液肥 (水溶性肥料)

**ピーターズ**

10kg

(各種微量要素入  
高純度粉末液肥)

豊富な品揃えで、生育ステージ、栽培条件、栽培環境に合わせてお選びいただけます。



錠剤・置肥肥料

**プロミック®錠剤**

10kg

(鉢物用錠剤置肥)

鉢花、花壇苗、野菜苗、ハーブ、花木類、ポット葉ボタン、大型植物などの生産に幅広く使用できます。一錠の重さが均一のため、施肥の省力化に適しています。



スタンダード  
タイプ

速効きタイプ

\*商品によりパッケージが異なる場合があります。

## 明日の園芸を創るパイオニア



(株)ハーベストガーデンシステムズ

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤1-18-23

代表取締役 松田 一良

TEL 03-3425-8987 FAX 03-3425-8953

## 観葉植物と花木鉢物

卸売

株式会社 川崎植物卸売センター

有限会社 はら園芸

〒213-0014 川崎市宮前区菅生ヶ丘1番1号

Tel 044-976-3445

Fax 044-977-9951



# 我が校の園芸療法の取り組みと岐阜県の取り組み 県内の事例紹介

岐阜県立 国際園芸アカデミー

後 藤 美佳子

## はじめに

今回このように寄稿する機会をいただきましたことにお礼を申し上げますと共に、今春より教壇に立ち始めたばかりの、まだ新参者の私にお声をかけて下さった上田善弘先生ならびに渡辺均先生に心からお礼申し上げます。

とはいえ、正直に白状いたしますと…。8月の、蒸し焼きになりそうなほどに暑かったある日(学校のある岐阜県可児市近辺は、今夏37～39度を連日記録する猛暑だったのです)、この原稿のお話を上田先生から最初にいただきました際はとても引き受ける自信がなく、むしろ「どうやってお断りしよう…」の「言い訳探し」ばかりが頭を巡っておりました。お断りする文言に頭をひねりつつ、断る理由を作るのに園芸療法の分野に自分が携わったこれまでを(いかに未熟か)振り返ってみましたら、気づけば早10年。園芸療法が雑誌や書籍で紹介され始めて自分も学びたくなり、誰から学んだらいいのか、どこへ行ったらよいか……居ても立ってもおられず、とにかく卒業後初めて上田先生に電話。思いの丈を伝えたとこ、澤田みどりさん(NPO法人 日本園芸療法研修会代表)をご紹介いただいたのでした。

そんな10年前の、まだ学生気分も抜けきらないままチャラン…ポランと働いていた私を見捨てず、呆れることなく、親切にお導き下さった上田先生にご恩返しの一端になればと思ったのです。未だ勉強中で途中経過の状態ではありますが、学校紹介と併せて岐阜県内の事例ではありますが、今年で6年目に入りました園芸療法の活動現場の紹介を、現状の課題などもふまえてご報告したいと思います。

## 学校紹介

当校、岐阜県立国際園芸アカデミー(以下アカデミー)は岐阜県可児市郊外に建つ木造校舎の学校で、学

校教育法に基づく「専修学校」に位置づけられ、平成16年4月に開学いたしました。隣接する県立農業大学校やグリーンテクノ研修室(小、中、高等学校教員のための農園芸研修施設)とアカデミーを結ぶ道は、梨園や牛舎、地元の生活道路のくねくね小道やため池、田んぼに畑、雑木林を抜けながら行き来する、とても気持ちのよい散策コース。辺り一帯は植物や自然について学ぶには願ってもない環境に囲まれています。

就学は2コースに分かれており、4年制の上級マイスター科は1学年約10名の定員で、受験資格は短期大学卒業以上またはこれと同等の学力を有すること、2年制のマイスター科は1学年約20名の定員で、受験資格は高等学校卒業以上またはこれと同等の学力を有すること、としています。

4年制の上級マイスター科は、  
・生産コース(生産・流通分野)  
・装飾コース(装飾・造園・緑化分野)  
・環境コース(環境・景観・癒し・利用分野)  
の3コースに分かれ、園芸療法・園芸福祉について学ぶには環境コース、癒し・利用分野を選択していただくこととなります。

授業内容につきましては、1年次前期は希望コースを問わず全体を包括的に学びますが、1年次後期より順次コース別の授業が始まります。園芸療法・園芸福祉について学ぶ授業は諸先生方のお力を借り、分担しつつ進められており、次のような内容があります。

### 上級マイスター科

- 1年前期必修:「社会園芸学」「環境原論・実習」
- 1年前期選択:「リハビリテーション論」
- 1年後期必修:「園芸療法概論」「環境原論・実習」
- 1年後期選択:「社会福祉論」
- 2年前期選択:「園芸療法実習」
- 2年後期コース必修:「園芸療法実習」
- 3年前期コース必修:「園芸療法実習」

この春からは客員教授として年に数回お越し願うこ

とになりました、花卉研の大先輩の近藤まなみ先生は開学準備の段階から本校でご尽力下さっており、カリキュラムの作成、近隣の高齢者、障害者福祉施設など各実習現場との折衝、授業の遂行等々すべて。ご多忙の中これまでの2年にわたって整えて下さり、本コースは開学当初より質の高さを誇る内容で走り始めていと自負いたしております。

また、先日9月8日は1年生の授業である「社会園芸学」の前期最後のまとめとして、特別講演を催し、東京農業大学教授の松尾英輔先生\*1にお越しいただき、大変貴重なお話を賜りました。園芸療法の草分けであり、人間と植物の関係性の大切さを唱われ続ける先生の情熱は、学生を惹きつけて離さない重みが溢れていました。

\*1：主な著書は『園芸療法を探る』グリーン情報 1998年、『社会園芸学のすすめ』農文協 2005年。  
九州大学大学院名誉教授、人間植物関係学会会長、NPO法人日本園芸療法研修会顧問などを歴任

2年次から始まる「園芸療法実習」では、車で10分足らずの所にある介護老人施設（特別養護老人ホームとデイサービスセンター併設）春里苑へ、月2回、隔週（金）に材料や道具を準備しては伺い、園芸活動を展開しています。

春里苑での園芸療法実習を具体的にご紹介します。午後、材料（主にアカデミー内園芸療法実習園より収穫、加工、保存している物を使用。今夏の例では、藍・ひょうたん・かぼちゃ・わた・ペパーミント・ローズマリーなど）や道具（各種補助・改良具、アイディアグッズ、軽量グッズなど）を車に積んで学校を出発 PM1:10頃、春里苑到着。

テーブルのセッティングや材料・道具類の準備、職員さん、園芸福祉サポーターさん\*2を交えての作業確認、利用者さんへの参加の声かけ。

PM1:30～ あいさつ、今日の内容説明（当番制で学生が活動紹介や植物の説明。秋からは学生自身で活動計画を作成）。

PM1:45～2:30 園芸療法実習（利用者さんにとってはレクリエーション活動の一環としての「園芸」）、学生は1～3人のケースを担当しており、その利用者さんとの交流の中で、園芸療法の目標設定～効果検証を行います。職員さん、園芸福祉サポーターさんには、全体で25名程ご参加下さる利用者さん達のサポートと自立支援、会話などの交流をしていただく形になっています。

\*2：岐阜県が養成講座を開催し、認定しているボランティアの名称。詳細は次項、岐阜県における～参照



アカデミー内にある「園芸療法実習園」全体の様子



授業風景

学生は実際に車いすに乗ったり立位でレイズドベッドを使用することで使い勝手を確かめたり、身体に障害があっても園芸ができることを体験する

さらに3年次後期より卒業研究、制作ならびにインターンシップに時間をかけていきます。

2年制のマイスター科は、

- ・生産コース
- ・装飾コース
- ・造園緑化コース

の3コースに分かれ、2年次の「植物利用論」という授業の中で園芸療法、園芸福祉について触れています。

両コースに共通した学校の特色として、

- ・実践的な学習を重視した独自のカリキュラム
- ・社会性をはぐくむインターンシップ
- ・少数濃密指導
- ・分野の枠を超えた総合的な学習

といった教育方針を掲げています。

アカデミーでは実践を重要視した授業を行っているため、園芸療法・福祉の分野でも校内の「園芸療法実習園」で、実際に園芸作業を体験することで個々の学生の身体機能と五感体験を通じた体験（主観）談を伝え合い、客観化できるよう、日々、ハーブや野菜、季節の草花に関わってもらっています。



園芸療法実習園内「流れ」のコーナー  
小川のせせらぎを聴き、風のそよぎを感じるといった、自然や植物との受動的（静的）な関わりの効用を五感で感じる場所



本館内環境ゼミ室にて  
収穫物をふとん干しや干物づくり用のネットなどで乾燥させている風景

## 岐阜県における園芸療法・ 園芸福祉の取り組み

岐阜県では平成12年8月に園芸療法に関する行政機関（園芸・医療・福祉・造園）や関係団体（福祉事業団・理学療法士会・作業療法士会・健康長寿財団・花の都ぎふ花と緑の推進センター）で構成する「岐阜県園芸療法研究会」を設置。2カ年にわたり園芸療法に関する研修会、シンポジウムを開催すると共に、先進地事例調査等を通して県内での園芸療法の活用場面や手法等について研究してきました。

その結果、医療・福祉の現場から、園芸作物の栽培・管理を通じて園芸療法プログラムの支援ができる人材確保に対して強い要望がありました。これらの声に応えるため、療法的な活動にとどまらない、広く一般の人をも対象とした園芸福祉を普及させるべく、園芸の知識を持ち、福祉施設などでの栽培指導や支援を行うボランティアを「園芸福祉サポーター」として位置づけて養成。同時に、体制整備や実践活動の推進、園芸福祉の一層の啓発・普及・定着を計ることを目的

として、平成14年6月に岐阜県園芸療法研究会を発展させる形で「岐阜県園芸福祉協議会」（事務局：花き総合指導センター）が設置されました（以上、岐阜県立国際園芸アカデミー 技術主査 井戸誠二氏による報告書、「園芸福祉サポーター養成で園芸福祉を推進」から抜粋）。

園芸福祉サポーターの養成は日本園芸福祉普及協会のガイドラインに基づいて岐阜県園芸福祉サポーター養成講座によって行われています。受講資格は「県内在住または在勤の方で、講座修了後、県内の医療・福祉施設や地域花壇などの現場で、岐阜県園芸福祉サポーターとして確実に活動できる見込みのある方」とかなり限定しています。でもその代わりといっちは何ですが、5日間全20時間に及び講義と実習はすべて無料で受講できます。この全講座修了後、岐阜県より園芸福祉サポーターとして認定されるといったシステムになっています（但し、講座修了後に受験資格を有する、日本園芸福祉普及協会認定の初級園芸福祉士への受験、登録は有料）。

現在4期生までいる園芸福祉サポーターは総勢268名、活動場所数も152カ所となり、年々県内広域で園芸福祉が普及・定着している様子がわかります。

アカデミーにおきましても、これまでも園芸福祉サポーター養成講座の受講会場として土日を利用してきました。そして今春より、「園芸福祉ガヤガヤ会議」と称して、近隣の園芸福祉サポーターと話し合いの機会を設け、サポーターの活動報告・紹介やアカデミー側から春里苑での園芸療法実習の支援依頼や園芸療法実習園の活用の可能性についての意見交換など、様々なことを話し合っています。とにかく、資格を取っても有償ボランティアの範疇での活動は仲間や地域がしつかりと手をつなぎ合わないと心細さを感じ、向かう足も途切れがちになります。人と人（サポーターと施設利用者、施設職員、学生、教職員など）を繋ぐ媒介として、アカデミーが、ハード・ソフト面共に充実していくことが何より求められている役割と感じています。

## 活動紹介

これまで、アカデミーや岐阜県についてのご報告をさせていただきましたが、最後に事例紹介として、今年で6年目を迎えた、岐阜県恵那市上矢作町での園芸交流活動（高齢者自立支援事業）を紹介させていただきます。

本活動は平成12年の秋、当時の特別養護老人ホーム福寿苑の職員さんや地域担当の保健師さんの熱い思いや出会いから始まりました。当時より高齢者率、高齢者世帯、独居世帯の多くなりつつあった山間地帯の上矢作町は、町面積の80%近くを国有林が占め、住民のほとんどが農業や林業に従事してきました。今後さらに増えていく高齢者のための在宅介護ならびに自立支援事業が検討されていた中、住民の生活歴（農耕、木工業や地域の文化的行事など）に馴染みが深い園芸療法は何より高齢者に声かけしやすい材料だったと思われ返されます。「園芸交流活動」と命名したのは、その保健師さん曰く、町で車に乗らない高齢者は、とりわけ徒歩圏内で日常生活が完結することが多く、小・中学校時代の同級生とすら機会がないと出会えない交流の乏しさを、本活動を通して解消していきたいという思いからでした。

本活動の目的は大きく4つ、以下のように挙げられます。

1. 参加者同士、参加地域同士のふれあい・おしゃべりの場
2. 閉じこもり防止のきっかけ・場としての活用  
外出、近所との交流が乏しくなっている人への働きかけ
3. 日頃の運動不足の軽減、筋力やバランス感覚の維持、転倒防止として在宅でできる軽度な屋内外作業、そのためのストレッチ体操の紹介  
\* 毎回、活動を始める前に「みんなの体操」を行っています。
4. 日頃の食生活改善指導、疾病の悪化予防  
\* 昼食時に栄養士による食事指導、メニュー紹介を行っています。

活動内容はいわゆる園芸作業（種蒔き、挿し木、プランター類への寄せ植え、花壇や庭のメンテナンス作業など）や、クラフト制作（押し花、ドライフラワーを使った壁掛けやリース、草木染め、木工）などです。本活動で大切にしているのは、材料となる植物も自分たちで栽培し、収穫から加工まで 自給自足 すること、もしくは家から持ち寄ったり、近所の裏山や河原で収集してきたものを共有し合う 地産地消 ことにあります。かつ、続けて出来ることに重きを置いた声かけを心がけ、がんばりすぎない、ほどほどの、また来なくなる場づくりを大切にしています。

以下の写真は、先日8月31日に行いました活動「多肉植物のタペストリーづくり」の紹介です。この日も、

近くで拾ってきた(?)倒木や流木、使わなくなったまな板などを持参し合って壁掛けを作りました。



制作中の風景

皆さん互いに多肉植物を分けあったり、困難な行程を手伝い合って作っている



多肉植物の  
タペストリー見本  
土台は地元の間伐材



栄養士による食事指導と昼食の献立紹介。塩分を控えた味付け方法やカルシウムの無理なくおいしい取り方などを毎回内容豊かに紹介してくれる

現在は、活動日に上矢作福祉あんしんサポートセンターより職員さん2~3名、栄養士さん1名、そして園芸療法士1名という、比較的恵まれた体制で続いています。しかし今後の活動継続のためには後継者の育成を視野に入れていかなければなりませんし、対象者の自立支援もさることながら、市町村単位での自治体の変わらぬ理解と支援が不可欠と痛感しております。そのためにも、この活動をアナウンスし続け、園芸療法・園芸福祉の効果を利用者の皆さんにフィードバックすることを忘れず、また市民の皆さんに広く理解していただくためにも常に真摯な対応をしていくのが使命ではないかと、今回を以て改めて内省しております。

# エチオピアでの2年間を終えて

登坂 哲也

## はじめに

2003年、花卉園芸学研究室を卒業し、施設園芸学を学びたいと考えた私は、岐阜大学大学院への進学を希望した。大学院で施設園芸学を学んでいくうちに、自らの知識や技術がどの程度世界に通用するものなのか、疑問に感じ始め、独立行政法人 国際協力機構（以下、JICA）で青年海外協力隊員（以下、JOCV）として途上国で活動しようと思ったのである。

そして2003年8月、岐阜大学大学院で学生であることに未練を残しながらも、海外で自らの力を試したいという気持ちのほうが強く、中退を決めたのである。

## 「いざ、エチオピア」の前に

選考試験を無事に通過し、福島県二本松市での3ヶ月間に及ぶ語学訓練を終了した私たち約200名は、それぞれの国に分かれて派遣される日が来た。エチオピアへ派遣されるのは私を含めて5名、年齢も職種も全く異なるメンバーであった。

「エチオピアは『アフリカの角』と呼ばれる場所に位置する世界最古のキリスト教国家で、アフリカ諸国の中でも唯一独立を守った国としても知られており、現在では Africa Union (AU) 本部 Economic Commission of Africa (ECA) 本部が置かれるなど、ケニア・南アフリカ共和国に並ぶアフリカの中心地として急成長している国である。また人口7,000万人を擁するこの国には約80の民族と50の現地語が存在しているが、公用語としてはアムハラ語、学校では英語が用いられている。首都の標高は約2,300mで、もっとも低い場所はダナキル砂漠で標高は - 126m、もっとも標高が高い場所はラス・ダッセン山で4,543m 」。

日本を出国する前の私のエチオピアに関する知識とは、この程度である。未知の国での新たな生活がスタートしたのである。



インジェラとワット

## インジェラ・ティプス・ワット ... WHAT?!

まず、問題となったのが食生活である。エチオピアは先にも紹介したとおり、世界最古のキリスト教国家で独立を守り通した国、それ故に食事も他のアフリカ諸国とは違い、個性的である。主食はインジェラと呼ばれるクレープのようなもので、日本人観光客には「ぼろ雑巾」と言われている。原料であるテフ [Eragrostis tef] を発酵させ焼いたもので、これにワットと呼ばれるシチューやティプスと呼ばれる焼肉のようなものを巻いて食べるのである。だが、最初はインジェラの酸味が強すぎて、衛生環境が悪くて等、胃薬を離せない生活を余儀なくされる人もいたが、私は幸い、群馬の山奥で大切に育てられた(?)おかげで、食あたりは一切なかった。この他にも生肉や、内陸国であるにも関わらず生魚を食したりと、独特な食習慣を持つエチオピア人ではある。だが、非常に保守的で、日本食などの見慣れない食べ物には抵抗を感じるようで一切口にしない人も多く見受けられる。

また、エチオピアはコーヒー発祥の地としても知られ、人々は日常的にコーヒーを飲む習慣があり、ハレの日にはコーヒー・セレモニーと呼ばれる、日本の茶道のような文化も持っている。

## ハワサ大学農学部園芸学科

エチオピアへ到着し、首都での3週間の現地語訓練を終えた2004年9月、私は南部諸民族州の州都アワサにあるハワサ大学農学部園芸学科に赴任した。ハワサ大学は2000年に新設された総合大学で、現在は7学部8,000名の生徒が学んでいる。その中でも農学部園芸学科は2003年に設置されたもっとも新しい学科で、教員数も赴任当時は私を含めて4名。担当講義は園芸学科1年生を対象とした「観賞植物生産学」と、園芸学科3年生の「施設園芸学」と、植物科学科3年生を対象の「花卉園芸学」の3つの講義であった。

担当になったとはいえ、大学を卒業し、大学院に進学するも中退。まともな実務経験はまったく無く、途方にくれる毎日だったが、任されたからにはやるしかない。でも意気込んで望んだ最初の講義は大失敗に終わった。その理由は、私がエチオピアの教育をまったく理解していなかったということに最大の原因があった。エチオピアでは公用語でアムハラ語、教育では英語を用いるという話を聞いてはいたが、日々アムハラ語で会話している学生が、大学の講義で使われる専門

英語をその場で理解することは困難である。そのために教員はすべての内容を黒板に書くか、プリントを用意するという事を全く知らなかったのである。

それからは毎日が配布用のプリントの準備に追われたが、なるべく時間を作り、学生との対話を持つようにして授業内容を考えるなどの工夫を行った。

### 「君は日雇い労働者か!？」

新設大学の新設学科ということもあり、赴任当初は園芸学科が自由に使える圃場がなく、植物科学科の農場の一部を利用させていただくという形を採っていた。特に花卉部門には自由な場所がなく、実習に支障を来していたために、荒地の開墾を始めることにした。学期間休みの学生がいない間に農場を整備して、新学期スタートと同時に花卉も実習が出来るようにしなくてはと考え、除草作業をしていたある日、学科長に呼び出された。「君は日雇い労働者か？」と、質問されたのである。最初、質問の意味が全く分からずがカンとしている私に、学科長は「除草作業は日雇い労働者の仕事であり、君の仕事は机の上にある」と一喝されたのである。

日本では教員と学生が一緒になって圃場の整備をし、植物の成長を見守ることが当たり前のように考えられているが、エチオピアでは許されない。では、エチオピアの大学教員はどのように実験や研究を行うのかというと、大半の教員は博士号取得と同時に、実験・研究は行わない。博士号取得を目指している教員は、農場の技官に指示を出し、データ収集をさせ、農場に行くのは非常に稀なのである。これは文化の違いだからと許される事なのであろうか。



ハワサ大学 メインキャンパス



ハワサ大学 農学部正門



赴任当初の大学農場

## 銃撃戦勃発

雨期明けのある朝、家の玄関を出た私に聞こえてきたもの、それは銃声だった。我が家から大学までは直線距離で約200m、こんな時、JICAはといえば「自宅待機し、情報収集してください」と。JICA関係者は自宅待機中、現地人は自宅に電話を持っていないという状況下でどのように情報収集をしるというのだ、という疑問を感じながらも、講義開始時間が迫っているため、携帯電話を片手に出勤した私を待ち受けていたのはいつもと変わらない学生であった。

講義中も鳴り響く銃声に戸惑う日本人教師、そしていつもと変わらない学生。こんな姿を見て学生をたたくましく思いながらも、こんな状況下でも動じないような人間を育ててしまったエチオピアの環境に少し腹立たしくも感じられた。

講義終了後、学内で学部長に会い話を聞いてみると、「与党の選挙妨害に対する野党の反乱である」との事だった。学部長曰く、「農学キャンパスでは、学生寮の食事が少なくなる限り暴動は起こらない」と自信満々であった。

その後も度々、小規模の暴動は起こったが、銃撃戦に発展することもなく解決された。また学内で学生の暴動が発生した際も学部長が農学キャンパスへの警官隊の突入を阻止し、学生と対話するなど、的確に対応した。不安定な政権下であるがために、日本のように学部長という役職が単なる飾りではなく大きな意味を持ち、またそれなりの人格者でなければ出来ない重要なポジションであるとも感じられた。

## 気の良いオヤジ達

オフィスにいても来るのは雑用や上司の愚痴を言う同僚ばかりであり、私が専ら時間を過ごしたのが農場である。そこは英語が通じない、つまり言葉がろくに通じない環境である。しかし、そこには「気の良いオヤジ達」がいる。民族も様々である、アムハラ族もいれば、ワラエタ族もいる、シダモ族もオロミア族もいる。彼らの共通語は公用語であるアムハラ語である。しかし、同一民族同士ではそれぞれの言葉を未だに日常的に使っている。私の3週間学んだアムハラ語では到底会話にはついていけないが、彼らにとってはそんな事は問題ではないのだ。外国の人とコミュニケーションを取るという事を素直に楽しんでいるのである。

そしてアムハラ語の挨拶を覚えるので精一杯であった私に、各民族の挨拶を覚えてくれたりもする。彼らは非常に頼りになり、厳しい私の現地語の先生である。私がワラエタ族の挨拶を覚えた時、シダモ族の挨拶を覚えた時、たった一言のフレーズなのに大喜びしてくれた。ろくでもない卑猥な現地語を覚えてくれたのも彼らである。そしてこんな歌を覚えてくれた、

アディス アスタマリ カ ジャパン イマタ  
マスタマルンティト バ ボックス ミマタ

日本語に直訳すると「新任教師が日本から来た、授業中に殴られた」という意味である。これは、日本人が暴力的であるという意味では決してない。彼らは小中高の授業の中で日本の事も勉強する。資源の乏しい国、小さい国、でも世界の中でも有数の技術立国である日本、そしてその基礎を築いてきた教育というものがいかに厳しいものであるかを表現したものであると、友人は教えてくれた。

日本人は、エチオピア人から非常に尊敬されている。私は日本に生まれたというだけで、これまでの人生で特に何をしてきたわけでもないのに、尊敬される対象なのである。日本にいと日本の偉大さが全くわからない。これまでオーストラリア・中国に旅行した事はあるが、日本が偉大であるなんていう感想は持たなかった。オーストラリアは先進国だし、中国は日本と近すぎたからだろう。今更ながら、私はそんな尊敬される日本人であったであろうか？ 配属先であるハワサ大学農学部付属農場における日本人の立場が悪くなった場合、この元凶は私である。ただし、日本人の評価が非常に高まった場合もその評価は私に下されたものである。後者である事を祈るのみである。

## 援助の功罪

日本を含めた海外の援助にも大きな問題があると思う。いまやエチオピア人は援助なしでは生活できない。こんな環境を作り上げたのは日本を含めた先進国である。食糧援助は海外の人々を思いやる美しい行為であるというのは単純な発想である。本当に途上国の人の事を考えるのであれば、食料援助や資金援助などという単純な発想には行き着かないはずではないだろうか？ 本当に途上国の人の事を考えるのであれば、途上国にあるものを利用し、海外の資金援助を一切入れ



日本のODAで建設された道路

なくても、彼らが生活できるだけの知識と技術を与えてやれば良いのではないだろうか？

エチオピア人の同僚がこんな事を言っていた、「外国人が来ると、道端に乞食が出る」と。援助によって国は貧しくなるのである。

### 終わりに

2004年10月から切りバラ輸送のための定期便がオランダとエチオピアを往復する事になり、急速に成長し続けるエチオピアの花産業は、現段階ではエチオピア



大学院園芸学専攻の学生たち

人はその中の単純労働者でしかない。多くの切りバラ生産者は海外資本であり、経営者もインド人が多数を占める。

そして、2006年9月、ハワサ大学農学部園芸学科第1期生60名が巣立つ予定である。たった2年間で彼らに教えられたことは限りなく少ない。そしてやる気の無い学生も目立ったことは事実であるが、これからのエチオピアの花産業を支えるのは紛れもない彼らなのである。そんな「アディスアベバ」(訳：新しい花)に私は期待せずにはいられない。

## トピックス

### 国際園芸博覧会「ロイヤルフローラ ラチャブルーク2006」の概要

1. 開催期間 平成18年11月1日～平成19年1月31日(3ヶ月間)
2. 開催場所 タイ王国 チェンマイ
3. 開催規模 予想入場者数 200万人  
参加国 約30カ国
4. テーマ等 タイ国王在位60年及び生誕80年の祝賀記念行事として開催  
テーマは「人類の愛の表現」

(参考) 過去における国際園芸博覧会への参加状況(農林水産省)

1990年「国際花と緑の博覧会」(大阪市)

1992年「ハーズ・ズータメア国際園芸博覧会(フロリアード 92)」(オランダ)

1993年「シュトゥットガルト国際園芸博覧会(IGA 93)」(ドイツ)

1999年「中国 99昆明世界園芸博覧会」(中国)

2002年「ハールレマミア国際園芸博覧会(フロリアード 02)」(オランダ)

# 新規就農実践記

花組ファーム  
公田博三

## 楽しい毎日、でも楽はさせてもらえない

今年（2006年）4月、茨城県笠間市（合併前の友部町内）において新規就農を果たし、単身移り住んで鉢花栽培を始めました。本原稿を書いた9月の時点で半年を経過したばかりで、まだ市場へ出荷するまでに到ったものはありませんが、来春からの出荷を目指していくつかの品目の栽培を行っています。

農場はほぼ70m四方の矩形で、約5,000㎡の面積がありますが、栽培施設としては約300㎡のパイプハウス1棟でスタートしました。年内には同じ大きさのものをさらに1棟増設し、2棟にする予定です。

農場に花組ファームと名前を付けていることからご想像いただけるように、園芸別科で花卉を専攻しました。2005年3月に別科修了後、さらに同年4月から今年3月までの1年間、柏のフィールド科学センターにおいて研究生として鉢花栽培の経験を積みました。

健康上の理由もありサラリーマン生活を少し早目にリタイアし、別科に入学したのが56歳。60歳までには就農を果たし、生産者として10年間頑張ることを目標に3年間、そのために必要な知識・経験の習得と70歳まで元気で働ける身体づくりを行ってきました。

花卉産業に関してまったく予備知識を持っていなかった別科入学時点では、切花栽培を行うのをイメージしていましたが、別科の2年の間に、鉢花栽培、それ

もあまりポピュラーでない品目を多品種少量栽培したいという思いに変化しました。またこの間に、規則正しい学生生活と食餌療法により、60kgを超えていた体重も50kgにまで落とすことができ、おかげで健康体を取り戻し、体力にも自信を持つことができました。

目標としていた60歳より1年ほど早く就農でき、多くの植物に囲まれて毎日楽しくやっていますが、広すぎる農地がゆえに、除草など栽培施設以外の部分の維持・管理にも労力を割かなければならないため、なかなか楽はさせてもらえません。

## 一見熟慮断行、実情は猪突猛進

新規就農を目指して別科2年の後半からそのための活動を始めました。当初は自宅のある千葉県流山市周辺での農地の借用を前提に就農地探しをしましたが、露地栽培での借地は可能としても、施設栽培での借地は不可能に近いこと、ましてや農地の取得は資金的にも困難であることを思い知らされました。

この間、新規就農支援に関する情報収集をする一方で、新農業人フェアなどに参加して直接話を聞いたりしました。その結果、就農地としては茨城県にターゲットを絞りました。結果的には通作はできませんでしたが、場所によっては自宅から通作の可能性もあること、そして鉢花の集出荷に関する流通センターが組織されていることが同県を選んだ理由です。

茨城県の県南・県央地域で、サラリーマンを辞めて新規就農された方二人と別科を修了された鉢花生産者二人を見つけて連絡をとり、施設の見学と新規就農へのアドバイスをお願いしました。新規就農された方からは農地の借用または取得は有力な伝がない限り非常に困難であることを教えられました。

残念ながら茨城県にはなんら伝がないため、苦肉の策として農地の借地・売地情報を不動産業者のWEBなどから探して回りました。いくつか情報が見つかり、その都度現地を見に行き、昨年10月に最終的に決めた



農場入口からみたパイプハウス全景

のが売地として出ていた当時は友部町であった現在地です。幹線道路から近く、農場への取り付け道路の幅も十分あり、土地がほぼ矩形で使い勝手がよく、灌水の井戸も農地内に既存のものがあったことなどが決め手になりました。

農地の新規取得が困難なのは新規就農されたお二人から聞いており、物件は見つかったものの農地法に基づく農業委員会の許可が下りるかどうか心配でした。幸い、別科を修了したことで研究生としての計3年間の経験、申請書に添付して提出した無理のない(と思われる)就農計画書が功を奏し、昨年12月末に農地法第3条に基づく農地の譲渡の許可が下りました。農業委員の中に別科修了生の方がいらっしゃったのも味方したようです。10月中旬に売地情報を得てから取得までに2カ月半ほどかかりましたが、それでも新規取得としてはスムーズに行ったケースのようです。

許可が下りるまでは先に進められなかったことと、許可が下りたのが年の瀬も押し詰まった時期で、正月明けまでは動きようがなかったことから、何とか4月にはスタートしたかったためにそれからの準備は大変でした。整地、ハウスの仕様の決定・発注と建設、水回りと電気工事、仮設トイレや事務所として使用するユニットハウスの手配、単身移住のための住まい探し、土や鉢などの生産資材の手配などを2カ月で済ませました。

幸いなことに旧友部町内には、前述の別科の先輩の鉢花生産者の一人の佐藤花園の佐藤さんがおられ、12月のポインセチアや4月のアジサイの出荷時期と重なって忙しい時期にもかかわらず、様々な相談にのっていただいたことが大きな助けとなりました。

3月下旬にパイプハウスが完成し、フィールド科学センターでの研究生の時に育成した親株類を運び込み、4月からのスタートにこぎつけることができました。

別科入学を決めた時から新規就農までの過程を第三者的にみると、一見熟慮断行の印象を受けますが、実情は猪突猛進。サラリーマン時代の経験から計画作りと数字には強いのでそれなりの準備はしましたが、これと決めたらそんなものは吹っ飛んでしまい、新規就農ありきで、わき目もふらずがむしやりに突き進んだというのが本当のところ。これまでの59年間の自分の人生を振り返ってみても、サラリーマン時代の1回の転職、早期退職、いずれの時もいつも同じパターンでした。やっぱり、来年還暦を迎えるイノシシだからしょうがないかと妻もあきらめています。



栽培品目のひとつのアニソドンテア (*Anisodonteas capensis*)

現在は、農場から約5km離れた笠間市内にアパートを借りて住み、孫の顔を見たさに月に3回程度日帰りで、自宅のある流山市までの片道2時間、75kmの距離を往復しています。

### 何を作るか、走りながら考える

フィールド科学センターで研究生として在籍した1年間に、挿し木を主体に栄養系の繁殖での鉢花栽培について約50品目をトライしました。その中で、4号(寸)程度の小鉢仕立てが可能で、常緑、耐寒性~半耐寒性、挿し木における発根率が70%以上のものから栽培を始めることにしました。ある程度の作型や仕立て方について理解できたものもあれば、1年ではまだまったく掴めていないものもあります。

すでに挿し木苗を2.5~3号ポットへ鉢上げしたものとして、アニソドンテア (*Anisodonteas capensis*)、ニオイバンマツリ (*Brunfelsia australis*)、グレビレア (*Grevillea spp.*)、ギョリュウバイ (*Leptospermum scoparium*)、ギンバイカ (*Myrtus communis*)、ミントブツシュ (*Prostanthera ovalifolia*)、ツリージャーマンダー (*Teucrium fruticans*)、オーストラリアンローズマリー (*Westringia fruticosa*) などがあり、いずれも来年度500鉢程度の市場出荷を目指しています。

いずれも末端価格で500円前後のもので、研究生時代に柏の市場に出荷したことのあるアニソドンテアやツリージャーマンダーのセリ値から考えて、出荷価格は200円前後の商品とみています。就農計画書においても、この程度の価格を想定して収支を計算していませんので、どうみても採算のとれる事業構造にはなっていません。でもスタート時点はそれでもよしと考えました。

写真でもわかるように、1棟目のハウスの中には現在植物園状態ですが、10月には建つ予定の2棟目は出荷予定品目のみにするつもりです。前述した8品目は耐寒性があり、その程度も比較的似通ったものばかりです。ハウスを連棟ではなく単棟にしたのも、一度に多

額の設備投資ができないこともあります。多品種少量生産を行う関係上、燃料費の高騰と商品価格から、いかに冬の暖房コストを下げるかが課題と考えたことによるものです。

植物園状態の品目の中には来年以降栽培予定のものもあれば、栽培を断念するものもありますが、今後もさらに新たな品目の導入を検討したいと考えており、既存のこの1棟の植物園状態は将来的にも解消しないだろうと思います。

その中で、いかに採算性のよい品目にシフトさせるか、栽培品目をいかにうまく組み合わせる設備を効率よく回転させるか、そのために何をやるかはこれからも走りながら考えることにしています。

### 鬼もあきらめる5年後の夢

初期投資1,700万円と3年目までに不足する運転資金は自己資金で賄うこととし、総額で約2,000万円を予定していました。ハウス2棟目でほぼ初期投資分は使い切りました。農地を購入により手当てした分、栽培施設への設備投資が減りましたが、実際にこの半年間やってきて、現在考えている生産方法だと一人で管理できるのは300㎡のハウス2棟、年間1~1.5万鉢の生産が限度であることもわかってきました。

作成した事業計画においては、3年目にこの規模を達成し、減価償却費を含めて収支トントンのところまで持って行くことにしています。この段階ではまだ労務費はゼロですので、私自身の生活費は持ち出しになりますし、当然、外部の労働力の導入は考えられません。

減価償却費は設備の耐用年数から考えて当面は新規の設備の増設のための投資に向けることが可能ですので、5年後には同規模のハウス4棟とし、同時に労務費が出るような事業構造を目指し、私以外の労働力の導入を図ることを思い描いています。しかし、その時点で



さながら植物園状態のハウス内風景

も私の労務費(生活費)は依然として持ち出しの状態です。年金生活が可能な私としては、それは想定内です。

私以外の労働力の導入についていえば、雇用という形態よりも、花卉生産者として新規就農を目指す方が、イコールパートナーとして一緒に働いてくれ、いずれは後継者となってくれることを望んでいます。冒頭で述べたように、私自身は10年間、70歳までは現役としてありたいと思っていますが、その後は後継者に譲ることを予定しています。後継者づくりを始めるための5年後であり、そこまでにそれができる経営状態に持って行きたいという夢を描いています。来年のことをいうと鬼が笑うといいますが、5年先の夢には鬼もあきらめることでしょう。

### 仕事は楽しくをモットーに

人生を楽しく、もちろん仕事も楽しくをモットーにこれまでやってきました。楽しくするためには楽なことばかりではないし、場面場面で周りの人々の支えがあったからこそできたと思っています。その意味でこれまで支えていただいた方々には感謝しています。

新規就農の過程でも、3年間の別科生・研究生期間中にご指導いただいた先生・技官の方々、花づくりの楽しさを一緒に学んだ別科花卉専攻のクラスメートや同窓生、アドバイスをいただいた鉢花生産者先輩諸氏、農地の取得や農場の立ち上げでお手伝いいただいた地域の方々など、数多くの人にお世話になりました。

でも一番感謝すべき相手は最愛なる妻かもしれません。自分の夢に向かって猪突猛進する私を、文句はいいながらも、しょうがないとあきらめて許してくれたのですから。

それらの方々の恩に報いるためにも10年間は頑張らなければと思っています。仕事は楽しみながら。

残念ながらまだ「花組ファーム」のWEBサイトは立ち上がっていません。この原稿が掲載された「花葉」誌が発行される頃までには立ち上げたいと目下勉強中です。

関心のある方のご来訪、ご連絡を歓迎いたします。所在地住所および連絡先は以下の通りです。電話は常時留守電になっていますのでご承知おき下さい。

問い合わせ：〒309-1724 茨城県笠間市大古山463-29  
FAX / TEL: 0296-78-9400  
e-mail: hanagumi-farm@jupiter.ocn.ne.jp

# どうする！日本の花産業 トッランナーたちの読む次の時代

(株)サカタのタネ 久保田 芳久

今回のテーマにたどり着くまで様々な論議が交わされました。農家が、産地が、指導員が、流通が、この産業の閉塞感の中、「自分たちは何をしたらいいのかわからない」まま、迷う現実がありました。そして、その中で明らかに次に向けて成功の予感を感じさせる動きがある、でもそれは十分な形と大きさをまだ持ち得てなく……。これを「カオス 万物を誕生させた秩序無き混沌」と捉えました。

すでに形を成した者、なそうとしている者、迷いの中にある者にとって、トッランナーの話はきっと役立ちます。異能の話を紹介しました。

今回も、会場は日本歯科大学富士見ホールにて開催しました。参加者は310名となり、このテーマが関心高いことを示しています。

7月22日(土)

## 「花産業 ... データが語る次の時代のイメージ」

株式会社日本総合研究所 研究事業本部 河野 賢一 氏



園芸消費の動向を数値、グラフで示し、近年の右肩下がり の状況を明らかにしました。その中で、園芸ブームに若い人が参加していないシニアビジネスであったこと、90年代は世帯収入の多少が消費額の差になく、安売りが消費層の一部しか捉えていないことを明確に示しました。高級層の獲得に失敗しているのです。また、大都市に消費層が多いという思い込みがありますが、90年代は小都市、町村での拡大が見られるのです。その上で「閉塞と言うより、園芸界はまだ何もしていない」と指摘しました。

次の時代へのキーワードとして「ロングテール」「キャズム」「市民的交際文化」の3つを示しました。

「園芸商品の特徴は売れる物(ヘッド)が少なく、少量多種のロングテール部分が大事、売れるものだけにしたら売れるものも売れなくなる特質を持つ。また初期に手を付けるアーリーアダプターともっと人数のいるアーリーマジョリティーとの間にキャズムがあり、業界はそこに落ちたのでは。何か特定のマーケットで実績を作る必要があると指摘しました。

## 「産業人として目覚めよ 日本の花生産者」

カリフォルニア州 マツイ・ナーセリー 社長

アンディー・松井 氏



アメリカで切花菊、バラを経て、全米一の規模のラン栽培を行います。卓越した経営能力と機敏な判断・行動力は今回のテーマの「異能」に当たります。何度も日本で講演しながら変わらない日本の状況に「糠に釘」との感想を持っていました。それをあえて今回のテーマでお願いし、厳しくも愛情のある日本への提言をして頂きました。

松井さんご自身の経歴はすばらしく、先見の明のすごさに驚きます。また、経営感覚と売ることへの適切な判断に敬服する内容でした。

続いて日本の農協や市場、補助金などの話に及び、厳しい指摘を頂戴しました。日本の農家の体質にも同様です。そして日本の農政の企業排除の姿勢に厳しい注文を付けられました。日本の花消費事情の未熟な部分も指摘し、また家庭で買えない単価で成り立つ流通構造も指摘しました。日本の研究もしっかりしておられます。

「儲かる農業をやろう」との呼びかけには、ひときわ力のこもった講演でした。

### 「時代は変わる 今こそつかめ この勝機」

テクノ・ホリティ園芸専門学校 鶴島 久男 氏



今までも様々な提言をされてきた鶴島氏ですが、それらを寄せてまとめて訴える力強い講演でした。時代とともに変化してきたこの業界のようすを、古く貴重な画像を探して編集されたプレゼンは相当な画像数でした。日本と世界の花産業の劇的变化を目でわかる形にして示し、それを前提に「今とこれから」を投げかけました。トヨタの看板方式「無駄、無理、ムラ」を改善する方式を農業にもと。「足腰の強い自立生産者に」「産業人としての生産者」「花文化の担い手として」の訴えはお叱りにも似た熱のこもった提言でした。

### 「岐阜モデルを検証する」

産地ターミナルの更なる可能性を求めて

岐阜大学 応用生物科学部 教授 福井 博一 氏



岐阜花き流通センターの創設期、発展期、成功を歴史的に展開し、岐阜県の鉢花がいかにして伸びてきたかを検証しました。そして転換期です。数々の問題点、課題を挙げます。特に販売チャンネルの変化であるホームセンターの伸びは、市場出荷してきた流通センターに大きな課題を課しました。発展期に大きな恩義がありながら、市場はホームセンター対応に今一步の感がいなめないのです。また、消費者に着く品物の鮮度が問題となり、「商物分離」が唱えられていると。統合が進む量販店は市場をしのぐ販売量にもなる勢いで、それらとの新たな流通チャンネルの創設、また、ネットで販売実績を上げる農園もあり、それらのノウハウ蓄積や、アジア消費圏進出も視野に入れて発展して行くと結びました。

7月23日(日)

### 「私は『オンリーワン』として勝ち残る」

クレマチスの先に見え始めた別天地

有限会社渡辺園芸 / 株式会社クレマコーポレーション

代表取締役 渡辺 偉 氏



初日の話を受けて、実践している農家に、実際の話をしていただきました。渡辺さんはクレマチスという、手が掛かるがゆえに、競争相手が出にくい植物を選び、成功した方です。ロングテールの位置に居ながら品種群多く、気品ある花に賭けた人生で、オンリーワンとして市場を独占。クリスマスローズと合わせ1億5千万の売り上げを持ちます。苦労話も多く、植物の病気、身内の不幸、膨らんだ負債など。それを打開する銀行との交渉と企業展望と技術力の蓄積。市場外の開発もしつつ、市場とも手を組みます。単価を自分で付けるためです。

### 「私は『プライスリーダー』として勝ち残る」

みちのくから鉢売りに打って出た産業人

有限会社クリタ園芸 栗田 義夫 氏



見事な数字の分析でした。農業経営にここまで数字を出し、自分の経費だけでなく、相手の状況も鑑み、互いに無理のない線を探る交渉。プライスを出すまでの配慮の細かさは稀という表現でしょう。パートさんの携わった作目を15分ごとに出し、正確な生産原価を出します。よく訓練しました。その数字に則った交渉に、仕入れ会社も反論できません。その分、今、市場との縁は薄くなっています。

良く経営の相談を受けるそうです。「苦しい農家は数字を持たない」「儲かる品目と負担になっているものの分析が無い」とし、米と花を作る若い夫婦の実例



1階ホールにおける懇親会



1日目まとめの総合討論は活発な質疑応答がなされた

を示し、会場の聴衆にかなり参考になりました。また、普及員の仕事のこれからは「経営分析」と述べます。

生み出した利益は従業員にも還元し、海外旅行にも連れて行った事もあるそうです。前日の話にそった、すっきりと、具体的な内容の話でした。

#### 『『作るだけでは売れない時代』の普及指導員奮闘記』

千葉県 海匠農林振興センター 振興普及部 改良普及課

伊東 直美 氏



千葉県は首都圏そのもので、大消費地に隣接する地域です。その千葉北東部の海匠の農家をよくまとめ、資材などの園芸情報交換会と、産地を流通側に紹介する「ちば 花と緑の生産者紹介」に至った経緯の紹介です。この地域の有利さは、消費地に近いこと。品目数が多く、鉢物は個人で庭先販売、植木も個人対応、切花は東京周辺に個選共同出荷と組織連携しないで何とかなってきたのです。これは有利よりもデメリットそのものでした。

ここの変わったきっかけは価格低迷と台風でした。価格低迷からそれぞれの組織で勉強会が始っていました。そこへ平成14年の21号台風の被害は甚大でした。この復興から普及所が関わっていきました。台風に負けない施設の研修会がきっかけで、これが「園芸情報交換会」になり、2003、04、05、06と継続発展しました。また、これらの活動から生まれた動き、産地の



2日目まとめの総合討論。長岡求氏の進行で行われた

売り込み「ちば 花と緑の生産者紹介」は2003、04、05、06と実施され、すばらしい成果を収めています。

営農指導のなんたるか、新しい道を実証した講演でした。

#### 安藤会長の終わりの挨拶から

7名の方の話を伺いました。時代は動いています。今までに無いものが動き、花産業が変わろうとしています。さまざまな情報をもとに決断せねばなりません。今回は苦勞しましたが、感動と豊かな情報を提供できたと思います。伊東さんの例もあります。日本の農業指導員の姿が。技術が成熟すれば普及員の仕事は無くなります。栗田さんの経営の話にもあったように。生産者育種の担い手でもあるのです。技術の旗振り、指導者として産地をまとめて行く、経営技術を教える。豊富な情報を噛み締め、ビジネスチャンスとして挑んでいただきたい。

今回のセミナーは参加者の感想は好評で、会場からの声やアンケートにはかなり良い反応がありました。「ここ近年のセミナーの中で、一番良かった」「来いと言われて来ましたが、感動しました。良かったです」など。講師同士でも互いの話に感心していました。それぞれが別々の何かを確実に持って帰れた内容であったと思います。

テキスト購入ご希望の方は、代金2,000円（送料込み）を添え、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内「花葉会」事務局

TEL:047-308-8810 郵便振替：東京5-13341 花葉会

# 花葉会総会

10月1日（日）午後2時より、平成17年度花葉会総会が東京・芝パークホテルにて開催されました。55名の出席を得て、宮田増美幹事の司会進行で定刻どおり始まりました。

司会の宮田幹事より岩佐吉純相談役、植村猶行相談役のご逝去の報告がなされ、1分間の黙祷を捧げ、両氏のご冥福を祈りました。

次に、安藤敏夫会長より大学の近況報告。「園芸学部の学科の改組がなされます。生物生産学科、緑地環境学科、園芸経済学科の3学科制になって20年たちますが、昔の形に戻し、来年の4月から動き出します。大学院は、理学部・工学部・園芸学部の3学部共同で設立した自然科学研究科を解体します。4月からは、園芸科学研究科となり、園芸学部の上に設置されます。かつては修士課程だけでしたが、来年度からはその上に博士課程が置かれます。

今までは学部が中心で、大学院教員は、学部教員の兼務となっていました。来年度からは逆転し、大学院の博士課程が本務で、修士課程も学部も兼務となります。

大学院の学生の定員が満たされないと取り潰しになり、勿論学部も取り潰しになります。現在99の国立大学がありますが、それを将来的に60に減らすという、国の基本方針です。総合大学の小さな学部（千葉大学では園芸学部と看護学部）は合併の対象とされています。組織が流動的な時代で、厳しい環境に置かれています。我々は静かに、落ち着いて、ゆっくり、じっくりと勉強をしてゆくつもりです」と、締めくくりました。

午前中に開催された幹事会で推

薦を受けた長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。議題は次の通りです。

## 平成17年度事業報告

7月23・24日

第22回花葉サマーセミナー

10月16日 総会

花葉会賞の贈呈

17年度の実賞者は落合哲平氏（昭30別了）、青島尚祐氏（昭31園卒）、千藤猛司（昭31別了）、竹下大学（平1園卒）の4氏であった

6月26日～7月3日

第15回海外園芸事情調査

12月10日「花葉」25号発行

花産業必修1000属検定では、C級15名、B級4名、A級1名の合格者があった。

幹事会の開催は、平成17年6月19日、7月24日、8月27日、10月16日、12月3日、平成18年1月28日、2月12日、3月18日の8回。

## 平成17年度会計報告

### 収入の部

前年度繰越金	2,652,188
会報広告料	1,115,000
マゼンテキスト売上	103,000
書籍売り上げ	18,300
卸用カタログ売上	68,000
協力金	779,080
セミナー収入	0
雑収入	95,485
預金利息	14
合計	4,831,067円

### 支出の部

印刷費	121,800
会報関係	1,432,894
通信費	130,910
運送費	8,230
記念品代	126,000
会議費	272,292

事務費	297,563
賃金	377,340
慶弔費	17,625
税金	70,000
セミナーへの補填	155,383
雑費	100,000
合計	3,110,037円
差引残高	1,721,030円

## 2005年サマーセミナー会計報告

平成17年7月23・24日 日本歯科大学富士見ホールにて開催。

参加者数398名（うち幹事、講師、記者、発表者、学生等106名）

### 収入

受講料	
@30,000 × 176名	5,280,000
@27,000 × 21	567,000
@18,000 × 5	90,000
合計	202名 5,937,000円

### 支出

会場費	2,646,469
印刷費	1,009,575
運送費	198,040
講師謝礼	850,000
講師旅費宿泊費	619,000
通信費	21,000
事務費	286,722
会議費	300,000
税金	77,777
広告費	58,800
備品費	0
雑費	25,000
合計	6,092,383円
差引	155,383円

## 平成18年度事業計画案

第23回2006年

花葉サマーセミナー開催

平成18年7月22・23日（土・日）

日本歯科大学富士見ホール

花葉会賞の贈呈	定期利息	6,062
第16回海外園芸事情調査	預金利息	17
「花葉」25号 発行	合計	27,335,552円
花産業必修1000属検定	(平成18年3月31日 現在)	

## 平成18年度予算案

### 収入の部

前年度繰越	1,721,030
会報広告料	1,100,000
テキスト売上	50,000
その他の収入	800,000
預金利息	100
合計	3,671,130円

### 支出の部

印刷費	150,000
会報関係	1,500,000
通信費	140,000
運送費	20,000
記念品代	50,000
会議費	200,000
事務費	300,000
賃金	400,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	191,130
予備費	600,000
合計	3,671,130円

### 基金報告

前年度残高	27,291,863
きよ金	37,610

### 会則の一部改正及び役員改選

安藤会長より、会則第六条 副会長を1名から若干名に、第12条 その他 の項として、付則にある「この会の細則～」を格上げする、付則 は過去の記録を記載するとの提案。役員に関しては、助教授となった渡辺均氏を新副会長に、会計監査は花岡喜重氏退任に伴い河野幹司氏に、また、岩佐相談役、植村相談役のご逝去に伴い役員名簿からの削除の提案がなされました。

なお、それぞれの議題は、拍手をもって承認されました。

### 花葉会賞贈呈

総会に引き続いて、花葉会賞の贈呈がありました。鈴木司幹事より切花用キクの育種に多大な功労のあった山手義彦氏（園昭42卒）を紹介。安藤会長より「山手さんは日本の花文化を世界にアピールした文化の使者です。日本人の誇りです。心をこめて、花葉会賞を贈呈します」とお祝いの言葉と共に

に賞状と記念品が授与されました。

### 記念講演

初めに山手義彦氏より「こんな立派な賞をいただき、心から感謝しています。私は、家業を自分のビジネスとして展開しただけです。5年ほど前から、会社での第一線の仕事からは離れましたので、一番最近の状況は遠くなりました。30年間の私の育種と海外へ向けて開発した実績をお話したい」と、挨拶。「世界に羽ばたく日本のキク」と題して、精興園のオランダでの国際展望と市場戦略を講演されました。

### 懇親会

午後5時より田旗裕也幹事の司会進行で、懇親会が始まりました。長岡幹事長の挨拶の後、乾杯の発声を、今回の出席者の中で一番遠方より参加くださった小田善一郎氏が行いました。途中、岩佐吉純相談役の奥様でもあり、当会会員の岩佐昌子さんより、ご挨拶がありました。終始和やかな雰囲気で行いました。

閉会の挨拶は新副会長の渡辺均氏が行いました。

(文責：編集部)



## 花葉会会則（2006/10/1）

### 名 称

第一条 この会は「花葉会」という。

### 事務局

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部生物生産科学科花卉園芸学研究室におく。

### 会 員

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会員で現在花卉関連業務に携わる者、  
(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

### 目 的

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

### 事 業

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

総会 親睦会 研究会  
会報、名簿等の発行 功労者の表彰 その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

### 役員等

第六条 この会に次の役員をおく。

会長 1名 副会長 若干名  
幹事長 1名 副幹事長 3名  
年次代表幹事 若干名  
幹事 50名以内 会計監査 2名

(2) この会に名誉会長をおくことができる。

(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

### 役員等の選出と役員

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表する。

(2) 副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理する。

(3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表

して会務を処理する。

(4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6) 幹事は会員の中から互選する。

(7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9) 会計監査は会の会計を監査する。

(10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

### 役員の任期

第八条 役員は任期は2年とし、再選を妨げない。

### 会 計

第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3) 会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

(4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

### 会 議

第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3) 総会の議事は出席会員の2/3以上の賛成がなければ議決できない。

### 会則の変更

第十一条 この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

### その他

第十二条 この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定

する。

### 附 則

この会則は昭和56年9月6日から実施する。

この会則は平成9年10月26日から実施する。

この会則は平成10年10月17日から実施する。

この会則は平成13年9月29日から実施する。

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会則は、平成16年10月1日より施行する。

---

## 花葉会 役員（2006/10/1）

顧問：小杉 清

相談役：岩井英明、魚躬詔一、  
小田善一郎、鶴島久男

会計監査：林 角郎、河野幹司

名誉会長：横井政人

会 長：安藤敏夫

副会長：國分 尚、渡辺 均

幹事長：長岡 求

副幹事長：田中桃三、望田明利、  
武内嘉一郎

年次代表幹事：田中桃三、  
望田明利、武内嘉一郎、  
小笠原 誓、渡辺 均  
(年次順)

企画編集幹事：小泉 力、

鈴木 司、田旗裕也、  
羽毛田智明、宮田増美、

村井千里、山口まり、  
山田幸子、遊川知久、

庶務会計幹事：上田善弘、

小沢 勇、河合伸志、  
西原彩子、浜田 豊、  
福永哲也

事業基金募集幹事：秋山泰男、  
熱田 健、大林修一、

小笠原 誓、小黒 晃、  
久保田芳久、齋藤俊一、

荘 智裕、鈴木邦彦、  
竹下大学、富山昌克、

初山秀之、山下容子

(五十音順)

## 花葉会賞受賞者紹介

### 日本文化をさりげなく ... 山手義彦のキク

安藤 敏夫

日本語だけではない。不思議なことに何語でも、最高に敬うべき人物は呼び捨てにされる。エジソン、ケネディ、ジョン・レノン、坂本龍馬、新渡戸稲造...誰も「さん」付けはしない。

我が花卉産業にも、世界に向かって堂々と呼び捨てにしたい人物がいる。その筆頭は山手義彦（1944年6月20日生まれ。1967年千葉大学園芸学部園芸学科卒業後、精興園に勤務、1978年から同園園長、1988年から有限会社精興園代表取締役。大正10年からキクの育種を続けてきた精興園の3代目）。

山手の仕事は営利活動に違いない。しかし、それが日本文化の芳醇を世界に贈り届けるものであることを忘れてはいけない。

幕末に日本を訪れたロバート・フォーチュンは、世界の果て＝日本に広がる園芸文化に目を見張った。その驚きを山手は今も世界に送り続けているのである。

どこへでも妻を伴う、この男の自然体もいい。圧倒的に重層した日本の遺伝子資源を巧みに操りながらも、どこかさりげなく...そう、余裕すら伴って、日本の文化力を世界に誇示してくれる。

その発端は「精興の翁」というキク。純白丁字咲きの中輪。種苗交換として昭和53年(1978)にオランダ Revecu社に譲渡されたこの品種は「Refour」（レフォル）と名を変えて、1982年から1987年まで欧州市場を席卷した。1品種で20%シェアを占めたことは他になく、「化け物」とまで呼ばれた。端正な姿、花保ちの良さ、白サビ病抵抗性、それにあの白さ...それは日本人がこだわり続けてきた、日本の花文化が世界に問う白だった。

昭和62年に登録された「セイローザ」の欧州名は「レーガン」。ピンク重のスプレーギク。枝変わりをたくさん産んで、現在ではレーガンシリーズと呼ばれ、オランダで5億本も生産されている。それは欧州で生産されるキクの半数を上回る数字である。

エリザベスは1965年、生意気盛りのビートルズに大英帝国勲章の一つ、MBE勲章を贈っている。功績は外



記念講演であいさつする山手義彦氏

貨獲得だそうだが、英国の文化力を世界にアピールしたことを講えてのことに違いない。

食することもできず、ただその姿を眺めるだけの植物＝花は、薫り高い文化なくして生まれぬ。山手のキクが世界を往く。もしここが英国なら、彼はとっくにMBE勲章を授かっていることだろう。

国内の業績にも目を向けよう。昭和51年（1976）に発表した「精雲」は、耐暑性に優れた夏秋ギク。その誕生によって初めて平暖地の施設でキクの周年生産が可能となった。夏秋ギクの標準品種として、夏秋ギクの研究に用いられたこともあり、日本のキク生産技術史に燦然と名を残している。

平成7年（1995）に発表の「精興の誠」も時代の寵児である。20世紀末の20年間、日本の輪ギクに君臨したのは「秀芳の力」だった。作りにくいが品質に優れたこの品種が、バブル崩壊後の2000年を境に、生産性に優れる「精興の誠」に急速に置き換わって行った。白の輪ギクであっても、生産性が問われる時代の最初を「精興の誠」が担ったのである。

キクのイメージチェンジに挑んだ成果も特筆したい。平成2年（1990）発表の「金風車」に始まる風車菊シリーズは、肥後菊とスプレーギクの交雑で、そのさじ弁から生まれるツートーンカラーはスプレーギクに「和」の美しさを添えることに成功している。

平成10年（1998）発表の「セイポール」に始まるデルフィマムシリーズも、イメージチェンジに成功している。穂状についた花が下から咲き上がる性質は、キクという花のまだ見ぬ可能性を高々と歌い上げているように思えてならない。

## 世界に羽ばたく日本のキク

山手義彦

### 精興園の概要

本社は、福山市の郊外の住宅街の中にあります。住宅地での農場経営が難しくなってきたので、平成12年、広島県の中中部にある世羅台地に農場を造成開拓しました。地名に因んでセラمامという別会社にし、実質圃場の面積は10 ha、6,000㎡のガラス温室が2つ、ビニールハウスが約20棟(7,000㎡)露地圃場となります。

本사를 育種開発第1部とし、開発・選抜、母株(エリート株)の保存、周年生産向けの試作をしています。

セラمامを育種開発第2部とし、実生の第一次選抜と育種開発部第1部で選抜した開発途上品種の切花を年間約200万本生産し、全国の主だった市場に出荷し、切花品種の市場テストをしています。

ダッチライトのオランダ方式の6,000㎡のガラス温室は、おそらく、国内のキクの栽培温室では最大規模。温湯暖房を行い、年3.5作が可能です。キクは、日長と温度を操作しながら周年生産しますので、加温と電照、補光のためナトリウム灯をつけ、夏場非常に温度があがるので細霧冷房を、同時に細霧を使って薬剤散布、自動灌水、フラワーネットの自動昇降機、切花を運びだすベルトコンベアーを投入しました。

ここでのキク栽培は、挿し穂をソイルブロックに挿し、2週間ほどで発根したものを圃場に移し、直接、圃場面に置きます。草丈を30~35cmに伸ばす栄養生長期を3週間くらい取り、その後、日長操作(11時間半)をします。

### セラمامでのキク育種開発の流れ

キクは、秋系と夏秋(6・7・8月に開花するもの)系に大きく分けます。1年目の交配作業は、秋系で大輪を80種、小輪を50種、スプレー系を120種、夏秋系で大輪系50種、小輪40種、スプレー40種くらいを母株として交配をします。

次の年、100万本の実生をして、2,000~2,500本の第1次選抜をします。それをエリート株として、隔離された温室に取り込みます。

3年目は、2,500個体がそれぞれ季咲きのタイプがありますので、5月、9月、1月の作型と沖縄でも試作を

し、2次選抜で、200個体位になります。これから、最終的に開発部と営業部、経営トップで相談して50品種ほどを選びます。

4年目に、それを、セラمامの農場で切花の大規模生産(200万~300万本)をします。作型を変えて年間を通して栽培し、全国の市場に販売をし、市場での評価を検討し、集計を取ります。

新品种は、生産性を追及するのではなく、商品性が重要であることが、この低成長の時代に明らかです。この評価を見極めて販売するので、交配から実際に発売になるまで4~5年かかるサイクルです。

### 育種目標

育種開発の目標は、優れた形質、新規性、花持ち、草姿など、花の一番大事な商品性を見ます。

一方、生産性で一番大事だと思っていますのは、秀品率ですが、そのほかに早生性、耐病性、周年生産性、輪ギクの芽無し性、苗としての生産性も重要です。

### 育種・選抜システム

育種家は、私もそうでしたが、往々にして情緒的・感覚的であります。これからは、私どものような弱小の育種会社が成長していくためには、組織として科学的な育種を取り上げていかなければなりません。

具体的には、できるだけ感覚的なものではなく、客観的な数値をだしてその品種の評価すること、放射線育種、系統選抜育種を採用しています。

当社の営業開発部の組織(ERシステム)の中心に品種管理登録があり、すべてのデータをそこに取り込んでいます。営業も開発もだれでもすぐタッチできて、その品種の評価を見ることができ、新人でもすぐに育種開発に取り組めるようなシステムです。

試作の評価は、数値で決めています。2002年から評価委員6名を決めて、個人の主観ではなくて、大勢が関わって客観的な数値で評価・選択を決めています。

### オランダと日本の生産規模比較

オランダでは、キクの実産量は年間約15億本、バラに



レーガン



ユーロ

次ぐ品目です。生産農家は約500戸で、農家1戸当たり300万～400万本の規模になります。一番大きな農家は年間3,000万本くらい生産しているといわれています。一方日本では、20億本、農家数約11,000戸、1戸の平均が18万本です。

生産システムの違いでは、日本では苗の90～95%が自家増殖です。一方オランダでは15億本のうちのほとんどが専門生産農家から苗を購入するのが通常です。

オランダの3大花卉の輸入比率は、バラ42%、カーネーション63%、キクは0%。キクは100%オランダ国内で生産して、世界へ輸出されています。

### キク生産のオランダシステム

切花用苗の穂木はすべて海外（南アフリカ、ウガンダ、ケニア等）の低賃金・燃料が要らない・光がある・広大な土地があるところで、生産をしています。

オランダの穂木を輸入し、苗会社がソイルブロックに挿し芽をして発根した状態で、農家に配送します。購入した農家は、ソイルブロックをそのまま土の上に置き、それを60日くらいで出荷をするという体制を作りました。非常に効率の良い方法で、高賃金である場所でも世界一のコストパフォーマンスを持った生産国になったのです。それが、海外から入ってくる切花を駆逐したと同時に、国内で生産した切花を世界へ輸出するというシステムを作りました。

### オランダでの国際展開と市場戦略

1978年、オランダの Revecu 社に譲渡した 'Refour (レフォルル)' は中輪の純白、丁字咲き、白サビ病に強いことで人気を得、1982年から86年まで、1品種でオランダ市場の20%を独占しました。

1988年、'Reagan (レーガン)' をオランダに送り込みました。ピンクの一重のスプレーマムです。これは花の美しさ、均一性の高さで認められました。その後、放射線育種によって生まれた数多くの枝変わりの品種群は10年で85品種。オランダのスプレーマムの生産本数は約12

億本、このうち、Reagan Family の市場占有率は、1993～2002年で平均50%（1999年は60%）を占めています。

なお、1992年、オランダには苗生産会社が11社ありましたが、合併により、2002年には5社に、2006年には4社になっています。

低成長下のオランダでは、育種会社と苗生産会社、切り花生産農家が垂直統合へ向かっています。こうなると、差別化できる希少品種が選ばれ、苗生産会社の販売独占品種が台頭し、同品種を軸にした垂直統合がおこなわれます。そして苗生産会社から育種会社へ市場支配力が移動します。低成長下では、スペシャリティー品種の台頭があるのです。

'Euro (ユーロ)' は苗生産本数 / 販売本数を制限して発表された史上初めての品種です。これは切花生産農家の品種差別化を実現し、需要量を超えない供給量による花の高価格を維持できるもので、育種会社も苗生産会社も利益幅を確保できるものです。

これからの時代、生産性の過度の追及から商品性の重視へと大転換を求められています。そのために、マーケティングを重視し、消費者ニーズに沿った新品種を開発し、多品種少量供給でキクのイメージアップと全体のパイ拡大を図らなければなりません。育種会社の重要性が増し、マーケティングに多大な再投資が必要とされる時代に突入したと認識しています。

### 今後の展開

今後重要になる日本にとっての国際戦略は、中国とマレーシア・韓国・台湾を含めたアジア地域だと思えます。そこへ向けて、私ども育種会社として、ここ2～3年のうちに方向づけをしてゆかなければいけないと思っています。

国内の生産農家が一番の重要なお得意さんで、国内の切花生産農家の発展と海外への生産拡大を、微かなパランスを取りながらやってゆかなければなりません。広く海外を見ながら、世界市場に向けてキクの育種開発の展開をしようと思っています。

(文責：編集部)

---

---

## 花葉会基金への献金をお願い

花葉会は、会員相互の親睦、研鑽と情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とし、総会、親睦会、研究会、会報、名簿等の発行、功労者の表彰等の事業を行っています。

おかげさまで、多くの方々からのご支援・ご協力により、上記の事業をどうにか円滑に運営しております。

さて、会報「花葉」創刊号等でおりました花葉会基金は、25年目を迎え、平成18年3月現在、2,700万円を超えました。しかし、昨今の低金利の状況では、花葉会がさらに発展し、花葉会の目的を推進するための事業を展開し、情報の収集・交換などにより後輩の育成を行うには、この花葉会基金の充実をさらに図ることが必須であります。

是非、花葉会の趣旨に賛同していただき、献金をお願いしたいと存じます。ご協力のほどよろしく願いいたします。

なお、ご送金につきましては、通信欄に「花葉会基金」と明記の上、郵便振替：東京5 - 13341 花葉会をご利用ください。

花葉会幹事一同

お問合せ：「花葉会」事務局

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学 園芸学部 花卉園芸学研究室内 TEL: 047-308-8810

---

---

## 編集後記

『花葉』25号では特別寄稿：岩佐吉純氏追悼集を企画。そして25号全ての内容を決め、執筆依頼が済んだあとに、植村猶行氏の訃報が届きました。そのため誌面の都合上、植村氏追悼の原稿は3名の方だけをお願いすることになってしまいました。申し訳ありません。

植村猶行氏は『花葉』創刊に寄与し、本誌の編集人としてご活躍。そして後任の私に、編集の技術を伝授してくださいました。定規とコンパスを手に、編集は算数なのだ、変な納得の仕方

をして笑われたのを覚えています。本誌の編集後記を繰っていくと、平成5年13号の頃のこのようです。ありがとうございました。次の編集人に引き継ぐまで、がんばります。

「卒業生から電話をもらいます」と話してくださるのは、本誌の若い執筆者選考担当の渡辺均助教授。反響があるとうれしいものです。24号の「園芸をテーマとした絵本を探す」には、「園長が作った絵本ですが…」と、蘭ミュージアム高森(長野県)副園長の小

林重信さんが送って下さいました。

『クレスのランものがたり』全12巻(唐澤耕司/文 鈴木玲子/絵 みらい企画 律)ランの種類が多さ、奇妙奇天烈な花形と受粉の仕組みにおどろかされます。読んでみてください。

花葉会ホームページ(<http://www.kayoukai.net/>)をご活用ください。ホームページへの記事掲載、および『花葉』への寄稿は、花葉会事務局宛、または編集人(E-mail: [flower@mua.biglobe.ne.jp](mailto:flower@mua.biglobe.ne.jp))へどうぞ。

---

花 葉 2006 No.25

平成18年12月10日発行

発行人 安藤敏夫

編集人 山田幸子

発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学 園芸学部 花卉園芸学研究室内

<http://www.kayoukai.net/>

編集 2フローラルプランナーズチーム

写植・印刷 1 インタラクシオン

# 信頼と信用を第一に

清水製菓 S. 59 画  
山本岳史 H. 4 画  
河村安泰 H. 5 画  
佐々木北斗 H. 18 画



- 情報満載の映像セリ
- 便利な予約相対取引
- ビジネスチャンスを広げる  
ネット取引 TOP NET



愛知豊明花き地方卸売市場

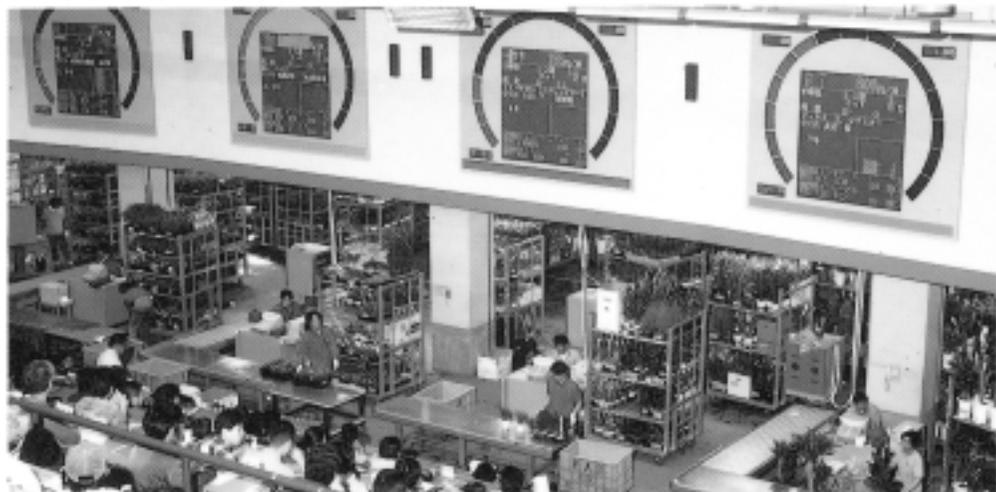
## 豊明花き株式会社

ようこそTOYOUKEへ  
[www.toyouke.or.jp](http://www.toyouke.or.jp)



〒470-1141 愛知県豊明市阿野町三本木121番地  
Tel.0562-96-1187代 Fax.0562-96-1188

# F A J は花卉の新しい流通をめざす会社です



東京都中央卸売市場大田市場花き部

## 株式会社 フラワー オークション ジャパン

〒143-0001 東京都大田区東海2-2-1  
TEL. 03 (3799) 5525 FAX. 03 (3799) 5434  
ホームページ <http://www.faj.co.jp/>



FLOWER AUCTION JAPAN



花持ち一番！  
オリジナル  
カスミソウ  
‘アルマイル’



山梨県北巨摩郡小淵沢町上笹尾3181  
TEL 0551-36-5911 FAX 0551-36-5900  
(株)ミヨシ営業育苗センター  
HP <http://www.miyosi.co.jp/>

商標登録第4849854号

**太陽の申し子**  
真夏の太陽の下でも  
元気に咲き続ける  
画期的な新素材！  
2007年は、斑入り品種  
が登場します。

**NEW**  
斑入りサマモン  
品種登録出願中

**オレンジ**  
品種登録出願中

**ホワイト**  
品種登録出願中

**サカタのタネ**

株式会社 **サカタのタネ** 〒224-0041 横浜市都筑区仲町台2-7-1  
TEL 045-945-8800 (代表)

タキイ交配 ひまわり

**F1サンリッチ**  
**オレンジ50** (New)

草丈が伸びすぎない50日タイプ

草丈が伸びすぎない長日期でも  
程よい草丈におさまり、  
栽培しやすくなったオレンジ色品種！

**タネはタキイ**

株式会社 **タキイ種苗株式会社**  
本社/京都市下京区梅小路通猪熊東入〒600-8686  
TEL(075)365-0123(大代) FAX(075)365-0150(代)  
支店/札幌・仙台・東京・福岡 農場/滋賀・北海道・茨城・長野・和歌山

[www.takii.co.jp](http://www.takii.co.jp)